崖転落で異世界こんにちは

【弐】

お試し！！

お試し：崖下転落で異世界こんにちは【弐】

ろっきゅん

あれから数日。
避難してきた町民の老人が持ちこんだ新聞と、そしてその老人の言葉で、真田達は上から知らされなかった全てを把握した。

見させられた新聞に載るのは、闇の霧の中を歩く巨大な鞘を携える大男。
たぶん真田が見上げた鬼だと思われる。

そして、近隣の開発地帯で起った山での自殺者の話を聴く。
報道関係は口を合わせたように少年の死を悼んで山の開発を止めたと言い張るが、実際は砕けた死体の真下から鬼が現れた為に計画は頓挫。

騒ぎの収束を待つ間。現土地所有者になる業者が土地の存在をマスコミに注目させ美談を煽り、値段をつり上げ、他の土建業者に慰霊塔交じりの公園作成を持ちかける計画が成されているとか。
しかも買い取った業者の裏に政治家がいて、圧力でマスコミを動かし土地の売買に絡んでるだのと、やけにきな臭い話も聴かされた。

「この街は死んだ少年……禄武シュラの呪いで鬼が沸いたんだよ」
話の最後に、事情通の老人はそう言っていた。

その話を思い出して真田はメットを外して髪を掻き毟った。
「自殺した禄武シュラが鬼を呼んだ……ね。馬鹿馬鹿しい、とはもう言えないか」

「あれ、今の老人の話ですか？」
真田に応えたのは、あの時から組む様になった島崎だ。

「ああ、もう俺も見ちまったからな」
「知ってます真田さん？　あの時に鬼と戦ってたおっさんが、その禄武シュラの父親らしいですよ」
「あの時のつるっつるの？」

「ええ。警察の話では、銃も効かないあの化け物に、もう二度も刀で挑んでいるとか。でも、折られてましたけど」

剣を振る真似事をする島崎の言葉を聞きながら。異様に澄み渡っていく大気の中、溢れる入道雲と蒼天の空を見上げた真田は小銃を片手に誰にも聞こえないよう呟いた。

「……あんなのに近づこうって度胸だけでも凄いよ」

搬入作業。重火器の点検。

民間人への食品と並列で降ろされる弾薬やランチャーの数々。

これが平和な日本の地方に配備されるような装備と一体誰が信じるだろう。そんな事を思いながら各自が弾薬の数まで受領個数を数えていく。

「真田さん、白井さんはあれから大丈夫なんですか？」

校舎内の廊下を共に歩く沖田。その言葉に返したのは真田の生返事だった。

体育館の避難場所から校舎内に招かれた小学生が授業を行う光景に眼差しを向けていた。

他のセンターや公民館に移動してる生徒は来てないが、現地でも同様に授業を受けさせている事は無線通信で知らされている。こんな時でも徹底して義務教育を行う行政に多少寒気を覚える真田だが、

「真田さん……？」

「あ、いや。なんだっけ？」

「白井さんですよ。あの日、化け物と対峙してから、体調を崩して校舎内での作業班に回ってるじゃないですか。……真田さん……本当に大丈夫ですか？」

「あ、ああ、大丈夫だよ。白井なら校舎内で、防衛設置やら避難誘導の係りについてるって聞いたけど」

相槌打つよう話を返すが、瞼を閉じれば鬼が見える。

あの時、無数の弾丸を受けて平然としてた鬼がもう一度現れたらどうなるのか。

そんな事を考えて気もそぞろだったのだ。

「ああ、来ましたよ！」

二階の一教室。

そこは物品を大量におさめた補給庫になっているのだが。到着と同時に叫ぶ沖田の声に窓からグラウンドを見れば、遂にというべきか。戦車が二両配置されていくところだった。

先の戦闘を上田三等陸曹に報告した結果、近くの陸自から緊急で配備されたのだ。

突然現れた戦車に各クラスからも小学生の歓喜の声が無数に響き渡ってくる。

「あれなら、鬼が出ようが蛇がでようが怖い物なしでしょう！」

沖田も嬉々と叫ぶが、とても真田はそんな楽観的には観れなかった。

教室に続々と運ばれたコンテナボックス。

そこから皆で物資を取り出し書類と不一致がないか確認作業に入っている。それらは訓練時代には触れる事があっても赴任してからは触れる事の無いと思われた、人を瞬時に殺せる凶悪な武器の数々だ。とても小学校に不似合な存在。小学生には見せたくない高破壊力の兵器に加え、ついに戦車まで配備された。

「これからどうなるんだ……」

そして真田も気づくのだ。

富士の広大な演習場を一番使い、そして大量の武器を操れる、自分たちの部署だからこそここに派遣されたのだと。

力無く見上げる蒼の空が、少し黒ずんだように感じられた。

雨雲だろうかと真田が訝しんでいると。

「あれ白井さん、身体大丈夫ですか？」

沖田の素っ頓狂な声が意識を強制的に現実へ戻させる。そして後押しされて振り返れば、扉の前に白井が立っていた。

ただ、酷くその顔は蒼褪めていた。

「大丈夫か？」

「……あ、はい。すいません、御心配を……おかけして」
余りに顔色の悪い白井に真田も不安を余儀なくされるが、もうすぐ昼も迫ろうという時刻。
――警報が鳴ったのは、丁度この瞬間だった。
「な、なんだ!?」
「屋上からの入電で、ターゲットが出たそうです。上田三等陸曹、聞こえますか――」
応えたのは他の駐屯地から派遣された隊員。そのまま無線で上田とやり取りを始めるところから彼の直属のようだ。
「ターゲットって……何です？　例のでしょうか？」
真田に沖田が問う。
不審に思うのはもっともだと真田も思った。
北富士の隊員は、ターゲットなる物を一切知らされていない。あくまで非難した民間人の護衛と誘導だ。
が、訊かないでも把握できる。
例の鬼がやってきたのだ。
そして校舎内の放送施設を使って大々的に火急が告げられた。
「ターゲットが市街を跳ねるように飛んできます！」
隊員が無線で呼び合っている。
外の色が、ますます闇色に染まっていく。
変だ……とは思うが。
それよりも周囲が慌ただしい。巨大な重火器であるガトリングガンＧＡＵ－17が二人一組で校舎のいたるところへ配置されていくのだ。
室内に響く放送の声に、廊下に生徒と教師が現れた。
体育館への誘導を待っているのだ。
担当にあるのは、――白井だ。
「おい、白井、子供たちを早く講堂へ案内を――」

「……彼らが、くる……」
　ふら付く彼女が扉にもたれて確かにそう言った。
「ああ、やばい連中なら来てるよ。だからこれから――」
「……違う！　違う違う違う……彼らじゃない……」
「彼らじゃないって……白井？」
　魘されるように語る白井は身体をビク、ビク、っと震わせていた。
　ありえない挙措。
　その異常に、真田は白井の肩に手を掛けようとした――瞬間。

　――ドン――ドドン――

　地響き二つ。そして、

――――――――――――――――!!

　異様な衝撃と、破砕音。
　それらが校舎を酷く揺すっていく。
「なんだ、一体なにが――」
　言葉の後半は声にならなかった。
　真田達の目の前で、教室の窓ガラスを叩き落とすように、砕きながら一直線に階下を目指す何かが降りて行ったのだ。
　衝撃で窓辺の隊員たちが吹っ飛ばされ、廊下側の壁まですっ飛んでくる。
　真田と沖田は崩れた窓辺に乗り出し、
「嘘だろ、上からきやがったのか!?」
「真田さん、あれ――」
　沖田の指さす先で真田も茫然とする。
　鬼が、さらに三体増えていたのだ。

「連中四匹いますよ!?」
沖田の声に真田はもはや言葉が送れない。
地上からの怒号。叫び。そして動き出す二両の戦車。
各教室から隊員たちが銃器を覗かせると、無線からの上田の興奮する声と共に砲撃が始まった。
避難誘導で体育館へ向かう小学生たち。その合間にガトリングガンが火を吹いた。
弾かれるように真田も持ち場へ駆けだす。
虚ろな白井の手を掴み、沖田共々走り抜け、廊下に設置してあるガトリングのシーツを外すと沖田と共に教室へ。そこには上田と同僚がロケットランチャーと火炎放射器を撃ち続けていた。遅れまいと運び込み、窓ガラスから砲身を覗かせ作動させる。
鳴り響く銃撃の音。
ランチャーが放たれ、寸分狂いなく鬼へ当たる。
さらに火炎放射器も全てを焼き払うよう放たれる。
――なのに、平然と鬼どもはやってきた。
加速して校舎に体当たりを仕掛けてきた。
その衝撃は大気を揺らし、
「ちょ!?」
まだ幼さの残る小柄な沖田から悲鳴をあげさせる。
そして各教室では、衝撃に飛ばされた隊員たちから、何かを圧縮したような鈍い悲鳴が響き渡る。背後からは子供たちの絶叫も響いてくる。
それに鬼が笑い、校舎の中へ腕を伸ばしたのだ。
体育館に人がいる事を悟られたくはないが。いずれにしろ行動から見れば、あまり知能が高いようにはみえなかった。
「もしくは……子供にしか興味がないか……」
「え、な、なんですか！」
「なんでもないよ。どっか捕まってろ！」

四つの衝撃。
間髪容れず放たれる拳。
構えた照準器の向こうで見えてしまった、吹き上がる飛沫と悲痛な絶叫。砲身を向けてた真田は、二度とそこから銃撃が行われない事を理解する。
しかも鬼の二体が、中から叫ぶ自衛隊員を掴みとり。

「あああ、真田さん、真田さん助けて！」

「――真田さん、島崎が！」

沖田の叫ぶ声に返す間もない。
ガトリングを照射して、なんとか島崎を解放させようと撃ち続けるが。悲鳴をあげる島崎は手足をばたつかせ抵抗、意にも介さない鬼は……

「――あ、あ、真田さああああああああああああああああ!?」

平然と噛り付いた。
その光景は、まさに頭からだった。

叫び声すら喰らう様に、その行為さえ許さないように、硬質な存在を砕く酷い咀嚼音を上げて鬼が喰らう。
幾度もその凶悪な犬歯を覗かせる。

それはもう一体も同じで、悲鳴を上げた隊員がその口腔へと消えていく。
その光景は、校舎から重火器を覗かせた全ての隊員たちを沈黙させるには十分だった。無線で司令塔の役目をする上田すらもう声を上げられない。
幾度も響く不気味な音。

……ぐちゃ、がり、ぐちゃ、ぐちゃ……

ただ空間に異様な音だけが響いていく。

「――うっ!?」

耐え切れなくなった沖田がよろけ、廊下へ嘔吐を繰り返し吐瀉物をまき散らす。
しかし、それは鬼の一体の注視をむけさせた。

「まずい!?　――沖田！」
慌てて照準をそいつに合わせ、そして螺旋の爆撃のようにGAU-17ガトリングガンを作動させた。

外が酷く暗くなっていく。

しかし、それは黒い雲のせいではないと真田も理解していた。鬼の身体から闇色の霧が漏れ出し広く空を覆っていくのだ。
まるで平和な世が終わりを告げたことを表すように。望みの光はないかのように。

「それでも――」
闇の霧の中を塗りつぶそうと、必死に硝煙が膨れ上がる。

「真田、さん……？」
「ほうけてんじゃねぇ沖田！　ベルトもっと持って来い！　島崎の弔いだ、撃って、撃って、撃ちまくるぞ!!」
「は、はい!?」

削岩機のように放たれる銃声。
周囲も真田の行動に触発されて銃撃を開始していく。

ベルト装填が絡まらないよう調整しながら無数の弾丸を飛ばし、真田はただ歯噛みした。何故ならそれは、弾が鬼の身体に当たると、全て弾きかえっているように見えたからだ。

「……絶対、まともな相手じゃない……」
「あいつ全然無傷ですよ!?」

「市岡、まだ調整終わらんのか!?　動き次第側面からぶっぱなせ！」
無線に叫ぶのは部隊を仕切る上田だ。そして叫んだ先はグラウンドに配備された戦車。その一台が校舎側面へ移動し間髪容れずに砲撃を開始した。

それは狂いなく鬼の一体にあたって爆炎をあげさせるのだ。

「やりましたよ！」叫ぶ沖田。

「いや、駄目だ！」否定する真田。

女だろうか、若干大胸筋に丸みを帯びさせた鬼が戦車へ突き進んでいく。

正面から砲弾を受け。それでも進み。やがて戦車が玩具のように拳でスクラップへ変貌させられていく。

凄まじい爆発がグラウンドに展開された。

唖然とする上田の前で、真田は拳を振り上げ、行き場がなくて硬直する。

しかも戦車の爆破に廊下から悲鳴と鳴き声があがり続け。

「まだ逃げてないのか！」

「白井さんがおかしいんですよ。みんなの誘導もしないで立ってるだけで」

沖田が説明をくれるが。

「白井、何やってんだ！　餓鬼どもを見つからないように避難させろ！」

校舎から体育館には連絡通路はあるが壁が無い。下手に向かえば見つかり易く、その為に避難もできず廊下で立ち往生してるのかもしれないが。それでも校舎裏に行くなり何か方法をとってほしかった。

そんな叫びを聞きつけたように、鬼が真田の真正面に顔面をのめり込ませてやってくる。

「うお!?」

「真田さん！」

咄嗟に砲身を向けるが、ヒートし始め赤色と異様な熱を帯びた砲身は、ついに空回りを始めてしまう。

「……弾が切れちまった」

「だったらランチャーで!?」

「馬鹿、こんな間近でやったらリバースするぞ！」

鬼に迫られ錯乱した沖田の行動を制止。

巨大な顔、先日であった鬼は３ｍ程だった気がするが。すでにそいつはそれよりでかい。しかし巨躯の化け物は一切真田達に構わず、小さな子供達を的確に狙って腕を伸ばしてきた。
咄嗟に火炎放射器を向けたのは上田だ。

しかし鬼が気づく――

「ぎッ!?」
叫び声のみ。

入り込んできた化け物が奮う腕で、上田三等陸曹の身体を一瞬で通過する。

びしゃ、

遅れて耳朶を揺する濡れ雑巾を叩いたような音に真田が視線を向ければ、廊下側の壁にぶつかり崩れた肉塊が、夥しい血と、臓物をまき散らしている。
そして小さな物体が横に跳ねて、それは白井の腹にぶつかった。

――上田の一部だった。

「――い、ぃあああああああああああああああああ――――――!!」

静かだった白井が悲鳴に悲鳴を上げ続けた。
半狂乱になる白井を助ける様に、真田が予備の弾薬のベルトを装填。しかし、打ち出すところで鬼の手が祓われ、ガトリングが中ほどから存在を消失した。

砕かれた部分が離れた場所で、鈍い音を立てて砕け散る。

「あ、あ、……あああ」
真田から漏れる呻き声。

反応する鬼の闇色の眼が、怯えた真田と沖田を捉える。
そして鬼は勢いよく上体を校舎から抜き、その巨木の様な腕で腰の太刀を抜刀。嶮山のような無数の牙を露わにさせて振りかぶり――

「――――――――――――!?」

真田が死を覚悟した、まさにその一瞬だった。
光芒のように輝きが走る。

……ズル……

そんな鈍い音をだして、
「……え？」
沖田の間の抜けた声と同時に、鬼の胸元から右腕、そして頭が前のめりに迫り、鬼の巨体が崩れ落ちてきたのだ。

悲鳴をあげる沖田。
唖然とする真田。
そして斜め一文字に作られた痕。
そこから間欠泉のように吹き荒れる闇色の血飛沫。
ふら付く真田が窓辺に向かい。
そこで見るのは残った鬼の半身へ、

――邪魔だ――

その凄まじい太刀筋、吹き荒れた異常な風。
風は戦慄き、大気を揺らし、皆が校舎から注目する。

その前で、一瞬で鬼の残りを砕き、その膨大な返り血を頭から平然と浴びる、着物を纏う一人の少年の姿。
まるで小さな風の鬼が太刀を持って現れたような、そんな姿に、皆はただ茫然と立ち尽くすのだった。

飛来した蒼穹色に輝く閃きは、敵に有無を言わさず両断する。

闇に包まれた世界での光源は、巻き散らされた黒の霧に抗おうと自衛隊からの照明設備。
それらが縦横無尽にシュラを照らし出していく。

斜め一刀に切り捨てられた化け物は、前傾りで上半身を校舎にめり込ませ、巨大な太刀を大地にさした。
と、同時にシュラが納刀すれば上下が泣き別れ。周囲が息を飲む中で、音を立てて鬼が崩れていく。
完全に銃声もやみ、他の鬼も硬直する。
静寂に包まれる異様な世界。

が、その一体が、奈奈の手により、細切れにされて血煙をまきちらした。
夥しい血と肉の塊は大地に巨大な水面をつくる。

「こいつらが、闇の鬼――」

そこで禄武シュラは、切り捨てた化け物が落した太刀の弱さを確かに見た。
「間違いなく同種の太刀。しかもこれは、やはり黒霧斬とは違う。あれならば深々と大地までささるはずなのに」

しかも主を失った太刀はシュラの物と寸分違わぬ尺に変え、巨大な溝から大地の支えを失いゴロリと無様に転がった。

連中の所持する太刀。

「連中が持っている太刀はこれだ……まさに瓜二つ。しかも伸縮自在かよ」

シュラの父も確かにそう言っていた。
それを踏まえて覗きこめば、父に教わった傷が色濃く鎬(しのぎ)に刻まれている。

「本当に量産……されたってのか」

そして、銘の違いから来るものなのか。
それとも太刀の性質かは知らないが。

いずれにしろはっきりしたのは、自分が持っている黒霧『異』は、間違いなく連中と同じように製造されたものだと言う事。
そして、それは本家黒霧には比べるべくもなく威力は劣るという事。

……パキン……

音を立てて化け物の太刀は独りでに粉になって霧散していく。
風が流れ、その粉を飛ばし、後には何も残らず太刀が作った痕だけが大地に残っていた。

それを見て、シュラは思う。
この騒ぎの元凶。
それが何故か近くにいる。そんな気がする。

闇に包まれた校舎の中から人の気配は無数にする。
そして壊された戦車や、残った戦車。野営に張られたテントの中でも人はいる。

……なのに、それ以外からも視線を感じるのだ。

まるで、この騒ぎを楽しむように愉悦するように。
そこに誰かが居て。

誰かがシュラの内面に向けて、嘲りで笑いを奏でているような。
ゾクリとする背筋を通して、それが妙にはっきり感じられる。

人の殺気を、そして気配を明確に捉えられるようになったが為か。これから広がる事象に酷い虞（おそれ）を覚えてしまってるのかもしれないが。

シュラは一度闇に包まれた天空を睨む。
せめて、天空から差す救いにも似た一条の光を見たくて。
けど、そんな今にも溢れそうな光を讃えた眼差しが、捉えられるのは救いの光芒ではない。

「……あの時……俺が持ち込まなければ……こうはならなかったってのか？」

何故か、あの日。
この世界から逃げ出して持参してしまった太刀を思い出してしまう。

揺らぐ網膜に飛び込む広がる世界。

薄汚れた校舎を闇がさらに汚く包む、現実離れした異様の世界。
子供が集う学び舎とは思えない惨状の中で、未だ黒煙を噴き上げる車両や、校舎から垂れる人の夥しい血の量。

怯えるように、竦む様にみつめてくる校舎からは、戦っていた兵士たちが覗いている。
それらを見るだけで酷い悲しみが込み上げてくるのは気のせいなのだろうか。

それらを踏まえて、シュラは薄らと気づいていた事に、自ら心で肯定してしまう。

大気に漂う黒い靄。
それはまるで、
「……俺が天和から持ち込んだ……のか？」
そんな錯覚にまで包まれた気がした。

いや、ありえない……

「――邪魔だ――」

押し殺す声で、回転一閃、立ち塞がるもう動かない巨大な半身を切り捨てる。展開されている世界がこれ以上みたくなくて。
自分が歩んできた道の先に転がっている現実が、……もう嫌で。

錬気をふんだんに含んだ黒霧『異』が、同種の担い手へ煌めきを遺憾なく振るう。

威力に化け物の下半身は線ではなく乱雑に砕かれた。
舞った風が、ぶわりっと吹き上がる。
そして押しあげた血飛沫や肉塊が、雨あられとシュラの身体を血に染めていく。

天の底が抜けてふったような土砂降りの雨。
しかし、それは恵みの雫ではなく黒ずんだ血の色だ。
鉄と、腐食した果実が混ざったような、一嗅ぎすれば吐き気を催す淀んだ臭気。それが大気に広がり嗅ぐ者の顔を顰（しか）めさせる。

……これは何だ。

自分が仕出かしたが為に人が死んでいるのか？
「いや、違う……。例え俺の太刀がなかったとしても、いずれ作られて、ここで広がっていた。……そうに、違いない……」
そう考えなければ、気が狂う。
でも、皆は言っていた。

――俺が死んだ場所から鬼が沸いた。
おれが、地獄から招いたのだと――

「違……ぅ、俺じゃない……」
震えた呟いた言葉に、一瞬視界が揺らぐ。
なんでこんな事を感じるのだろう。
ただ、同じ太刀なだけじゃないか。……なのに、不安が広がっている。
その意味は未だにはっきり解らないのだが。

「――斬九郎！」
奈奈の叫び。振り返れば女の鬼と、色濃い瘴気をふきあげたもう一体が迫っている。

そんな状況でも、シュラは叫んでくれた奈奈へ、背後で血だまりの中から見つめてくれる美よう●ょを振り返る。

奈奈はそれにきょとんとした眼差しを向けた。
でも、その広がる血の池はそれすら自分が招いてしまい、その為に今あんな小さな子供が鬼と対峙しているのでは、そう心が少しずつ蝕まれるようだった。

「違う……俺じゃないんだ」
シュラは納刀。

なのに錬気が震えた。
下がる感情とは別に、急激に錬気が上がってしまったのだ。
それでも必死に制御。

「……禄武流居合……百舌鳥（モズ）落とし」

逆に二体へ間を詰めて。

――――――――――――――――――――二閃

大地を削る『真下(逆)からの切り上げ(風)』が、右手から迫る鬼の右腕を飛ばし、抜けざまに落とす刹那の斬撃二手目が、左手から迫る女鬼の左腕を両断する。

残像残すほどの駆けた威力に風が唸り、大地に疾走した跡が走る。

けど、

「斬、シュ……ラ？」

地面から湧き上がる様に吹き荒れる風。

それが奈奈には何故か酷く哭いているように聞こえたのだ。

鬼たちが絶叫をあげていく。

シュラは夥しく浴びた返り血の身体に、さらに返り血を浴びた顔で虚ろな双眸から鬼を見る。

女の鬼の瞳にはありありと恐怖が浮かび、咄嗟に自らの腕を掴みとると、隣接する山へ向かって走り去ろうとしたのだ。

そして残った鬼が彼女を逃がすように立ち塞がり、シュラは、地面を蹴っていた。

そして鬼の巨大な頭部に五指から集める。

掌から放出する錬気の塊を構築して――

「――風打ち――」

その頭部を、一切の情けなく吹き飛ばしていた。

「斬九郎、急げ、逃がしたら駄目だ！」

奈奈がシュラの肩にのる。

奈奈を受け止めただけなのに、何故か背負った錘籠がやけに重く感じた。

そしてシュラは動こうとした足を止めた。

最後に射抜き殺した鬼から零れた太刀が、自分の太刀と同じような大きさになって塵となっ

て消えていく。それに連動するように、その砕いた化け物は身体を縮小させ、人の姿を構築したのだ。

「これは……」
奈奈が呻く。

「……やっぱり、ただの人なんだ……」
太刀を奮ったが為に、相手の技量が読み取れていた。
そこから判断して、強い者とは思えない。
転がる男が誰とは解らないが、首元でジャラ、っと銀色のプレートが血だまりに落ちる。
それはたぶん自衛隊の認識票。

それを見留めてから、シュラは何故か一礼していた。
理由は判らない。

そのまま、
「早駆け……」
シュラは、鬼の女を追うべく走り出していく。
何もできずに立ち尽くした自衛隊の守る施設から、まるで走り逃げていくように。

……焦燥だろうか。
ただの怖気だろうか。
理由は判らないが嫌な予感がひどかった。

森に飛び込む巨体が見える。
「捕まえないと」
「ああ、その方が考えるより早い」
まるでシュラの心を見透かすような奈奈の発言。それに苦笑しつつ走り続ける。

捕まえ、確認したい事がある。
太刀の事。錬気すら表現できない世界で、皆が確かに見てる存在。それは天和では太刀所有者以外は一切他人がみえなかった黒い靄の事。
それを皆が見ている。ならばあの化け物を捕まえる事で解明できる。

そう思って追いかけた。
なのに、錬気が震えている。
あまりに強くて、制御が難しくて、何度も何度も転げながら、奈奈に心配そうな眼差しを向けられ続け、ただシュラは山の森を目指してかけていくのだった。

「お前、怯えたな」
奈奈が肩の上で抑揚なく冷たい声を突き付けた。
放たれた言葉の意味。
自分で認識したと同時に連想したのは、奈奈が気づかない訳がないという事。ならば、いずれ向けられる。そう薄々わかっていたから動揺はない。
ただ応えられず、シュラはただ頷いた。
それが精一杯だから。

そんな彼に奈奈は小さな鼻頭を鳴らす。

「迷うな。なにがあってもだ。外に出れば敵だらけ、迷うなら家の中で寝る時だけにしろ」
「あ、ああ」

駆け抜ける先、そこは斜面に広がる広大な森。
本来だったら開拓の余波でここも消滅していた場所だ。
そんな辛うじて残る自然の中にシュラが化け物の後を追って飛び込もうとすると、

「どういう経緯でこんな事になってるのか発端は判らん。けど、……奈奈は、お前に死んで欲しいとは思わない」
「え？」

問う声に、それ以上奈奈は何も言わない。
ぷい、っと横を向いてしまったからだ。

森の中へ突入する。
蒸し暑い湿気。そして無数の蜘蛛の巣。
乱雑に落ちた枝払いのされてない放置された森の中は、天武の森に比べれば森深くはないが、幹を曲げて伸びる椚（くぬぎ）や、古木と化した檜（ひのき）、そして欅（けやき）の木が乱立する雑木林としてなりたっている。

しかし鳥も蝉も鳴かない不気味な森には、化け物が通ったのだろう乱雑に潰された下草と、燻る様に残る闇靄の残滓が、まるで追ってくれとばかりに克明に刻まれている。

ふいに奈奈が、ひょい、っと指を祓う。

「うぉ――!?」

突然の行いにシュラが狼狽える。

凄まじい突風に枯れ枝も蜘蛛の巣もふっ飛ばされて、森の梢が大きく擦れると漣（さざなみ）のような音を立てる。そしてその風の勢いに巻かれながらもシュラが突き進むと、闇の血を垂らす鬼の背を確かに捉える事になった。

「いた。殺すな。会話できるなら訊きだしたい。変異の事。太刀の事」

「分かってる。でも相手はもう手負いだろ？　そんなに気張る必要ないと思うが」

「お前は相変わらず馬鹿シュラだ。手負いだから形振（なりふ）り構わないんだよ。油断すると殺されるぞ」

軽口叩いたらまさにアホと、不遜に鼻を鳴らされた。

だが、突然奈奈の面貌が険しくなる。

加速して迫れば化け物の背が大きく現れる。

周囲に巨躯を誇る化け物は、背の高い森ですら頭を出して進んでいく。噴き出す血、そして漂う闇。

天は晴れたのだろうか。薄らと陽光が森の梢から漏れている。

そして闇と光の中で、その巨躯の存在は急に停止したのだ。

――風が吹いて梢を擦る。

そんな自然の息吹を感じさせる世界で、立ち止まった鬼の向こう。

シュラは、蚕の糸のようにきめ細かく流れる長い銀の髪を見留めた。

誰かが正面にいる。

警戒に身体が強張る。

と、同時に。
「――まずい！」
奈奈が二本のナタを抜刀、肩から姿を晦ませた。
化け物の正面に立つ何者かがいる。
なら、化け物に殺される。
シュラが認識した時には銀の髪が瞬時に乱れ、化け物の動きが停止した。
――キン――
拙いか――早駆け全開で突き進む。
と、鬼の頭上から狐を描いて吹っ飛ばされてきたのは――
「――奈奈!?」
咄嗟に抱き留める。
と同時に奈奈の双眸が未だに正面見据えたままだ。
シュラは意を汲み奈奈を放ると枝をふっ飛ばして巨躯の化け物の前に旋回――飛び出で。
有り得ないとは知りながらも今まさに振るわれる、銀の髪をなびかせた男の常人ならない一刀を、黒霧『異』を抜刀と同時に受け止めた。
――キィ――――――――――ン！
互いの振り払った強力な太刀が、互いの力に均衡して弾き合う。
耳に小気味良い音が森に広がり、衝撃で、ぶわっと大気に旋風（つむじ）が走る。
「ほぉ……」
男の声が響く。
それは、澄んだ、まるで清流を思わせるような響きだ。
そしてシュラの眉根を寄せさせる。
真っ先に思った感想――似合わない。これにつきたのだ。

その男は野球帽を目深にかぶり、水色のTシャツに薄手の青ジャケット。柔らかなデニムズボンは長身に似合わず。しかも背中にやけに長細い筒を背負っている。
随時錘籠を背負うシュラに言えた事ではないが。それにしてもファッションセンスがあるとは言い難いのだ。
いずれにしろ衝撃に周囲の枝は飛び、互いの剣気は風となって小豆（あずき）でも洗うようなザララとした音が舞い踊る。

そして相対した男の太刀を見てシュラは喉を鳴らす。
黒霧『異』が切り裂けなかった太刀。

それは鉛色を色濃く宿す――
「……同じ、黒霧『異』の使い手ですか……」
――先に言われる。

黒霧『異』は抜刀に適した父の刀の模倣品。
そして放たれた太刀筋は居合……ではない。

なのにシュラが放った居合の太刀筋を、同種の太刀捌きで止められた。
しかもその手応えは、居合にみる抜き手の捌きに酷似している。ただ、今のは技ではなく、その強靭な力任せに抜いた刃で居合と同等の技を発動させた。そんな気がしたのだ。
そしてその強靭な力が衝撃を生みだし、シュラの身体すら後方へ押し込んだ。

――純粋に強い――
それが一太刀で判って頬に一筋の汗が伝う。

背後には手負いの鬼、正面は出自不明の達人。

――冗談じゃない。

そう思う心境の中で、

「……ん？　おや、あれ、もしや斬九郎殿ではありませんか？」
涼やかな声が、あっけらかんと言葉を弾ませた。

それでも油断できず、
「何者だ――」
叫ぶシュラ。

その言葉に、ひょい、っと帽子を上げて覗くのは。
「私ですよ」
その顔を見てシュラはギョっとした。

「――まさか、牙影さん!?」
「あれ、少し顔立ち変わりました？」
思わず放ってしまった言葉と、告げられた言葉にシュラは色を失い、そして牙影は柔和な笑みを浮かべたのだ。
と、同時に背後で鬼が倒れ落ちる。

「眠らせた」
奈奈が鬼の腹に飛び乗った。
そして牙影を見据え、また牙影も奈奈をみる。

「あ、斬九郎殿の嫁になられた、あの時の――あ、申し訳ない!?　咄嗟すぎて、思いきりすっとばしてしまいました。御怪我はありませんか!?」

「ない」
簡潔に奈奈が告げ、そしてシュラの肩に乗っかった。
そしてヒシ、っとシュラの頭を抱きしめるのだ。
それはそれは『怖かったよ！』とばかりに。

「ちょ、奈奈、なに!?」叫ぶシュラに、
「……信用するな……」

叫びの中で奈奈が耳朶へ直接囁いた。

「はっはっは、相変わらず仲睦まじいですな。でも本当に申し訳ない、危うく怪我をさせてしまうところでした。しかし……何故その化け物を庇われるので？　しかも、何か斬九郎殿は気

配がおかしい」

怜悧な眼光を柔らかに変える牙影。まさか幻影の仮面を着けてるとは分からないだろうが。それでもシュラはどもりながらも。

「いえ、少々野暮な要件で。それより何故貴方がこっちにいるんですか？」

ただ、問いを問いで返した。

いる訳のない存在。

彼は天和は海咬の国司、牙影の黎弥だ。

一国を預かる身――云々ではない。ここに存在する訳がないのだ。

ここは天武でもなければ蓬莱でもない。

日本の千葉県の小さな市。

しかも互いの境界を越えるには冥府に通じる伊賦夜の坂がある。あの夥しい女の亡者の群れは、とても剣術に長けてるとはいえ、まともに進むなどできる訳がないのだ。

ならば――何故？

向けた疑問の先で、牙影は天和で見せた秀麗な面貌をそのままに。

「追って来たからですよ？」

さもありなんとばかりに言ってのけた。

さすがにシュラも唖然とする。

「どうやって」

奈奈が問う。かなり押し殺した怖い声で。

そして牙影は、先と同様になんでもない声音で、異様な事を伝え始めた。

「瑠璃姫蘇生の為に、月に猛る王ならば伝承に則（のっと）り闇路を越えて根之堅州国に至る」

「あんた……まさか」

太刀を置き、突然その場に片膝ついて平伏する牙影の黎弥。

「お待ちしておりました。月に猛る王、貴方が真なる王なのですね」
その言葉に、応える言葉が見つからず、シュラは危うく呻きを上げそうになるが。
その言葉を返したのは奈奈だった。

「月に猛る王は、異界から嘆願の儀において姫神の紘羽アカネの元へ現れる。奈奈の亭主、斬九郎が王な訳がない」

「確かに。ですが、禄武シュラは死にました。なら、王の御魂が移動したとも考えられます。もしくは……偽りの術で……斬九郎に変したか？」
細く長い怜悧な双眼が細い狐のように細められる。薄らと銀髪の前髪の向こうから覗き込むよう面をあげる。
その所作は余りにわざとらしく。
ただ、その時にはシュラも覚悟ができていた。

「罪人の禄武シュラか」
「――」
「可哀相な奴だよな。身寄りもない異界によばれて、信頼しようとした輩に謀反人として殺されたんだろ？」
細めた面貌のまま。しかし、その言葉に牙影の顔に小さく斜が走る。

「今頃討たれた山で、恨んで化けて出てるんじゃないか？　少なくとも俺なら、恨むね。そして今度は都合が悪くなったから、移動したと誰かを祀り上げるのはお門（かど）違いだろ？」

「――違う！　祀り上げる意味すらない！　貴方は伝承にある姫君蘇生の為にこんな異界にまで現れた。それは伝承に何か書き違えた不手際があったとしても、差し迫る脅威に向けて事が進んでいるに相違ありません！　なら、道は貴方へ繋がっている！　ここに現れているのが何よりの証拠!!」

あくまで食い下がる牙影に、シュラもこれ以上何と応えて良いかは分からない。そもそもそんな咄嗟に嘘がつける程シュラは頭の良い方ではない。そんな物が長けてるなら女絡みで普段拗れるだけ拗れたりはしていないのだ。
そこらもあって。

「とにかく、こいつは奈奈たちの獲物。誰にも渡さない」

奈奈が割り込み、背後で倒れた化け物を指さす。
その途端だった——

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお』

叫んだのは倒れた化け物。
牙影がシュラらを守るよう風を舞いて前に立ち塞がり、刀を抜刀するが。

「まて！」

奈奈の鋭い叫びに肩を震わす。
そして三人はみた。
太刀を落とす化け物。
太刀は砕ける事なく、本来の姿を取り戻し、化け物は仰向けのままのた打ち回って身体が縮んでいく。いや、縮むと言うより周囲の巨大な肉が泥と変わって崩壊を起こしたのだ。

「……」
「……」
「…………………ば、ばかな……」

ただ一人声をあげたシュラ。
それも仕方がない、目の前でその姿は泥の塊の中に人間の顔が覗いたのだ。
覗くどころか、

「な、なんで……」
「どうした斬九郎？」

奈奈が問い、異様な光景が展開されても眉根一つ動かさない牙影が振り返る。
目の前に、未だ信用できない牙影がみている。

でも、声が上擦る。黙っていたいのに勝手にだ。
勝手に唇から漏れそうになる。
だから心で願う。

『奈奈、俺の口を塞いでくれ――』

今にも漏れそうな言葉を止めてくれ。
震えた眼で想いを伝え、
それに奈奈が、唇――ではなく頬を押し当てた。

それは他人から見れば、あまりの恐怖に震えが走り、咄嗟に愛する者へ身を寄せた。そういう風に捉えられる。
だから牙影もそれに小さく嘆息すると、肉の塊から覗いた女を睥睨しなおす。

「ふむ、これが鬼の正体ですか」

けど、それどころではない。
目の前の、巨大な泥の様な肉塊からボロリと上半身をうつ伏せに、長い髪を滑らせた女がいる。その姿にシュラは息を飲む。
横目で奈奈も彼女を見る。
だが、シュラに走った震えだけは見逃さない。

それは有り得ない存在だった。
天和の暮らしの中で幾度も逢いたいと思った人。
妹の存在との関係で、呆れ果てもした少女。
そして惨たらしくも覗く左肩から先は、存在をもたない。

夥しい肉の塊に蠢いて、幾度も体の中に入った肉の塊を吐き戻す存在。
それがシュラに酷い嗚咽を漏らさせる。
でも、奈奈が必死に掴んでくれている。
まるで理性を失わせないように、涙目に震えた男を支えるように。

そこでようやくシュラは息を飲んで直視する。
かつてシュラにこの街で唯一の拠り所にしたかった少女。

幼馴染……

『なんで……有希奈がここにいるんだ』

心で呟くシュラの前に現れたのは、腕をシュラに刎ねられた少女。
卯月有希奈の凄惨な姿だった。

「人に戻りましたな……もしくは人に変化したのか」
牙影の言葉にシュラは何も返せない。

天和へ行ってから一度も会う事も話す事もなかった幼馴染。
別れの日。
夕暮れで皆がみてる前で、精一杯伝えた一つの言葉が今でも自分の中では残っている。

それは冗談染みてはいたが、シュラが本気で放った生まれて初めての切なる想い。
それを放った相手が、悪臭と泥に塗れた山の中で、無残にも長い髪を乱して横たわっている。
しかもその左腕は離れた枯葉の上に転がっているのだ。

両断したのは他でもない。
自らが握る太刀――黒霧『異』
そして振るったのは――禄武シュラ――自分だ。

「……つまり、俺が、有希奈を……初恋の女性を……両断した」

余りに小さな、呼吸の音よりも低い呻きにもならない密やかな音。

だが、それを間近にいた奈奈だけが聞き留めて、ぎょっとする。
そして斬九郎の顔が乱れるのを、そこから何かが露見するのを恐れ。
他者を寄せ付けない、かなりはっきりした提示を放った。

「――この化け物は、奈奈が貰う！」

奈奈には珍しい強めの声が放たれる。

それに何か言いたげな気配をむける牙影だが。
「月に猛る王の奥方なれば、この私、牙影の黎弥に異は一切ございません」
「王の件、斬九郎は認めていない」

「ならば、此度の異界見聞は全てお二人の初旅行という事と承ります」

「……」シュラは、もう語らない。

横たわる泥だらけの女から目が離せなくなって、誰かを欺くとか腹の探り合い等出来る状態ではなかったのだ。

そしていずれ震えが走る――なら、異常が知られる。

それを思って奈奈は言う。

「異論はない。こちらには事情があった。でも、二人旅」

つまり、さっさと去れ。

そういう事だ。

それに牙影は力強く頷いた。

「……判りました。ですが、私はいつ如何なる時も斬九郎殿。月に猛る王――貴方の従者。それは忘れないで頂きたい。それと、まだこの世界に滞在されるなら、これを」

す、っと両手で恭しく差し出したのは名刺。

茫然とするシュラはただ受け取り。

『――寺内バッティングセンター　臨時職員　牙影冷　電話番号〇〇ー〇〇〇〇ー〇〇〇〇』

そんな文字を見留めた。

「何かありましたらぜひ。それでは取り急ぎこれにて」

太刀を背負っていた長筒に放ると（たぶん野球バットを入れる筒）、彼は一礼。そのまま森の外へと歩き出していく。

咄嗟にシュラが動こうとしたが、それを奈奈はシュラの髪を掴んで制した。

そして牙影の姿も、気配も完全に遠く消えてから。

「よく耐えた。もういいぞ」

奈奈がため息を漏らすが。

「――有希奈ッ!?」

シュラは弾かれるように泥の山の中から有希奈を引き上げる。そして抱き上げると血が吹い

て、校舎で倒した化け物の血を色濃く含んだ直垂をさらに染め上げた。それら全てを意にも介さず彼女の腕を拾い、接続しようとしたところで動きを止める。
余りに泥がこびりついて――

「ちくしょ――――――――――!!」
そのまま彼女を抱いたまま、彼女の腕を拾うと咥え、シュラは早駆けで牙影の消えた反対方向へ駆け出した。

枝を砕き、葉を潰し、まるで浮かぶように疾走するシュラ。
その悲痛な面貌すら潰すように駆ける姿に、肩に乗る奈奈は何も言わず。ただ、シュラの襟首を、先に広がる不安から守るように、せめてと優しく握りしめていた。

そしてシュラは気づかなかった。
有希奈が落とした太刀。
そこへ一人の女が気配を消して近づいていた事に。
その女は髪にカールを掛けたブラウンヘアーの女。
ピンクのブラウスにミニのスカートを履いて、およそ森に似つかわしくない姿で現れる。
そして誰に断る事もなく、太刀を引き抜き、そのまま森の中を歩いてきえていくのだった。

＊＊＊＊＊

シュラは全速で駆け抜けていた。
森を飛びぬけ、家屋の屋根を越え、崩れた家並みが眼前に広がれば電線へ飛び移り、錬気の膜で足を覆って危うい一本線を駆け続けた。
ただ、その間にも奈奈は周囲を広く観察していく。

見慣れない世界。
シュラの世界。
そして異様に広がる瘴気。

銅羅に闇の鬼だと示唆された化け物があれだけとは思えない。
出会った鬼の全てはシュラが腰に携えた太刀と同種を確かに携えていた。

なら、これが闇の鬼と関わりがあるのは一目瞭然。

そして気になるのは天武は斬月の村で行われた果し合いに置いて、シュラが相対した駈月も本家の黒霧で異常な変貌を遂げていた。

「それと関わりがあるのか。でも……」

太刀に語り掛ける存在の気配がない。

それが奈奈を迷わせる。

一体幾つこの世界に太刀が運び込まれ、そしてどれだけ広がって被害がでているか見当もつかない。さらに校舎から感じた気配。

あの人間達の中に、歪な気配は確かに感じた。

それらを踏まえ奈奈は溜息を衝く。

元々はシュラの言う様に平和だったのだろうが。

これでは天和よりひどい。

そんな光景をシュラはどう思っているのか。

心に浮かべないが為に覗く事もできないが、深く見ようとは奈奈も思わない。とても、今のシュラを見るのは……あまりに可哀相で。

だからせめて、さらなる追手を危惧して錬気を張り、幻視の術も使う。

人の気配は消す事が出来ても、その鼓動を消す事は出来ない。なら、こちらを誰かが注視を向ければ、それだけで解る。その全てを掌握し、蟲がいるなら蟲の足さばきすら感じるように周囲へ感知を広げていく。

そうする事こそが、せめて少しでもシュラに安穏とした時を与える。そのきっかけになる気がして……。

そして、そんな美よう●ょの優しさにすら……今のシュラは気づけなかった。

既に意識を捨てて、シュラは無意識化で走り続けていた。

「かろうじて、息はしているんだ。家で錬気の治療を施せば蘇生は可能だ。けど……」

噛んだ腕の中から、くぐもる声で自問自答するシュラ。

その言葉の意味は奈奈もよく解っている。そして膨れ上がる錬気が、上手く制御できてない

事にも奈奈は気づいてシュラの横顔だけを見つめていた。
それらを踏まえて、奈奈は一抹の、別種の不安を覚えていく。
「――親父！」
疾風（はやて）の如く玄関に飛び込むシュラが開口一番に父を呼ぶ。
その鬼気迫る声に銅羅はすぐにリビングから飛び出し、そして抱いた少女と、そこから転がった血みどろの彼女の腕に呻きを上げた。
「有希奈ちゃん!?　なんだこれは!?」
「風呂を、身体を洗うから！」
「あ、洗うって――」
女の子の服を脱がしてか――という常識的な考えと。
今すぐ手を打たなければ取り返しのつかない事になると。
火急への思考が鬩（せめ）ぎ合い、それでも銅羅はすぐに給湯機を点けに行く。
「い、一応救急車も呼んどくぞ！」
「それは少し遅れさせてくれ、俺達なら元に戻せる可能性があるから！」
父の声に煩わしいとさえ含んだ感情の声を放ち、それに何事かと絹と桔梗も廊下へ現れてしまう。が、
「きゃあ――っ!?」
絹が張り上げそうになった唇を桔梗が抑えた。
そしてリビングを振り返り、
「姫様、来てはなりません！」
一緒にリビングから出ようとしたのだろう瑠璃の動きを留めた。
「火が点いたぞ！」
銅羅の声にシュラは飛び込み、女性陣の有無を待たずに服を剥ぎ取りバスルームで生湯を最大にだして傷口に当てた。
そして不清潔な自分の直垂を脱ぎ洗面所に放ると、丁度入ってきた銅羅は呻きを上げた。
有希奈の凄惨な姿、だけではない。

自分の息子の、身体に醜く浮かんだ巨大な刀傷。
そこからシュラの歩んできた世界の話が偽りではない物だとはっきり悟る。
そして、全てを任せようと思って銅羅は場所から離れた。

ただ水を大量に流し、彼女に当て続け、シュラは歪んでいく視界を肩で拭う。
と、そこで奈奈の足に顔がぶつかった。

見下ろす奈奈の眼差しに、自分が、肩に乗せてた奈奈の気配にすら気づけなかった事に驚き、そして、その半眼の眼差しの中に、ただ震えてる男の頼りなさげな顔をみてしまったのだ。喉の奥から声にもならない悲痛な音を発してしまう。

……そして、気づく。
今度は錬気で膨れ上がった感情や、身体が連動してるのとは違う情動に襲われてるのだと。
シュラは必死に自分の心を抑えようと努めた。けど、制御に気を回せば回すだけ何故か錬気が乱れる。

さらに、ふ、っと瞼の向こうで覗く物がある。

小学校でのグラウンドでみた人々の怯えた眼差し。
漂う闇の靄……瘴気。
校舎から聞こえた子供たちの泣き声。
この世界に戻ってきた時点で展開していた鉄塔や電柱の横転や、無数の家屋の倒壊。

そして竦（すく）んだ心で放った太刀は、確かに闇の鬼を退治した。

でも夥しい返り血は、まるで自分が仕出かした事を苛（さいな）む様に降り注ぎ、自分の罪とばかりに身体中を染め上げた。
今も、洗面所に転がった直垂が何かを物語ってるようで、知らずシュラの下唇を噛みしめさせる。強くありたいと思う心とも裏腹に、自らの四肢は震えていく。

そして洗面所で音がした。

「シュラ様……」
恐る恐ると声がする。

仰げば曇りガラスの向こうに大量の清潔なタオルを持ってきた絹の姿を見る。

シュラは慌て、その泣き顔を隠すよう顔を擦ろうとしたが、上半身はモロ出しで擦ったところで滑る物はばれるだろう。

晒すだけの顔ではどうする事も出来ずシュラはただ戦慄き。

そんな時だ。

「絹ねぇ、今は来るな！」

強く奈奈が叫んでくれた。

扉の向こうで、タオルを置く絹の動揺が伝わる。

「駈月の時とは違う。お前は集中して消えそうな鼓動に錬気を送れ」

「あ、ああ」

「接続は奈奈がやる」

「……着く、よな？」

「もう集中しろ」

それに奈奈は明確に応えない。

ただ、水流の流れる音と、大量に抜け出過ぎた血の滑りがタイル床を染め上げていく。

ザーザーと音がする。

いつまでもいつまでも音が聞こえる。

やがてシュラから流れ続けた涙が果てる頃。

気を抜けば意識すら失いそうな血だまりの展望の中で、やがて奈奈が全部の組織を錬気で接続。シュラも彼女の確かな鼓動を聞く。

ただ、腕につく傷は跡が大きすぎて、もう奈奈ですら消す事ができないらしい。

そして遠くから、サイレンが響いてくる。

銅羅が呼んだのだろう事は想像がつく。

皆は念のために二階の妹の部屋に隠れ、やがて到着した救急車の隊員が血だまりのバスルームに悲鳴を上げながらも彼女を連れていく。

付き添う事になる銅羅。
そして玄関先に出たシュラと奈奈。

去っていく車の意味を奈奈は問いたかったが、シュラがとても語れるような顔をしていない事にきづいて小さな唇を閉ざす。

会話すら意味のなくなった二人の世界。
奈奈は肩の上でシュラの頭を抱きしめる。
……それくらいしかできなかったのだ。

そんな奈奈の機微も、行ってくれた治療にも礼すら言えず。シュラはただ一時（いっとき）抱いた少女の温もりを信じたくて、展開しているおぞましい世界に救いを求めるように、ただ自らの掌を鼻孔へ近づけていく。
せめて、彼女の、憧れた女性の残り香が挫けそうな心に力を与えてほしかった。
斬り捨ててしまった後悔を身に抱きながらも、掌を近づけていく。

……けど、その手に少女の香りなどは微塵もない。

あるのは、淀んだ臭気を帯びた……血の臭い……それだけだった。

「とりあえず、お前は今日一人で寝ると皆に言え」

掃除を終えたバスルーム。
皆が交代で入りシュラも最後に終えると、自室に戻ったシュラは部屋で灰色のスウェットのトレーナーとジャーズのズボンというラフな格好に着替えた。

久しぶりの日本の衣服に、何故かシュラは安堵するが。異様な疲労も溢れている。
そんな人心地を付いたシュラを、床に敷かれた布団の上から物珍しげに半眼をむける奈奈からポソっと囁かれたのだ。

「え、ああ、そりゃ……な。女性陣多いし」
「いや、そうじゃなくて。……お前自分の状態気づいてないな」
「え、どういうこと？」

返答に間が空く。

「まだ、さっきの女を気にしてるのか？」

「え、あ……うん」

どうしても、運ばれていった、自らが斬ってしまった少女の事を思いだす。

あまりに凄惨な行いは、自分が振るった太刀が起こした。なら、思い出さない訳にいかない。

ただ、それでもいくらリビングで気丈に振る舞ったとしても、どうやらこの美よう●ょには全てがお見通しらしい。

「お前はやるだけはやったんだ、あとはあの女が目が覚ましてからだ。なら、大丈夫だと信じるしかないだろ」

「そ、そりゃ……そうかもだが」

「ぶった斬った判断……人間らしさの視点で言えば、あの行為は全て誤ってるかもしれない。が、生き死にが関わった中でのあの判断は、お前は双方を殺さずに生き永らえさせた。なら最良の策を取った。奈奈だけは、他人から非情と諭されたとしても、奈奈はただお前を褒めたい。だから……切り替えろ」

「おま……すごいな」

「お前みたいに悩みの淵に喜んで落ちないだけだ」

淡々と、人の悩みをばっさばっさぶった切る美よう●ょ様。そんな性格のさばさばとしたところは、さすがはあの師匠の娘だと本当に思う。

そして有希奈の事は気には掛かるが、少しだけ、ほんの少しだけ気が晴れた……いや、救われた気がして。例え後で有希奈が目が覚めてからもめたとしても、今はただ本当に嬉しい気持ちに包まれていた。

そんな中でシュラはふと疑問を覚える。

「あのさ、さっきの話だが、なんで一人で寝るって強調してこなきゃいけないんだ？」

「風呂一緒に入ったろ、なんかお前の身体の錬気が乱れてる。就寝時に少し整えるから、誰もこっちに来てほしくない」

「乱れてる？　俺には感じないが……あ、乱れてるって言えば、さっきの絹たちの錯乱っぷり

も凄かったな」

つい数十分前、奈奈にせっつかれてシュラは奈奈と一緒に風呂に入ったのだ。
姫と絹には不潔だと悲鳴を上げられたが。
奈奈の斬九郎の嫁！　の一言で押し切られた。

そんなシュラが振り返れば。部屋に置かれた本棚やらパソコン。小さなテレビに冷房や学習机。それらを仔細に眺め回す奈奈は、その度にほぉーとか、はぁーとか声を上げてシュラの言葉には返さない。

「瑠璃姫たち、大丈夫かな」

ちなみに瑠璃と、絹、そして桔梗には二階の比較的大きな空き部屋に布団を敷いてある。そして今三人はそちらで荷物を下ろしているのだ。
妹の部屋でもよかったのだが、バレたらあとで確実に妹に殺されると判断して、そこはシュラが未使用にしてもらった。さらに奈奈だけは、部屋に四人は手狭との人数的な意味合いもあり、シュラの部屋で寝泊まりする事になったのだ。
洋室作りに畳を敷いてあるシュラの部屋に、二つの布団が敷かれている。
それを奈奈は嬉しそうに走り回っていた。

「ところでいつまで滞在する？」
繁々と雑誌やらテレビやらをつけたり開いたりと覗き込む奈奈に告げると。

「ん？」
奈奈はシュラの言葉の意味が解らず振り返った。

「瑠璃姫も蘇生されたし。帰ろうと思えば皆は帰れる。ただ、今すぐ俺は動けない、有希奈の事。鬼の件、ばら撒かれた太刀の件、いろいろ解決する事があるからな」
部屋の中で奈奈が使えそうな物はないか、いっそオモチャでもなかったかと机の中を物色しながらシュラは独り言にも似た呟きを放ったのだ。

「ちょ、ちょっとまった。お前、いずれ戻るのか、天和に！」
奈奈が獅噛み付いてくる。

「え、あ、当たり前だろ。稍さんどうすんだよ」
「……」
それに、奈奈は本当に呆れたような顔。
「ど、どした？」
「ねぇねぇの為に……もっかいあの戦乱の世界にいくってのか!?」
「そりゃな、約束したし。お前と……。ほっとけもしないしさ。修行も途中出し」
奈奈が珍しく喜色の笑みを満面に浮かべた。

「お前、意外と良い奴だった！」
「何言ってんだお前。俺は元々良い奴だ」

「あのな、あのな、奈奈はてっきり、お前の目的通り、この世界に残るのかと思って諦めてた！」「いや、帰りたいとは言ったけど、瑠璃姫の件の時にいっただろ。ある程度覚悟を決めた……って、言わなかったか？」
「忘れた！」
「おま……」
「だったら天和行こう！　一生、いますぐじゃなくても！」
「あ、ああ」
そのつもりだ――その言葉は奈奈に伝えない。
戻るべき場所。それは本当はこの世界なのかもしれないが、もうあの世界を放っておけない。
命の連動した稍の事。
そして未だ証立てをしてないが為に、絹にもかかった罪。
このまま絹をこの世界に、とも思考はあるが。それはまた別の話だ。絹が故郷の大地を捨てまで選ばせるべきなのかは話し合いもしていないのだ。
それに瑠璃姫。
娘を斬った父との和解を姫にだけ任せていていいのか。また戻れば化け物と殺されかねないのではないか。

だからこそ凄く息巻いて突っ込む奈奈に頷くと。この世のものと思えない喜色を讃えて、奈奈は珍しく感情を表に出して何度も何度も頷いた。
そして一気に告げるのだ。
「あとな、あとな、前話したろ！　こっちの医術、奈奈は医術の力を知りたい、出来れば少し

見て帰りたい！」

「いつか、稍さんを連れてくるためにか？」

「そうだ！」

奈奈が鼻息荒く面貌をよせる。

そんな彼女の期待……それはシュラも重々解っているつもりだった。

あの時、山で稍の事で奈奈が悲痛に訴えた内容。

あれは彼女のひた隠しにしている願望だ。それをシュラはしっかりと覚えている。

『ねぇねぇを、助けたい！』

あの時の言葉通りに、ここで病の手掛かりを調べてみれば、もしかしたら稍さんを救えるかもしれない。

それが彼女を動かしている。それは判るのだが……問題がある。

「けど、さ。あの時言えなかったが、こっちは空気が……」

そこで奈奈は頷く。

「それだ、かなり悪い。来て真っ先に思った。連れて着たら、治る可能性があるなら一気にその場所へ搬送しないといけないと思う」

「なら、場所はあそこだな」

「あそこ？　何か目論めるところがあるのか？」

「ああ。親父が有希奈を救急車で連れてっただろう、親父の知り合いの病院だ。東京の大学病院なんだが、そこでなら、たぶんこの世界で最大の医療技術が受けられる」

「ほ、ほんとうか……、それ本当か⁉　こんな凄い世界の最高か！」

「この日本は、世界の中でも最高水準の技術が集まっているんだ」

「おおお、本当か！」

本当に嬉しそうに奈奈はせっつく。

それにシュラも同意だった。

稍の事、もしくは望むなら姫の事。

二人の病は少し似ている気がしたのだ。なら、一緒に治せないかとも想えて。

「ああ、だから、有希奈も目を覚ま……」

言葉が詰まる。
斬ってしまった存在。
変化した意味。

それら全ては完全に棚上げなのだ。

そんな言葉止まったシュラの姿に、
「ああ、覚ますさ。だからこれ以上錬気を乱すな」
奈奈がシュラの膝を軽く小突く。

「いずれにしろ、こっちで調べ事を終えない限り、俺は天和には戻れないってことだ」
「あの姫たちが戻ると言うなら、下る道は楽だから奈奈が送ってきてもいいが……向こうに行ったら立場がまずいんじゃないかな」

そんな声を聞いている矢先だった。

――こん、こん。

遠慮がちな、それでいて、おずおずとした音が扉から響いて二人の会話を遮った。

「あ、はい。どうぞ？」
シュラが返事を返すと、少し沈黙。
でも、その言葉に応えたのは一拍置いてからの囁き声だ。

「――あ、あの、瑠璃です。し、失礼いたします――あ、きゃ!?」
「ちょ、姫様押さないで下さいまし!?」
扉の向こうから、素っ頓狂な声が二つ聞こえた。

「な、なんだ？」
シュラの疑問の言葉に奈奈は一瞬シュラを見上げるが、何故かそのまま溜息を衝いた。
そしてそのままちょこちょこと歩く奈奈が扉を開けようと前に立つと。

ん、ん、と背伸びした。

「ど、どした？」
「……この世界の引き戸は……さっきから、嫌いだっ！」
吐き捨てるように言われて。「ああ、」っとようやくシュラも理解する。
奈奈は小さかった。
それこそシュラの膝の丈くらいの身長で、ドアノブは大人用の位置にある。つまり届かないのだ。
「わ、悪いな。ドアノブは大人用なんだよ」
シュラはそんな奈奈にようやく小さく微笑を浮かべる。それを見て、奈奈も小さく嬉しそうに口角を上げた。その意味する微笑にシュラは気づけないが、少し可愛いとシュラは本心から思ってしまう。
「奈奈、持ち上げてやろうか？」
「な⁉」
告げられた言葉にちょっと奈奈は茫然とする。
「ここでは、子供は持ち上げられて開けるんだ。決して恥ずかしい事じゃないんだぞ」
シュラなりに奈奈が恥かしくないよう、少し取り繕ってみた。
奈奈は少し考える素振り。
見上げる顔を、やがて大きく頷かせ、
「本当だろうな……」
かなり怖い声をかけてきた。
「お、おう」
「なら、……ほれ、奈奈師匠をもちあげろ」
「はい。奈奈お姫様」
相変わらず不遜だが。必死に背伸びしてる奈奈を抱き上げ、そのままドアノブに近づける。
――と、
「な、奈奈は小さくないからな。本当は自分で出来るんだからな！」
振り返った美よう●ょは沽券に関わるとばかりだ、非難顔で唇を尖らせた。

持ち上げると人差し指でシュラの頬をぐりぐりと突く。そんな奈奈と目が合って、「なんだよ……」頬を染める奈奈に、シュラも気づいた。
昼間の騒ぎで疲弊した心が、なんとも微笑ましい気分で吹き飛んでいる事に。

「いや、なんでもないよ。ありがとう」
「んん？」
疑問符浮かべてドアノブへ手を伸ばしていく奈奈。
初めての洋扉を開けようとして、どきどきした顔を露わにして――

「姫様どいてくださいな。というか押さないで！」
「――そ、そんな、瑠璃が先に来たのに、絹殿が押されたのではありませんか⁉」
「そうです、姫様が全て正しい！」

――硬直した。

「ここは姫様に譲るべきです」
「あ、何それ、ひいき！　ひいき！　桔梗さんのひいき見た！」
「はぁ、何を言ってるのだお前は。私は瑠璃姫様付きの従者だぞ」

「天和の蓬莱ならいざ知らず、ここは日本なんですからね。シュラ様から訊きました。ここは身分の差別はないって！　みんな平等ですからね！　だから姫様といえど平等ですからね⁉」

「おま、天和の者だろ⁉　しかも聞けば虎綱殿の奉公人らしいではないか！　なら智羽の瑠璃姫は、お前の身分と比べたら上の上で――」

「しーりーまーせーん～」
「な、なんて無礼な奴だ⁉」

外からとんでもない喧騒が延々と聞こえて、シュラも奈奈も顔を見合わせる。

「ふーんだ。絹めは獲物を前にしたら、例え姫様でしょうが、姫巫女アカネ様でしょうが仇敵となれば負けません～」

喧々囂々、桔梗まで参戦する声の中。

「あの、シュラ様……大事な用向きがありまして。こちら、開けて、私だけ入ってもよろしいでしょうか」
おずおずと、二人に聞こえないようにドア越しから囁きが聞こえた。
「あ、きたなっ、姫様抜け駆け、きたなッ!?」
「え、あ、きゃああ」
耳聡く絹に聴きつけられて。また、どたん、バタン。
何をやってるのかシュラは不明だが。さすがに拙いかとドアノブに手を掛けたら向こうから開かれ、絹と瑠璃姫、そして桔梗がもつれるように雪崩込んできた。
奈奈が、もう一度、はぁ……と溜息を吐く。
しかも部屋でもつれて倒れる三人に、
「……この発情期が」
ボソっと吐き捨てた物だから。姫は赤面。
絹と桔梗が――
『誰がですか!?』
声をハモらせた。
「で、一体、どうしたの？」
シュラが姫の手を取り助け上げると、彼女は面貌を赤一面にして。もじもじと。
「ん、なに？」
「――い、いえ、お元気がなかったようですので。一緒に月でも」
「え？」
「瑠璃でよければ、お話でも一緒にされてもと。でも、ここが……」
「シュラ様の生まれ育ったお部屋（ジュル）！」
少し疲労困憊なシュラを置いて。
しどろもどろで支離滅裂な言葉を放つ瑠璃は、言葉の中できょときょと。絹は絹でが涎を拭い、展開された部屋に二人で黄色い声を跳ね上げた。

ちょっと姫様に関しては新鮮だと、シュラは感慨深げに見つめるが。

「わわ、これなんですか!?」

シュラを無視して、色々物色が始まっていく。

見られても良い物と、見られて欲しくない物、普段妹がいるシュラはしっかり片づはしているが。ビシ、っと絹に慌ただしくも指で示されたのは、よりにもよってパソコンだった。

一瞬硬直。

でも、まぁ……操作は無理だろうと起動画面を表示させる。

一斉に感嘆の声があがるので、ちょっと動かしてみようかと。ミュージックソフトを立ち上げお気に入りのクラシックを掛けた。

「ぎゃっ!?」

机の上に立ってスピーカーの真横にいた奈奈が悲鳴を上げた。

他三人をみたら絹は転げて、桔梗が姫を連れて廊下までにげていた。

「……だ、大丈夫だよ、そんな怖がらなくても。音楽っていうんだ、で、これがスピーカー。国司の城ではなかったかな詩吟とか。能楽とか」

「あ、ありました！」

「ああいうのを、この機械が再現してくれる……そんな認識でいいと思うよ」

『……おおお!?』

四人の声が見事にハモル。

それから皆が入れ代わり立ち代わり。

――お願いだから外つけドライブの中だけはバレないように。

そんな願いに苛まれる中で、パソコンからタンスの中まで物色がはじまっていく。

「シュ、シュラ様、こちらは……」

おずおずと瑠璃に示されたのは机に乗っていた小さな機械だ。

それは子供の頃にもらった子供用のミニプラネタリウム。説明を交えながら蛍光灯を消して作動させると皆が感動に声を放っていく。

その姿は微笑ましくて。でもふと気を抜けば腕を接続したとはいえ、蒼白の面貌で運ばれた有希奈は未だに網膜にありありと浮かぶ。それでも質問攻めの声は、それすら一時忘れさせてくれるのには十分だった。

――もしかして、わざと明るく振る舞ってくれてるのだろうか。

彼女らを見て、そんな思考も飛来している。

「ありがとう……」

シュラはただ、わいわいと楽しむ皆に感謝の気持ちを、小さく呟くのだけで精一杯だった。

「まぁ、そうかもだが、今はあまり考えるなよ」

奈奈に心を見透かされた。

ひょいと肩に乗ってくる奈奈が告げる。彼女も本当に気遣ってくれている。それが少し嬉しくて、シュラは何も言わず肩に乗る奈奈を撫で続けていた。

「シュラ様、そろそろ夕餉にしましょうか」

それからしばらくして、絹が夕飯の用意を買って出てくれた。

その声に皆が賛同、夕飯の用意とリビングに移動した。

ここはさすがに絹の独壇場で、誰も絹の邪魔はできなかったが。

調理器具の使い方を一通り教えると、包丁の切れ味やガスコンロの火力に感激しつつも、瞬く間に使いこなしていくのだから絹の料理の技術に舌を巻く。皆もダイニングに広げられた夕食に驚きながら久しぶりに見慣れた天和での料理を貰い、その美味しさに舌鼓を打った。

全ては、今までの事など、まるで嘘のように穏やかに進んでいくのだ。

でも、そんな一時の団欒に、ついに父からの電話の音が鳴り響くのだった。

「シュラ様、こちらにいらっしゃったのですか」

シュラが日本に帰還してから二日目。

あの騒ぎのあった次の日の早朝。

シュラは山を登り、雀の囀りに包まれる崩れた拝殿手前の朽ちた境内の中で一人佇み、重機によって半壊させられ放置された社を眺めていた。

「おはよう瑠璃姫、寝心地は大丈夫でした？」
「はい、とても柔らかな布団で瑠璃も皆様と御一緒に熟睡できました」
薄手の桃色な浴衣の上にシュラの薄手のカーディガンを肩から羽織り、浴衣サンダルの出で立ち。物静かな彼女にはとても似合う愛らしい姿だとシュラは思った。

つつ、っと身を寄せようと彼女はよるが、数歩手前で止まってしまう。
そのまま何も言わずに上目づかい。
何かを戸惑ってるような仕草だが、シュラは彼女の手を優しく握るとそのまま引き寄せた。

「あ……」
「もしかして、心配かけさせちゃってる？」
「え、あ……その」
「……ん？」

少し沈黙、でも、シュラの心を見透かすように。
「御心を痛めてるのは……昨日の、おでんわ、なる機械からの報せでございますね」
「……」

電話の機能は、後で求められて皆がいる時にシュラが伝えた。
皆半信半疑だったが、シュラの蒼褪めた面貌から全てを察知し、それに異を唱える人は誰もいなかった。
それがゆえに告げた言葉に、人一倍心痛な顔を向けたのは瑠璃だった。
寝屋を共にとまで告げてくれたが、それに奈奈はシュラの治療もあると突っぱねていた。奈奈曰く、五穀の行を行っていない身体で各部位への瞬発的な錬気の流れに身体が痛んでいる。その治療と言う事だったが。

夜中行ってくれた奈奈の錬気にすら、シュラはただまんじりとした気分で奈奈に身の全てを預けていた。

そして、現在だ。

シュラは、ただ下唇を噛みしめる。
そんなシュラの面貌に、儚げな微笑を浮かべる彼女は。

「山は砕かれてますね。さらに砕かれるのでしょうか？」
ふと、周囲を見回しそう告げた。
「いや、俺の死体騒ぎから工事は頓挫したらしいんだ。なんでもマスコミという……向こうで言えば報せ札を立てる人……と、言えばいいのかな。人々に教える集団が、テレビで放映、それの関係で今後買い手がつかないのでは、って話だけど」
「テレビ――あの、絡繰り箱ですね」
「うん」
「にほん……不思議な、素敵な世界です……」
「慣れてしまうと、嫌な事が目につくけどね」
「それは、きっと、住めばどこでも同じですよ」
そう柔らかに微笑むのだ。
でも、その眼差しは周囲の黄色い帯に向く。
それに気づいたシュラは――
「このテーピングは全部俺関係だったんだ……たぶん、向こうが現場なんだろう」
帯は明確に脇道を目指している。
そこに行こうとは思わないが。
「ここは本当に紘羽の社ではないのですか……？」
ふと、姫が呟いた。
「来た時も訊いてたね。ここは名前がないんだよ。たぶん、誰もしらないんじゃないかな……調べた訳じゃないんだけど。よければ後で親父にきいてみるよ」
昔も思ったが、一体何という社なのだろうか。
崩れてはいるが、元は立派な社だった。
それはシュラも記憶に残っている。
なら、名前くらいあってもよさそうな物だと、シュラは感慨深げに社を見つめる。
そして思う。

青い勾玉を手に入れて、シュラは確かに異世界へ転生した。
なら、まったくここが天和と無関係とは思えない。そこらの兼ね合いもありシュラも気になり、そして姫も気づいたのだろう。

「紘羽の社は、もともと坂元になるのです」
「さかもと？」
「冥府からの出口……シラヌモノが生まれる場所」
「あの神社が!?」

「ですので、姫神様を天和の者は畏怖と畏敬をもっているのです」
「それで……あれだけの国司が集まったのか」
「そして貴方は、この世界から招かれた」

瑠璃が、突然シュラを強く抱きしめる。
「え、姫……？」
「気休めは言えません……ですが、シュラ様は事に当たるに置いていつも最良の方法をとっていらっしゃる。瑠璃はそう思います」
「……」
「だから、……気に病まないでくださいまし」

「あ、……ありがとう」
小さく握られた袖に、シュラはそれしか返せず彼女の頭を撫でていた。

森の木々が南西からの風に揺れ、梢から幾筋もの光の帯を降り注がせる。
静かな葉擦れを聞きながら二人は過ぎる時間にまかせていく。

そんな折り、シュラはふと視線を感じ。眼差しをつつっと流せば、崩れた狛犬の近くで片膝ついて控える桔梗と目が合った。

桔梗は軽く一礼。それだけだ。

背の高い桔梗には服がなく、シュラのジーンズのズボンと、薄手のジャケットという出で立ち。ただ、長筒を背負って隠しているが太刀は持参している。

一応、刀禁止の世の中だと告げてはいるもの、それでも護身用の太刀は放せないと言い張られていた。警察もこれだけの化け物騒ぎに視点を奪われ、女の子に職務質問もないだろうが。
ならばとりあえずは任せられる。
そう判断した。

「瑠璃。俺たちは朝食、……あ、朝餉を貰ったら俺と奈奈、そして絹を伴い東京へ行ってきます」
「とうきょ、都……ですか？」
「うん、天和でいう西の都、もしくは幕府みたいなところかな」
「……ご一緒したかったです」
少し、残念そうに口元を結ばれる。
「空気さえよければ……一度、見せてあげたかったんだけど」
言葉が濁る。

いや、止められた。

すっと唇をあてられる。
ほんの少しの仄かに寄せられる、とても真剣な想い。
それに応えたくて身をかさねて。彼女の接吻を受け入れ――
「あ、あああああああァァァァァァァ!!　みた、絹は観ましたよッ！」

素っ頓狂な声が、木々に響き渡る。
呆気にとられてシュラが見上げると、奈奈を背負って木々の梢からふってくる絹を見定めた。
「姫様、抜け駆けしないって言ったじゃないですか！」
「ちょ、絹!?」
――何故空から!?
驚いたのはシュラだった。
姫は絹に気づいて面貌をみるみる朱に染めて耳まで赤くした。

それに対抗するよう別の意味で絹が面貌を赤くした。

ぷぅ、っと頬を膨らませる彼女は愛らしい。でも軽やかに着地する姿は、シュラには少し格好いいとすら思えてしまう。

そんなふわりと舞う彼女。

妹のチェック柄のロングスカートに緩やかな薄紫のワンピース。服選びにキャーキャー悲鳴を上げていた夜の一コマを思い出すが、軽やかに着こなすのは、初めて出会った屋敷での着こなしからのお洒落具合でも解っている。

それゆえにやけに深く納得してしまうのだが。

と、同時に本当に可愛い。

そう思えた。

けど、揺らりと立ち上がる姿は、どこかシラヌモノを彷彿とさせる怨恨の眼光だ。何故だろう、歩く様は瘴気がないはずなのに、何故か周囲を暗く闇に包み込む。

そんなヤバ気な挙措に、シュラも儚げに抱いた恋心は一気にどっかへ吹っ飛んだ。

シュラも姫も後退り、何故か桔梗は平伏のまま。

ついに絹の指先がゴキリとなる。

ひぃ、っと二人で悲鳴を上げた。

「シュラさまぁ……」絹が微笑む。

奈奈よりも細い半眼で。

「な、なに絹たん……」

シュラの言葉に、うふ、っと微笑む彼女。

静々とした嫋やかさもあり愛らしい、けど……その怒りの矛先がシュラに向けられては愛らしさ等霧散する。

「何が絹たんですか！　お二人の関係は認めていますが！　仕方ないからですが！　それでも怒り頂点！　分かっていますかシュラ様、この行先の無い怒りの意味が!?」

捲し立てられた。

「え、あ、うん……」
「そんで、姫様！」
「は、はいぃ!?」

「――夜中、七十三回確約してもらいましたよね！　抜け駆けしないって！　こっそり逢引きなど持っての他だって！」

「え、あ、うん。でも……え？」
「え、（両手をグーで頬に当てて）じゃないです姫様！　こわ、姫様怖っ！　シュラ様、この子、あざとく立ち位置を狙ってますよ！」

「な、なに、というか、何でいま樹から降ってきたの!?」

――ただの奉公人だよね！
そんな声は続かない。

「アホシュラ……いいから、謝っとけ」
奈奈が凄く疲れた顔で絹の肩から顔を覗かせる。

現れた絹と奈奈。
珍しい組み合わせにシュラは茫然としていた。

――なんで、この子達が意気投合してるの？
しかも色々やばいんだけど――

あらゆるシュラの弱点を知る存在、奈奈。
しかもしかも絹から漂う気配はなんだろう。ちょっといつもと感じが違う。どことなく何処ぞの山で、未だに怒りを極めてるだろう師匠のそれに似ているのだ。

それにきづいてシュラは困惑し、奈奈もやめとけとばかりに顔を振る。
何かをモシャモシャ食べながら。
そしてそんな彼女へ、ようやくシュラは上擦る声をあげていく。

「な、奈奈……お前が、俺を売って絹を案内したのか」
「すまん、優しい卵黄ボーロ2袋は魅惑的」
「おま、なんだそりゃ――」

続く言葉は、またもや続かない。
ひたりと絹の頭髪がシュラの口元へ当てられたのだ。

――一瞬で間合いを取られた!?　この俺が！

気づいた時にはもう遅い。
口元へ片手でグーを作って絹が笑顔。でもシュラの秘部が鷲掴まれる。

「――ふぉぉあっ!?」
股間をいきなり握られたのだ。

「シュラ様、奈奈ちゃんの事はこの際いいんです！」
「は、はぃ!?」

シュラが着ているのはパーカー。
履いているのは外行きの堅めのデニムズボン。
しかし、いかな堅めの素材でも、怒りに溢れた彼女の前では所詮ただの和紙みたいな物。
何の防御にもなれず――

「き、絹ぅ!?　ちょ、何て事してんの!?」
「絹だって、恥かしいです！　は、はしたないと思っています！　殿方のこんなところに触れるのは、はじめてでございますし！」

「だったら止めようよ！」
「でも、こうした方がいいと！」
「誰が!?」
「言えません！」
――奈奈か!?
見れば奈奈は恥かしそうに頭を振って、それでも眼差しは眇める様に半眼だ。冗談っぽいけど、本気で怒っている。

そして確信するのだ。この半眼から一体誰が絹を唆してるのかを。

「って、考えるまでもないな。奈奈だ！　こんなん教えるの奈奈だろ！」

「うん、教えた」

隠す気もないらしい。

「だって、奈奈ちゃんが、シュラ様を制御する時は、ここを握れと……」

その言葉に、何故か姫が真剣な眼差しで頷いた。

「何を頷いてるんですか瑠璃姫⁉」

「も、申し訳ございません。で、ですが！」

「ですが！　って、なに⁉　いや、それもだけど、奈奈！　お前は俺の味方じゃないのか⁉」

「すまん、こっちの世界はお菓子？　美味しいな。幸せで頬がおちたよ卵黄ボーロ」

ぼり、ぼり、っと口の中で反芻する。

「どんだけ好きなんだよ！　てか何でそんなのあるの！」

「奈奈たちが学校？　言った時に銅羅が近所の復刻駄菓子屋？　で買ってきてくれたらしい。ありがとう銅羅ありがとう」

「最低だ……。忘れてた、親父が男子よりも女子を大切に！　が信念だってこと！　……ひぎん⁉」

凄く強く握られた。

「話誤魔化さないで」

「ま、まって絹さん、まって！」

「命乞いですか？」

頬を染めて口元でグーのまま。

でも上目づかいで、鋭い殺気。女の子と思えない握力は、屋敷の日々で奉公人の成せる力なのか。

「絹は胡桃（くるみ）くらいなら破壊できます……」
ポソっと囁かれた。
「や、やめて、潰さないで――」
「返答しだいでは――」
おっかない事を返された。
だが、そんな殿方のピンチに味方はいた。
「ま、待ってください絹殿！　シュラ様の大きなの壊さないで！」
姫が絶叫。
「え、な、なんでこれが大きいって知ってるんですか！」
そこで姫が何故か口と下腹部を抑える物だから。
「ちょ……え、うそ……」
何か感ずいたのか絹がよろり。
意味が解らずシュラが、え、え、ともう涙目で絹を見つめ、必死に奥歯を食いしばると。
「こわい、姫様ってこわい！　やるべき事はとっくですか！」
「なに、なんなの……」
シュラが戦慄いて、
「記憶ないなら知らなくていいです！」
力強く握られた。
「ぎゅ、ぬぅ……男が、こんな技で屈服など――」
その言葉にさらに、ぎゅ、ってやられて、ヒン、って哀しい声があがってしまう。
「このまま上下にしごいて……だらしなくも情けない顔を姫様に晒して百年の恋も破壊してしまいましょうか」
「ちょ、やめ……マジやめて!?」

そこで、絹が眇めてた眼差しを、それはそれは笑顔へ変えていく。
……なに、なんなの……と、言葉を出す前に。

「……一つ、宣言して頂けませんか」

絹さんの声が、低く、重く、怖くなる。

「な、なんでしょうか……」
優しい笑顔、重い声。今にも胡桃を割りそうな掌。
そんな状況で、彼女は確かにこう言った。

「姫様の前で、やっぱり絹が一番いい！　……と、仰ってください」

影を背負った絹の前髪が双眼を隠す。
怖い……
でも笑顔。

しかし上段はともかく、さすがにこれは彼女の前で言える訳がない。
いや、姫もそうだが。なにより絹の前で堂々というのが恥ずかしい。

「無茶だ！」

だから、気恥ずかしさを隠して、男らしく否定した。
けど、彼女には、
――恥かしいから無茶だ！
ではなく、
――好きでもないのに、言えるかよ？
みたいな感じで伝わってしまったのだ。

その叫びに、絹の頬が引き攣った。
それどころか口をへの字に地団駄ふんで。

「つまり姫様が一番と言う事じゃないですかぁ！」

大絶叫。そこで姫の顔が歓喜に染まり、両手で口元抑えて小さく跳んだ。
それに桔梗が、「姫様はしたない！」とか叫んでいるが、もう関係ない。

「ちょ、まって!?」

握られた物が上下に揺すられる。

「あ、ま、まって、あ、あ、うぁ」
そうなっては姫との抱擁とか、恰好とか。そんな青臭い物は霧散する。ただただ絹の制御下に捕まっていた。

でも姫がつつ、っとよって。
え、なに？　と涙目のシュラの顔を両手で掴んで。
もう一回、接吻をしたのだ。

「ひ!?」絹の悲鳴。
「ま、まけま、せん！」姫の宣言。

そんな事を言っちゃうものだから絹がふるふるふるふる涙目で震えだした。

「ちょ、絹!?」

遂に力み過ぎた拳槌がぽこんとシュラの顎に落された。
そのまま股間は解放されて。
でも、ぽこんと顔にもっかい落とされて。

「シュラ様は～～、シュラ様は～～～この、粗忽者！」
かなり強いのも落とされた。

「な、なんでそうなるの!?」
「じゃあ、益体なし！」

悲鳴染みた声で叫ばれ、そのまま鳴き声交じりに雑言を叩きつけられポコられる。でも、後で本当はシュラにも伝えたかった言葉があって。

もう形振り構ってられないと判断。

「話聞いて下さい！」

「なんでございますか！　二人の睦まじい成り立ちですか！　絹は、絹はただシュラ様を思って、あの地獄の様な旅路を越えて、あの女狐まであってきたというのに、ひどいいい。ひどすぎるううう。結局姫様がいいんじゃないですかぁ。絹なんて、絹の事なんてどうでも良いんじゃないですかぁ。もういっそ、バッサリ面倒な女と斬り捨てて下さいましぃ」

本気で泣かれて、さすがにこの状況には姫は黙り、肩の奈奈も静かに拝聴。

もうシュラはただ絹を見つめ。

「――き、きょう！」

「――今日なんですか！」

叫ぶどころか、蛇蝎の様な咆哮が返される。

シュラが恐怖で少し縮みあがる。

が。けど、ここでやらないと男じゃない！　そんな一人決意でシュラは両足踏ん張って絹の肩を力強く掴んだ。

「今日、病院終わったら――」

「おわったら！」

「俺とデートしろ！」

一度も言った事のない、漫画やアニメでみただけの、かなり木端ずかしい台詞を吐き捨てた。

風が舞い、四人の女性の髪を流す。

そしてその中で、眉根を必死に、きりりとしたシュラがいた。

力一杯の咆哮は、一瞬でも気を抜けば赤面かまして逃げ出しそうな形相にさせる。

でもでも必死にがんばった。

そしたら彼女はこう言った。

「デートってなんですか？」

風が、吹き抜けた……

真剣な眼差しの彼女がそこにいる。

え、あ、とやはり声が出せないシュラもいる。

それでも一度喉を鳴らして、シュラは恥かしいと分かりながらも、再度……言う。

「東京行った後、俺と――逢引きしろっていいたかったの！　拒否はなし！」

固まる絹。

他三人。

やがて絹がその三人をゆっくり視線を向けて、一人一人に、

……にひ……

と、厭らしい笑みを向けた。

姫が、ぐぬ、と唸ったのを聞くと。下から突き上げるような勢いで、絹がシュラの懐に突っ込んだ。あまりの下からの衝撃に軽く吹っ飛ばされそうになった。でも男の意地で踏ん張ると、

「はい！　よろしくおねがいします！」

絹は高らかに、マジ見せびらかせるように、

爽やかな朝光を弾き飛ばすように吼えたのだった。

＊＊＊＊＊

常磐線に揺られる時間は、シュラにとって長い旅をしてる気分だった。

錘籠を背負う禄武シュラは、気を抜けば心まで重くなりそうな東京行の不安を振り払い、それでも都会が初めてになる同伴者らを心配させないよう都度に笑顔を作っていたのだが。隣の

彼女らは顔が蒼白で。
どうやら次も途中下車が必要かと、少し心配になっていた。
静かに座って本を読む若い主婦。
スマホを弄る髪を金髪に染める学生。
忙しく頭を掻き毟って携帯に必死にあやまるサラリーマン。

最初は、
――あれはなに！
――これはなんですか！
あのおねーさん髪の毛が黄金色ですよ病気でしょうか!?

人を指さし絹は大騒ぎ、その度にシュラが周囲へ頭を下げていた。

でも、ついに絹はぐったりと電車のシートに座って青ざめた顔を振動の中で揺らして、陸揚げされたクロマグロのように唇を開閉運動、虚ろな眼差しを向けていく。とりあえず山手線に乗り継ぐ必要性があるので、上野駅のホームを目指しているのだが。

同じくシュラへ、ぐったりともたれる奈奈を見て。その服が捲れて腹が出てるので直してやると、握り返してくる小さな掌は余りに弱弱しかった。

「こりゃ拙いな。絹、とりあえず次の駅で降りて休憩しようか」
「あ、はい……私も、お願いしたいです」
「奈奈も……。大丈夫か？」
「……だ、大丈夫。まかせろ」

ぐっと、親指立てるが、とても何かを任せられるような状態じゃない。

そんな一行だが、地方の市駅からまずは上野駅を目指していく。そこから乗り換えで東京駅へいく予定だ。
でも、長い道のりの最中に、何回かの休憩を余儀なくされる状況に陥っていた。
簡潔に言えば乗り物酔いです。

機械文明の代名詞ともいえる電車。

それに初めての絹と奈奈は、揺れる感覚が耐え切れず、完全に蒼白になってしまったのだ。

「あ、ほら開くよ。この駅で休めるから」

絹の手を取りエスコート。

奈奈を抱いて涙目で着いてくる絹を伴い下車すると、比較的綺麗なベンチを軽く袖で払ってから彼女を座らせた。

絹と共に腰掛ける四歳児も、この世の終わりが来たような重い面貌で項垂れる。

そんな蒼褪める二人を見つめ。道のりを思い出し、シュラは少し苦笑いを浮かべてしまうが。

ふと、朝の事を思いだしていた。

「絹、念の為に仮面を着けて行かないか」

「はい、それは構いませんが……気になる事があるのですか？」

玄関を出て駅まで歩く道すがら絹にそう持ちかけると、逆に絹から疑問を返された。

シュラは返答に少し戸惑う。

というのは話の流れから伝えなければならなくなる男。

それは奈奈から受け取った名刺の男、名を……牙影だ。

森の中では有希奈の事で茫然として詳しく認識すらしてなかったが、後で見せて貰えばバッティングセンター勤務と記載があった。

本当にそこに勤務してるのか？

そして何故あんなところにいたのか。

何故、あの男も再び黒霧『異』を持っていたのか。

あまりに怪しすぎるあの男。

今回の怪異騒ぎにおいて、何も一端を担ってないと結論を付けるのは余りに乱暴すぎる。なら、調べなければならない存在であろう事は明白なのだが。

あれの話をするとき、いつも絹は顔を強張らせていた。

身分違いの奉公人。

過去に屋敷であの男から何か不埒な事でもされたのか……。

そんな下劣な思考も動くほどに彼女は動揺する挙措を示して、尚且つ周囲へ心配を掛けない

よう必死に取り繕っている。

なら、その全てを受け止めるつもりで、往来でも構わずにシュラは彼女の手をしっかりと握った。

「え、シュラ様……」

突然の行為に唖然とする眼差しを向けてくるが。

「き――」――ばかげに、何かエッチな事されたの？

――言える訳がない!?

でも、気になる。

男として、かなり！

「き？」

そんなシュラの葛藤を知らずに、んん、と上目づかいで覗き込まれる。

しかも片眉あげられ、いかにも何か言いずらい事があるんですね？

そんな顔をむけられる。

でも前に坂で生娘だとも言っていた。

なら、別件だろうか。

心中散々乱れながらも、平静を装うしか方法が無い。

「き、なんですか？」

再度問われる。

でも、き――これ以上声が出ない。それでも必死に声を絞り出し。

「――今日だけは隣を歩いてくれないか！」

必死に言った言葉に、何故かシュラは情けなくなった。

けど、

「え、お、女が殿方の隣を!?」

かつて蓬莱から東山道を通った道中も、基本彼女は三歩後ろを歩いていた。

だからかなり険しい表情だ。

「今日だけは、隣で頼む！」
シュラは溜息を吐いて牙影の事を諦めた。それでも、その言葉に絹は破顔して、本当に嬉しそうに飛び跳ね隣を歩く。
「こ、こんなの端（はした）ないです。恥かしいです。あ、でもでも、嬉しいです！」
何度も告げる絹から遂に手を握られ、シュラは牙影の事などもう口に出せず。その心境を見透かすように、背負う錘籠の上から奈奈が溜息を吐き捨てる。
それが分かって、また情けなくなっていた。
実は、未だにシュラは錘籠だけは背負っている。
黒霧も白布でぐるぐる巻きにして、籠に放り、遠くから見れば牛蒡（ごぼう）の束でも入れてるのだろうと思われる程度。そして籠には周囲から不審がられないよう適当な物を詰め、上から布を被せそこに奈奈が座る。そんななんとも微笑ましい光景ができあがっているのだ。
そんな三人が駅に到着すると。駅の改札手前には看板があり、昨今の騒ぎの事をオブラートに包んで印してあった。
『防犯の為に、この地域から出ないよう御協力をお願いします』
それに視線を通して、そのままシュラは改札前で切符を三人分購入。訳が分からずおっかなびっくり獅噛みついてくる絹に、「これが通行手形、ここが札を改める改札だ！」と、告げると大いに納得された。
改札口でひっかかったりとお約束もしたところで。怖々と着いてくる絹と、口をへの字に籠の上で揺れる奈奈。
そんな奈奈も、目の前に巨大な電車が通過したら、
「アホシュラ、な、なんだあれ!?」
遂に目をむきシュラに抱き付いた。
しかも絹も絶叫した。
「うわぁ、あ、あの鉛色の、うわ、こっち来ましたよ!?　風が、突風が!?」
「電車です」
公共施設の事や各駅を繋ぐ路線の事を説明をするが、既に二人とも聞いちゃいない。

ぐい、っと絹からも引っ張られ。

「こ、ここ、ここはなんなんですか⁉」

「駅です」

淡々と答えるシュラ。周囲の混雑の中でも響く通過電車のアナウンスや、まだ通勤時間帯に掛かってるのだろう人の波。訳の分からない都市中枢部へと通じる現代の文明は、絹をわなわなと震えださせ、その展開する世界に、

「な……なんだ、この異常な世界は……」

遂に奈奈にまで呻きを上げさせる。

「ひ、人が……こんな狭い場所に密集しています」

絹がシュラにヒシと抱き付く。

「斬月の街の時だって、大勢いたじゃない」

「あれは、お触れが出て、天和から早馬を使ってあちらこちらから人が集まったからでございますよ。あの時は、訊けば都の方にまで知れ渡り、馬山車（うまだし）まで多く出たとかなんとか」

「馬山車？」

「数馬で巨大な籠を引かせる乗り物ですが……こわ、あの鉛色の籠、こわ⁉」

「大丈夫だよ二人とも。ちょっと硬くなった馬みたいなものだから」

そこで後頭部へ奈奈が獅噛みついた。

背中の奈奈に手をやると。奈奈が指先を必死に握る。

「奈奈を馬鹿にしてるのか！　馬があんなでっかく――また来た⁉」

やっぱり悲鳴をあげた。

でも、この電車は快速で、ようやく来た電車にこれで乗れると安堵する。

「あ、これ乗るからね」

『――はい⁉』

奈奈と絹が同時に色濃く、嘘だろ――？　的な声を発っしてきた。

ちょっと面白くなってくるシュラだったのだが。とりあえず絹が幻術の仮面を着けて、目立

たない女性の顔になってるのを確認すると、二人を連れて比較的に空いてる女性専用車両に乗り込んでいく。

昨日、教わった幻術の仮面の正しい使用をしてみたかったのだが。

兎にも角にも電車で視線が向けられていた。女性車両だからだが、ここは別に完全女性の為の車両じゃない！　と自己主張してもやはり見つめられる。

ただ、絹も奈奈もいるという状況は、ちょっと目には親子連れ、もしくは中のよい兄妹くらいに見えて、きつめのおねー様の視線もやがては霧散していった。

それを利用して、ごった返してる車両を回避したのだが。

「絹、奈奈、とりあえず気分が悪くなるかもだから座って行こう」

車両が初めての二人を危ぶんでの発言だ。

けど、絹は動き出した電車に悲鳴。

奈奈は動き出す車窓からの眺めに靴を履いたまま窓辺にへばりついてしまう。

そんな彼女の足は余りに古いサクラのお古だ。

「東京出て、病院に行った後に皆の服を買おう。できれば下着もだけど……」

「わ、わかりました！」

本当に聴いているのかいないのか。

絹は半狂乱寸前で上の空。つり革からの広告、電光板に出る文字、全て訳が分からないときょろきょろ見回し、その度に「あれは、あれは！」と肩を揺すって聞いてくる。

――そして冒頭へと行き付くのだ――

「大丈夫？」

蒼褪め項垂れるままの絹が幾度か嗚咽を漏らして頷いた。

幾つかの線が交わる大型の駅のベンチの上でぐったりと身を横たえ、奈奈も同じように籠の上から絹の頭に頭を寄せて倒れている。

ホームを忙しく歩く人は多い。背広姿の女性や学生、スマホで叫びながらの往来は、そんな倒れる二人に目もくれない。

ただただ忙しく日々の始まりに向かっていく。

「ここは……凄い忙しい世界だ」

「前に庵で言った通りだろ？　慌ただしいって」

「ある意味、ここは本当に根の国だ」
「地獄か？」
「ああ、伝承通りだ」
なんか申し訳ない気分になる。

さすがにこの状態で電車に乗せる事も出来ずにシュラも足止めを余儀なくされるが。持参したガラパゴ携帯がメールの着信音を報（しら）せた。
「どした？」
「親父からのメール……手紙だ」
「本当にいながらにして手紙がもらえるのか!?」
奈奈が興味深げに訊いてくる。
なので奈奈に携帯を見せ、そこに文字が掛かれている事を確認させた。
それに奈奈が感嘆の声を上げる。
「予定通り家に着いたって。桔梗が姫に甘い物を買ってきてくれ！　だってさ」
「それは奈奈も異論はない」

こうなれば別に急ぐ旅でもないと判断。
絹たちの回復を待って出発をと、時計を見ながら現地到着の予定時刻を組んでいく。

「す、すいません……この絹とした事が、はしゃいでしまいまして。も、もう大丈夫ですから」
「顔色が真っ蒼だよ。病院へは今日中に着ければいいから。少し休んで。あ、何か飲む？　自販機で何か飲み物あるけど――」

「じどーはんばいき！」
「え、な、なに？」

突然絹が、声を強く放ってきた。
意味が解らず首を傾げれば。

「噂のじどーはんばいき、あるのですか!?」

なんだろう噂って、一体何を言ってるのだろう。
まさにそんな眼差しを絹に向けてしまうシュラだが。ふと、二人旅の時の事が脳裏をよぎり、

「あ、まさか……あの、東山道での……」
その時の会話を思い出した。

「はい！　お水とか、品々を、手軽で小銭でポンと出てくると仰ってました！　それがここにあるのですか⁉」

くわ、っと絹がガブリ寄る。
なんだ、それ！　と奈奈も寄る。

「あるも何も、絹の隣にある機械、それが自動販売機だよ」
「え⁉」
二人で慌てて振り返り、そこで輝くライトも眩い自販機を見留めた。

「こ、これが……念願の」
「そこまで感動されると俺も嬉しいけど、あ、これ小銭。これをね――」
「――あいやッ、待ってください⁉　絹がやってみます！」
「え、構わないけど」

彼女の掌に二人分と百円を四枚を握らせた。

「うぉぉ……これがこの世界の貨幣ですね⁉」

声を張り上げる絹。
周囲がじろ、じろ、っと痛い視線を飛ばしてくる。

しかも奈奈も調子を戻して興味津々。
四つ這いでシュラの膝の上を乗り越えて絹の背中にダイブ。そして二人で多様な商品を眺めては、

「これ、蜜柑だ！　なんか小さいのが、飾ってる。これ蜜柑が中にはいってるのか⁉」
「いえ奈奈ちゃん、これは銅羅様の仰ってた、プリントという物でございます！」
「ぷりんとぉ～(語尾上がり気味)！」
「見て下さい、こっちは、まさか桃ではありませんか。幾つ物泡を弾いて、なんとも甘露な状

態で固まってます」
「こ、これから選ぶのか。ここは天国だな！」
さっき誰か地獄って言ってなかったか？
と、突っ込むのは無粋かとシュラは微笑ましい光景に、ただ一時だけ、向かう先の事を忘れていく。

「――それよりこれ、このプリントされた濃紺色のかんじゅ～すを飲む殿方。なんとも鬼の様な強面の方ですね。異人で御座いましょうか。こんなのに睨まれたら悲鳴を上げそうです」
「鬼だな、きっと！」

凄く失礼な事を言い合い二人でワイワイ。
そのうち絹がボタンをポチン。

「――なにも起りません！」
非難轟々、唇を◇に尖らし怒って来た。

「こ、小銭入れて。全部」

がちゃん、がちゃん、――ぽち、ドガラガシャン！

「でました！」
「良かった！」

これで当分一安心、少し落ちつくだろうとシュラが安堵に溜息を衝くと。

シュコ
教えたとおりペットボトルの蓋を絹が開けて。
でも硬直。

そして美よう●ょ様も取り出し口から一缶を掲げた。
「奈奈も出た！」
「良かった！　でもそれブラックコーヒー！」
「なんだそれ！」
カシュ――ブルタブ開けて。

ごきゅ、ごきゅ！

「――うげぇ!?」

奈奈が盛大に吐き戻した。

「ほれ、俺がミカンジュース買ったから交換。で、絹は何で硬直してるの？」

「シュラ様、これ、なんか」

「なに？」

何故だろう、絹は炭酸入りのペットボトルを掲げて涙目で。

「あ、炭酸苦手なのか!?　って、まだ飲んでないよね。怖がらなくても大丈夫だよ、それは口の中がパチパチするくらいだから」

「あ、いえ、そうではなく……」

「ん？」

そこで何故か絹はもじもじ。

しかも、ちら、ちら、っとわざとらしくシュラを見た。

何か嫌な予感を感じつつも、

「な、なに？」

シュラは敢えて問う。

すると――

「なんか形が……坂で見てしまったシュラ様の……アレの部分に似て……卑猥です」

「やかましいわ！」

思わず素でつっこんでしまう。

「だってこの先端部分、ほら、ここ！　ここに口を付けるというのは！……あまりに……きゃ／／／」

「きゃ、じゃないよ!?　頬を染めるな!?　ええい、じ、じゃあ、こっちのブラック缶コーヒー。飲みかけだけど、いってみる？　やけに苦いけど」

「の、飲みかけ!?　そ、そちらで！　むしろお願いします！　これは余りに無体です」

気分が悪くても余りに元気な絹にコーヒーを渡すと、ギラっとした眼光で、はぁはぁと荒い息。一瞬シュラに眼光飛ばして、クワ、っと一気にコクコクやっていく。
くは、っと開けた唇は艶やかで、漏れる吐息もいやらしく。

思わずシュラは視線を背けた。
そして缶ジュースをゴキュゴキュ飲む奈奈を見ていたのだが。

「アホシュラ、ちょっといいか。絹ねぇねぇが復活する間に」
「ん？　なんだ？　もう完全復帰してる気もしないが」
「アホ。それより……見られてるぞ」
「見られてる？　誰に!?　あ、でも皆見ると思うぞ、ここまで大騒ぎしてたら」
「そうじゃない。たぶん……この気配は……人間じゃない」

通勤時間はようやく外れ、周囲の人波は捌けてまばらにいる程度。視野が閉ざされるほどではない。ならば誰かがこちらを見ていればシュラならば気づく。

シュラは双眸を眇めて周囲をみるが。

「誰も、こっちを見てないぞ。……例の化け物か？」
「分からない。けど……森の男に気配が似ている」
「あの男か」

牙影の黎弥。

ようやく顔色を戻した絹に伝えたい名前ではない。

「そろそろ行ったほうがいいかもしれないな。誰か尾けてるならはっきりする」
「ああ、もう奈奈は大丈夫だ。たぶん慣れた電車？　にも慣れた」
「わかった。絹、そろそろ行くよ？」
「え、あ、でんしゃ……きましたか」
「うん、あ、丁度来た」

我孫子方面から上野に向けての快速が迫って来る。

「はい。御心配おかけしました」
気配から逃れるようにシュラは立ち上がり、絹を抱き上げる。
「え、しゅ、しゅらさまぁ!?」
瞳を白黒、声音を崩して彼女は面貌を赤くする。
御姫様抱っこだ。
緊張に赤面する絹。
その仕草を楽しむ間すら惜しんで、周囲の眼なども気にせずシュラは電車に乗り込んでいく。

空いてる車両の一番端の席。
そこから周囲を見つめるが、やはり誰かがこちらを覗いている気配は一切ない。
それでも奈奈は警戒を怠らないようで。持ち込んだ缶ジュースを口でガジガジしながら見つめている。
そこに絹を深く座らせると、ぽーっと、蕩け顔。

「絹？」
「え、あ」
面貌を赤いまま身を竦めて指をこねこね。

「あ、あの……ありがとうございます」
「ごめんね。気分悪くなったらまた降りるから」
「いえ、そんな……ありがとうございます」
絹の礼を受け取りつつ錬気を張る。

「いるか？」
「いる、乗り込んでる」

室内に、薄らと闇の霧が漂っている。
「瘴気が微量だな」
シュラと奈奈が絹の隣に座り、それでも警戒の気は放っておく。

電車の中。
牙影の気配、もしくはそれに準ずる何かを警戒して、シュラと奈奈は錬気で視界を飛ばして

いく。
ただ、それでもおかしな点は見当たらない。
しかし奈奈が言う以上は間違いない。何かがある。

そんな中でも絹は事情が分からないのだろう。
やけに瞳を忙しく動かし、お姫様だっこされた余韻から脱出するべく、必死に言葉を探していた。これはいけない、これでは余りにだらしない。
勝手にだれていく面貌を警戒して絹はとても必死になっていた。

「こ、ここは毎日、こんなに人が大勢なのですか？」

そしてそんな意志を含む言葉を向けられたシュラは、絹の顔を見て全てに気づく。
その顔は、どうみても恋する顔だった。

「え、そう、だね。でも昔に比べると減ってるらしいよ。少子化とか言われてるし」
「少子化？」
「若者の働き場所がなくて、お給料も少ないから子供を増やしたくても増やせない現象……と言えばいいのかな」

話をしていれば気がまぎれるかと、周囲に錬気の眼を飛ばしながら話をする。
奈奈は白布で包んだナタに手を振れている。
あの牙影なら攻撃はないだろうが、この周囲に取り巻く気配は何かがおかしい。

「それは変でございます」
でも、絹は割と強めに声を放ってきた。

「え、ど、どうして？」
「若者に銭が回るように仕組みを作り、若者に余る程の食い扶持（ぶち）さえ確保させれば、若いのですから人は嫌でもふえていくのは必然。そして働き場はますます銭は増えるモノ――なら、どこかに銭が消えているのでしょう。お心当たりは？」

この世界を知らないはずの絹にしては的確に世情を射抜いてる気がして、シュラは錬気を留めて敢えて話に参加する。

「上司っていう……働く場にいる老人がたっぷりもっていくから？」
「それはおかしいです」
「な、なぜだい？」

やはり余りに強い言葉に声を失う。
こういう話が好きなのだろうかとシュラは改めて絹の知らない一面に驚くが。

「老人は労働力が無くなるもの。ある程度賃金が増えれば身を引くが必然。その為に貯えという言葉があります。ならばそちらに回すのは国の民を減らし、国を蝕み、小国とさせる元凶となりましょう。既に子宝への生産力はないのですから。優先的に若者へ銭を回せば国は回り、民は増えます」
「なるほど……」

的確に、ばっさばっさ日本の常識を斬り倒す姿に。ちょっとすごい……と、シュラは思わず絹を見直すが、彼女は昔から蓬莱の紘羽町で奉公をしていた子。そこらの世の仕組みみたいな物に詳しいのかもしれない。
そんな話に盛り上がっていたのだが、周囲は闇の霧が溢れ始めていた。
シュラは……つつ、っと冷や汗が出る。

「ただ変ですね」
「な、なにが？」
「全ての事柄には理由が存在します。こんな事、国の政（まつりごと）する者なら気づくもの。なら、若者に多く渡さない、渡したくない、むしろ民草を一時的に減らしたい理由があるのか……と」

絹が顎に手をやり双眼を細める。

「増えないのではなく、増えては困る理由があるって事か」

シュラの言葉に絹は厭らしく瞳を光らせた。
なんだろうと、シュラが見つめると、何故か背中にもう一筋冷や汗が垂れてきた。

「戦乱の世から踏まえれば……例えば、国を明け渡したいとか。一定数減ったので、別国から人を招き入れ、その国へ併合させるとか……」

ニヤリ、っと笑うのだ。
――怖い、絹さん怖い！
そうは思っても、あくまで推論。
あくまでただの雑談なのだ。
だからシュラも何か言いたかったのだが、
「部外者の絹が、他の世界を悪く言ってはいけませんよね。ニコ」
っと締めくくるように微笑むのだ。

立つ瀬も無い。シュラはただ茫然。何故だか怖い事を言われた気がして身震いを起こす。
さっきの照れ隠しに始まった話だろうが、彼女が本気になると何か違う方向性につっこんでいく。そんな気がして、彼女が何か暴走しかけたら、なんとかしよう。
シュラはただそう彼女を見つめて誓うのだった。

そんな絹はシュラの決意もしらぬまま、微笑を浮かべて瞬く間に揺れる感触に身を任せてウトウトと転寝をこき始めていた。

「と、とりあえず今はゆっくり休んで……」
そう告げたシュラは奈奈と頷き合うと、改めて周囲へ錬気を飛ばす。

ただ、シュラは仮面を着けているため、あまり効果は薄い事に気が付いた。
それでも出来る限り錬気を上げていく。

連結車両のさらに向こう。
這わすように気配を飛ばし、さらにとばし、それでも迫る影は見当たらない。

ただ、やはり色濃い闇が漂っている。
それは天和で見た不知モノとは違う闇のようにも感じられた。
奈奈もその事にはきづているようなのだが。
やがて小さな美よう●ょが唇を動かす。

「いないな。牙――」
「奈奈、念の為に名は出さずに頼む」

奈奈の言葉を掌で制す。

コク、っと頷く奈奈。
まだ微睡（まどろ）んでるだろう絹を慮って、二人は敢えて名は伏せて話す事にした。
「正直、あいつとは相対したくはない」
奈奈がぼそりと言う。
「ああ、あいつ相当の剣術の手練れだな。一度蓬莱の紘羽町の屋敷で相対した事あるんだけど、その時も度肝を抜かれた。でもやばい強さってのは森の時ではっきりしたよ」
「いや、それどころかあいつ、奈奈の太刀を受けて怯まなかった」
「お前がすっとばされるとこ初めて見たよ」
「あれはわざとだが」
奈奈がミカンジュースをチビリとしながら言い放つ。
「え？」
シュラが隣に座ると、足をぱたぱたと子供用の赤い靴をふりふりしながらシュラを見る。
「あの時、わざと競り負けたようにしなければ不審に捉えられた。そうなれば余計警戒される。そう思った」
「それじゃ、お前、あの一瞬でそこまで考えてすっとんだのか？」
「だからお前の胸に飛び込んだ。良い嫁として！」
「そ、そうですね、ありがとう」
そしてそれらを別にしても、冷静にあの男の事を考えれば幾つか納得できない点が浮かんでくる。
「よくよく考えて……あいつ……さ。幾つか不可解な点があるんだよな」
「なんで坂を通れたか、か？」
「ああ」
「四三ねぇねぇが、当分道を開けておくと言ってた。だから無人の坂を昇ってきたんだろう」
「だけど、それは俺達の後から来たからって事だよな？　あの態度に出で立ち。あれ、相当こっちに馴染んでるぞ？　とても同じ日、俺達の後に出て来たとは……」

「坂を出ると時が狂う」

奈奈がくい、っと缶を飲み明け、飲み口を眺めた。

「これ美味いな、でも歯が痛みそうだ」

甘味たっぷりな飲み物に奈奈が、ゲフっと息を吐く。

しかしそれよりも気になるのは。

「時が、狂う？」

「あそこは時が歪んでいる。珠を持つ者は、本来の両世界の時の流れに合わせて出入りが可能だ。天和では約二か月でも、こっちでは一週間？　くらいが本来の流れ。だからたぶん、あいつは自らの珠を所持せず、アホシュラが開いた風穴に飛び込んだと思う。そうなれば仮に誰かといても皆バラバラだが」

「時の流れが歪んでる為に本来の時間で出られないって事か」

「ああ、なら後から来た奴がここにきても、先に出た奴より後とは限らない。あれ、前、言わなかったか？」

「言ってたかもだが……すまん忘れた」

奈奈はそこで溜息を吐き、シュラの頬を指先でグリグリする。

「いずれにしろ奈奈がこっちに入るまでは誰も風穴を通らなかった。奈奈は薄らいだ風穴にとびこんだから、奴はそのすぐ後、消える直前に来たんだと思う」

「何のためにだろう」

「表向きは、月に猛る王の従者として……裏はわからん。それと一つはっきりした」

「なに？」

「目的の奴、たぶん、上にいる」

「上って、この電車の屋根か⁉　百キロ近く出てるぞ」

「キロ、速度の計りか？　いずれにしろ、最後まで尾いてくる気だろう」

「マジか……じゃあ、この漂う気配は」

「それはもしかしたら……別かもしれないがな」

背後から、ひたりと闇の足音を感じるようだった。

それでも今のシュラにはどうにもならない。

そして幾多の疑問を抱いたまま遂に電車は上野に着く。

そこは、シュラの知る世界とはかけ離れた駅だった。

シュラと絹、奈奈は広大な上野駅を足早に進んでいた。

歩行者用通路はテープの区分けで狭められ、本来は売店等も並ぶ開けた通路は様相を一変させている。

そこは既に倒れた人々で無数に埋まり、血だまりの中で救急隊員が懸命に治療へ当たる光景が展開されていた。

壁の幾つかには迫り出す何かを覆う様にシートが被され、たぶん崩落させられたホームの瓦礫が剥き出しになっているのだろう。その惨状を、通路を走るシュラたちにも容易に想像させる景観を作り出している。

そして絡みつくような黒い霧が、通路中に立ち込めていた。

シュラは背負い籠に奈奈を乗せ、はぐれないよう絹の手を握って歩を進めていたが、遂に人波の途切れた通路の端で振り返る。

ちらほらと見えるサラリーマン。

部活なのか通学中だった学生。

それらは皆等しく横たわり、呻きだけを周囲に響かせ通路の中を混沌とさせていく。そして床には引きづられたのか、こびり付く大量の血痕が惨劇を語り、その先では幾つかの――人の部位が散らばっていた。

そんな惨状に絹は蒼白の面持ちで息を飲むが、仕事に遅れそうなサラリーマンたちは、シュラ達を邪魔だとばかりに押しやり、黒い靄を気にかけ口を抑えて狭い通路を駆けていく。

「よく分からない世界だな。人が倒れてるのに見向きもしない」

奈奈がポツリと漏らす。

「この世界は、みんな規則に忙しいんだよ。それよりこれ……あの化け物のせいなのかな」
「その可能性は高い」
奈奈がシュラの呟きに応える。
「シュラ様、ここは何故こんなに黒い雲が多いのでしょうか」
告げられた言葉に、シュラはようやく確信する。
「やはり絹にも見えるのか？」
「はい。と、仰られるという事は、本来は見えない物なのですか？」
絹が惨状に震え始める体を抱き締めながら訊いてくる。
それにシュラはそっと彼女へ腕を回して抱き寄せると。絹は少し驚き顔を浮かべるが、そのままシュラに身を任せた。
「この霧は、天和で、不知モノが現れる時にだけ見えた霧なんだ」
「シラヌモノ……が、ですか!?」
「ああ、師匠の話では太刀の継承者のみに見えるらしいんだけど」
そう、不知モノに見えた霧。
――あとは、闇漂人（ヤタビト）の弐癒芙。そして黒霧の誘いに変貌した駈月から見えた。
ただ、そこは不要かとシュラは敢えて絹に伝えなかった。
そして話を続ける。
「なのに俺の世界では、それが誰の眼にも露わになり、逆に俺の錬気は俺だと見えなくなっている」
「使えないのですか？」
「いや、使える事は使えるが。仮面の影響か力が弱くて――」
二人の会話の中、遠く三番線に電車の入場を伝えるアナウンスが響く。
「あ、絹ごめん!?　次に乗る電車が来るから、話はあとで」
「は、はい!?」

慌ただしく言葉を止めて、シュラたちはホームに入って来た電車に間一髪乗り込んだ。
そして進み出す世界を見て、
「秋葉が……、どうなってるんだ」
真っ先に瞳に飛び込んできたのは、秋葉原の通りを埋め尽くす崩落したビルの群れ。
一際巨大なビルが倒壊したのだろう、その余波で周囲のビルは巻き込まれ、巨大な爆撃でも受けたように軒並み崩れて瓦礫の山を生んでいる。
あがる黒煙。
闇靄の中に混じる粉塵。
自衛隊のトラックが、緊急用の蒼いサイレン灯を回して幾つも止まり、救護テントの屋根もちらほら見えている。
一体何があったのかはシュラには理解できないが。
無機質な電車はただ振動をシュラ達に与えて通り抜ける路線の上から壮絶な景観のみを見せつけていく。そうなれば展開される惨状に、小栗鼠のような明眸を讃える絹にすら酷い怯えと困惑の色を浮かべさせていた。
そしてそのまま東京駅へ着き、シュラらは慌ただしくホームを抜けて駅を出た。
「――シュラ様、何か様子が」
「うん、こっちも様子がおかしい……」
『戒厳令――進入禁止』
駅出口には人が大勢山を作って立ち往生させられていた。
中央に堂々と掲げられた掲示用の白い板には小難しい説明書きがあり、シュラが流し見するだけでも、一般人への警告と、部外者の東京への侵入が完全に制限する内容が書き込まれている。
「物々しい警護ですが。この札にはなんと書いてらっしゃるのですか？」
「どうやら一般人は東京へ入るなって事らしいんだけど、原因は書いてないね」
「そうなりますと、病院にいけないのですか？」

「このままだと……入れない」

駅出口に広く設置されたバリケード。

その向こうではやはり崩落する建造物が目につき、秋葉原と同様に黒煙の作る帯が無数に流れて浮かび上がっている。

崩落した瓦礫の向こうから響く悲痛な絶叫。

網膜に展開する遠くで輝く赤く発光する何か。

そして蝸牛を揺らす地鳴り交じりの衝撃音。

鼻孔を擽るのは紛（まが）うことなき硝煙が生み出す硫黄の臭い。

ありえない光景にシュラも息を飲んで見つめてしまう。

「おい、何で東京に入れないんだ」

奈奈が、バリケードの傍で拡声器を使って避難勧告を伝える自衛官に問いはじめた。

ただ振り向いた屈強そうな自衛官は、その面貌を恐々とさせ、視線を駅やら表通りやらへと向けていく。

それでも簡潔に。

「戒厳令が敷かれています。詳しく話せません、直ちに東京駅から退去して下さい」

決まり事だろう定例文を読み上げるように、その若い自衛隊員はシュラらにも誘導を促してくる。その瞬間、

――ドーン！

一際大きい振動が起り、建物の一つが崩落。周囲が悲鳴で沸き上がった。

やがてそれを合図に、小刻みに耳朶を揺らす銃声の音が激しく場を乱していくのだ。

怒声交じりの叫びが、隊員の所持する無線機を通して忙しく聞こえ初めていく。中にはその無線に狼狽えた声を返す者もいて、シュラも状況が拙い事だけは把握した。

そんな状況の中で、東京駅から出る事の出来ないサラリーマンたちが、必死に食い下がって

職場へ向かおうとしていた。絶対阻止とばかりに十数人の自衛官が立ち塞がり、その姿にさらに罵声交じりの醜い対立ができあがっていく。それでも対暴徒用の構えでの出で立ちに、一般人らがスマホやら携帯やらで連絡を取り合い始める。

そんな異常な光景に絹は肩を震わせ。シュラは何もできずに肩を抱き寄せていた。

「……このままじゃ、本当に行けないな」

「ああ、時だけが過ぎる」

シュラの言葉に奈奈が相槌を寄越す。

終わらない絶叫。

何かの荒い呼吸音。

報道規制がされているのかテレビでは一切知らされてない現状が確かに展開している。

「病院は遠いのか？」

背後の奈奈が問う。

「そんなに離れてないよ」

一気に錬気で飛び越えてもいいが、さすがに人の眼がつきすぎる。

そんな折りだ、絹が小さく囁いた。

「何故ここはこんなに物々しい警護なのでしょう。お武家さまでしょうか、益々こちらへあつまってきます」

絹が示すのは自衛官だ。

そして集まる理由なら日本で暮らす者ならすぐにわかる。

「天和でいう西の都にいるっていう帝？　こちらの世界で言う日本の象徴みたいな人が、すぐそこに住んでるからだよ」

「なるほど」

と、奈奈が周囲の異様な警戒態勢に納得を示す。

そして耳に唇を寄せた。

「方向が解るなら、さっきの電車？　がくるところが吹き抜けだ、そこから早駆けで抜けたらどうだ」

「あ、そうか。あそこなら行けるか！」
シュラは絹を連れて構内に戻り、入場者ようの安い切符を購入。絹と共に一度改札を潜ると駅のホームへ。さらにホームの先端に移動し、絹を御姫様抱っこで抱き上げる。
「ちょっと辛抱してて」
一気に錬気を足の指へ伝わせ。ホームの反対側から電車が入る刹那、皆の視線が向けられた頃合いに。
線路と一般道を隔てる柵まで一足飛び。が――
「あれ!?」
「どうした？」
シュラの間の抜けた声に奈奈が問う。
「いや、錬気が……ちょっと練りが甘かったらしい」
仮面の影響とは思えないが。錬気の作りが余りに悪くて、危うく失速しかけてしまう。
それでも柵は飛び越え一般道へ。
そして自衛官の眼を盗んで早駆けで、シュラたちは一路、大学病院まで駆け抜けていく。
そして、進めば進むだけ恐ろしい光景に、生唾を飲み込む事になるのだった。

忙しく走る自衛隊の専用車両が排気口から激しく黒煙を噴き上げていた。
物資の積み荷から、物々しい武器が運び出される世界で。怒号と号令が交差している。その中で、シュラが視線を流して見つめれば、崩落したビルや建造物、置物と化した無数の車が歪に拉げて電柱まで巻き込み倒壊，路上にまき散らされている。
そして車道は赤の液に染め上がり、引きずったのだろう人の肉脂が無数に帯を作って引っ張られている。放置された人だった塊が、葬ってくれとばかりに無残な形姿を見せつける。
その現状に絹は顔を背け。
シュラは、現実が信じられず奥歯を噛みしめた。
「本当に……ここは俺の知ってる、俺の世界なのか」
交通の秩序ともいえる信号機は斜めに傾き、既に通電がないのか噴煙と砂塵の中で、過ぎる部隊の車列の群れを、まるで墓標のように佇んで見送っている。

その光景の全ては、まるで見知った世界と思えない。
不用意に飛び込んだ世界で、走るシュラの身体を異様に強張らせていた。

そしてシュラは原因を考える。
考えれば、考えるだけ、自分を苛むと知っていながら――

「鉄の塊が、鉄の家が動いてます」
そんなシュラの心情を知らず絹が胸元で囁くが、戦車や車は、絹たち天和の人からみれば、そう見えるのかもしれないと納得した。

「あれは戦車とか、国を守る兵士達の専用の車だよ。戦いのね」
「車……」
少し、絹の言葉に沈みそうな心が救われたような気がした。
絹が風に乱されそうな髪を抑えてシュラへ問う。

「こちらでも戦はあるのですか？」
「本来はないけど……外の国ではやってるんだ」

――しかし、これではまるで国内で戦争が起ってるような状況だ。

そんな思考に気づいたのか。
絹がシュラの心情を観る様に覗き込んで来る。

シュラは何も返せず、行く先を見つめてただ作り笑いを浮かべるしかない。そして、絹はよわよわしくも掌をシュラの頬に押し当てたのだ。

「戦が起きれば……人が大勢死にます……」

「みんな、それを理解している。でもこっちの世界は、人を殺す武器を大量に売れば莫大に儲かる輩がいる」
「お金絡みで戦をするのですか？」
「人の存在は紙の上の数値でしか記載されない。血を吐き、肉をまろみ出して、もがき苦しむ現実を、儲ける輩はその身に浴びる事がないから。幾らでも推し進めている……もちろん他国

でね」

「それはまるで……地獄の亡者が支配している世界です」

絹が寂しそうに呟くがシュラはその言葉に息を呑む。

正論を受け取ったような気がしたのだ。

そしてその言葉に何も返せず、シュラは乱れる錬気に任せて疾走を続けた。そして奈奈は、何も言わず、ただ籠の上からシュラを見つめていたのだ。

目標の病院は、すぐに視野に飛び込んできた。

幾多の自衛隊の車が横付けされ、また赤色灯を動かす救急車もかなり集まっている。その玄関へ辿り着き、救急搬送される数多くの自衛官に紛れ、シュラと絹、そして奈奈は病院の中へ入っていく。

「受付で手続きしてきたよ、行こうか」

搬送車からの人で混雑を極める一階ロビー。

喧噪から離れるようにエレベーターに移動すると、他の階層へ上がる感覚に、

「な、なんですかこれ、体が押し上げられているような!?」

「実際上の階にあがっているんだよ。ちょっと気持ち悪いかもだけど我慢して」

怯える絹と驚く奈奈を支えて目当ての階へと辿り着く。

父親から知らされた室内は、個室病棟に位置づけられていた。

そして、消毒液の色濃い廊下を進み、奈奈も絹も天和ではありえない光景に周囲を見回しながら、ただただ進み。やがて卯月有希奈の名が掲げられた部屋をみつけだした。

「ここだ……」

「シュラ様、あの顔色が」

「え？　いや、大丈夫だよ」

コンコン……

軽くノック。

けど、返事はない。

「有希奈、俺だ、入るぞ」

絹と仮面を外し、そのまま扉を開ける。
清潔な白い室内、その開かれた窓辺から、透き通るような風が吹き込んできた。

そして窓辺の際に、長い黒髪を一つに纏め、肩から流す白いパジャマ姿の少女がいた。
薄い眉尻は長く、それでいて猫目がちの黒真珠のような瞳は艶やかに美しい。眉間から鼻唇までの稜線は起伏に富み、その表情は、あの時浴場で見た姿とは異なり穏やかで。そしてその美しさは、周囲の女性らと一線を画する物があって、絹ですら息を呑む――が。

「姫神の紘羽アカネ様――!?」
絹が悲鳴にも似た声をあげた。

絹が有希奈を見て驚くのはシュラも予想が出来ていた。
それは、全く同じ事をかつてシュラも思ったからだが。それよりシュラは一緒にいる女性に気づいて言葉を失う。

「サク……ラ……、お前、なんでここに」

地毛で茶色の髪を大きな赤いリボンでツインテール。幼顔の少女がそこにいる。年齢は十三歳。愛らしい容姿だが性格はかなりきつい。
シュラの死に、迫ったマスコミから有希奈と共に家を去った実の妹だ。
その少女が穏やかな顔を驚愕と、茫然。遂には怒りにも似た双眸を揺らしてシュラを見つめ、やがて力無く立ち上がった。
そしてツカツカと歩みを寄せて。

――パシン！

鋭い音と共に平手打ちが放たれた。
その突然の行為にシュラは訳が分からず茫然と彼女を見つめ。それにサクラが溢れる様に涙の滴を溜めてしまう。

「なんでここにじゃない！　――どういうつもりよ！」
「サクラ……？」
「サクラじゃない！　死んだはずなのに、葬式もしたのに、死体もみさせられたのに、でも生

きてるし！　生きてるどころか、訳分からない世界にいたとか、戦ってたとか⁉　あの馬鹿親父を騙せても私は騙されないし！　一体どこにいやがった！」
「え、いや……ちょっ、話を聞いてくれ⁉」
「聞きたくない！　しかも、しかも――」
振り返り窓辺で外を見続ける少女を指さし。
「――有希奈に、何したのよ！」

唾の飛沫を飛ばし絶叫した。
「お、落ち付けって」
「有希奈話してくれないし！　お兄ちゃんと話したいって、それしか言わないし！　こんな事になったのお兄ちゃんが関係してんでしょ！」
逆上に任せ、立て掛けてあったパイプ椅子を掴むサクラが振りあげる。
「お、おい⁉」
「お兄ちゃんが有希奈をこんな目に合わせたくせに！」

そのまま勢いづけて落とされる。
その一瞬を――
「――お止めくださいサクラ様！」

咄嗟に絹がその腕を掴んだ。
恨みの形相が、間に立ち塞がった絹を睨みあげる。
だが、それに真っ向から絹が向かい合った。
「あんた誰！」
「お噂はかねがね。そしてお初にお目に掛かりますサクラ様。私（わたくし）、名は絹と申します。シュラ様の――よ、つ、つ、使える者です！」
「使えるって……なに、あんた。何言ってんの？」
見開く瞳を揺らし、震えて下がるサクラに、絹がその椅子を掠め取る。
「やはり朴念仁の妹か。興奮してないで話くらいさせてやれ」
さらにシュラの後ろから奈奈が眇める双眼で侮蔑するようサクラを見る。

そんな突然の美よう●ょの存在に、肩の上から見つめると言うありえない仕草に、サクラは面貌を蒼白にさせていく。

「あ、あんたたち、何、なんなのよ!?」

「名は奈奈。こいつの師匠だ。てか、お前さっきからうっさい黙ってろ」

物怖じしない奈奈の発言に、ギリ、っと奥歯を鳴らすサクラだが、シュラは蒼褪めた顔のまま室内に入っていく。

そんなシュラにサクラは複雑な顔つきで、本心を知りたくて語り掛けた。

「ほ、本当に……生きてたの？」

「禄武シュラ十六歳。流派は禄武流居合剣柔術。テストは中学からすべてオールレッド。付いた仇名が比類なき王、レッドキング。保体のみオール百点。マハラシュトラ行き前に、お前達のキスシーンを見せつけられて逃げ出した憐れな男。これ以上、俺の人生を簡潔に語れる奴はいないだろ？」

そこまで告げると、歩みを寄せるシュラを茫然と見留め、サクラは怒りとも、泣き笑いにもつかない面貌を浮かべていくのだが。

シュラにしてはサクラとの再会を語り合う暇はなかった。

目の前で上半身を起こして横たわる少女。

二人のやり取りは他人事のように見つめるベットの上の有希奈は何かおかしい。

そしてシュラも、電話で父に告げられていた事だけが思い出されて仕方がない。ならば否が応にも包帯と固定具の巻かれた無残な左腕に惹きつけられる。

「有希奈……話、出来るよな」

父からの電話の話では、医師たちはシュラの父が告げた、奈奈とシュラの施した錬気の事など受け入れられず。再度病院で切開が行われ、あえて確認するという事態が起ったと言う。

あの錬気の治療ですら跡の残った巨大な接合部の傷痕に、さらに現代医療での縫合の跡が継げられたのだ。

一体それを、年頃の少女はどう捉えているのか。

それがシュラを朝から悩ませ続けていた。
しかも……

「シュラ……本当に、生きてたんだ……」

天稟美声の彼女の声は、掠れる様な蚊の鳴く音に変わっていた。
腫れた瞼。赤い瞳。そして、胸元と袖に深く刻み込まれてしまった皺が、彼女が今の今までどうしていたかを物語っている。

「ああ、久しぶりだな有希奈」

「久しぶり……か」

「有希奈？」

「あのね。あの時の男、あれが……シュラだって、オジサマに聞いたよ」

「あの時？」

「私が、化け物になった時……皆を襲う時。校舎を壊して、子供を襲おうとしてた時」

「有希奈……？」

そう恋人に声を掛けたのはサクラだ。

「無数の弾丸を浴びてる時に、私達の前に立ち塞がった男がいた」

「……」

「時代錯誤な服を着て、乱れた髪で面貌を血で染めた恐ろしい……鬼」

「……」

「私、みてたから」

夕暮れの、黒煙と銃撃の舞い上がった小学校。
四体の飛来した化け物の蛮行。
そして、斬り伏せた存在。
その出来事はシュラの脳裏に嫌でも過っていく。
なのに、彼女へいち早く告げたい言葉は、素早く有希奈によってすり替えられた。

「……なんで、殺してくれなかったの……」

その言葉は、あまりに予想外だった。

有希奈は、まるで懐に抱いた赤子でもみるように、その胸にぶら下がるように結わえられた包帯だらけで膨らんだ自分の腕を微笑すら浮かべてみつめていく。

「殺せるわけ……ないだろ」

シュラは、上擦り、掠れてしまった。と、知りながらも声を放つ。

そして本当は言いたかった言葉――

『子供のころから好きだったんだから……』

それは口には出せないが。

そして彼女は優しい声で、やはり他人事のように、詰問する。

「なんで、あんな風に、生殺しにしたの」

「生殺しにした訳じゃない!? あれで引いて貰いたかったんだ！ そして、出来ればあの状態で会話ができるなら――」

「……なんで、止めてくれなかったの」

シュラの言葉の中で続けた有希奈。

最初から言葉なんて聞いていない。

それがはっきり解った。

彼女の口角は小さくあがり、失笑の鼻息が漏らされる。

それにサクラが支えるように彼女の元へ身を寄せ、有希奈は右手でサクラの手を握った。

「なんで、私は生きてるの……」

「有希奈……?」

「……私は、人を、食べ……に――」

有希奈が自らの言葉に、嘔吐を催し、慌ててサクラが備え付けの洗顔桶を引き寄せ、そこへ有希奈は幾度も嗚咽と共に吐瀉をばらまいていく。
幾度も、幾度も、ばらまいて。

「……この腕、もう動かない！」

ゲホ、っと咽ながら、彼女はシュラへ残酷な言葉を突き突け、冷たい輝きを宿す双眼で睥睨してきた。

「……え？」

言葉の重みに、ただ一瞬、ビク、っとシュラの指先が震えた。
それに、それ以上の返せる言葉などありはしない。

空間に、静かに、重い静寂が広がっていく。
シュラも絹も、奈奈も何も語る事が出来ず。

「みてよ、ほら、ねぇ……ぶらさがってるよ。付いてるのにぶらさがってる」
起きだす有希奈が乾いた笑いを上げていく。

力の入らない足で立ちあがり、サクラに支えられてシュラへと歩み寄る。
ぱらりと外れた手を添えていた固定具が外れ。巻かれた腕は振り子のように揺れていく。

それにシュラはくちびるを。
そして眼を震わせていく。
それどころか四肢は震え、勝手に体が下がっていく。

倒れ込む様に有希奈は迫ると、シュラの左腕を力強くつかんだ。

いや、それは力強く等ではなく、まさに怨念に縋りつく女の力で。有希奈から、確かに黒い靄が見れる。靄どころか眼窩に闇の色が染まっていく。
それは、奥に色を灯す闇。

紅眼の……眼差し……

反射的にシュラも奈奈も体へ錬気の膜を張り。
「絹、下がれ!?」

その存在の意味する事に、ありえない存在に悲鳴にも似た声で下がるが。
それは室内をどす黒く染め上げ。
色に気づいた絹も悲鳴をあげて室内を出る。

「あんたは、お前は――死んだくせに！　殺されたくせに！」

有希奈が叫ぶ。
その声は既に絶叫で。

「シュラ、あんたが、」
「有希奈、お前……」

「あんたが、私の左腕を――斬り落としたんだ！」

一際高い絶叫に、言葉を聞き、聞いてしまい、シュラの錬気は、まるではじける様に霧散した。

奈奈が目を剥き、それにシュラは頭を振って、迫る有希奈の鉤爪状に尖らされた爪にすら気づかない。

――その頬に突き立てられる。

その刹那、そのギリギリを抑えたのは奈奈だった。
有希奈の腕を掴み、捻り。顎門から牙のように犬歯を露わにする有希奈など知らぬとばかりに。奈奈が掴んだまま飛び上る。
有希奈を飛び越え、そして捻ったまま吹き飛ばす。

――――――――!!

憤怒に絶叫を上げる有希奈。

そして悲鳴をあげたサクラ。

怯えた――怯えてしまったシュラは何もできず、ただ、初恋の相手の変貌した姿に涙を流して相貌を戦慄かせるのだった。

錬気消失

投げ飛ばされた有希奈が受け身を取る。それはまるで獣が着地したように思わせ、再度シュラへ掴みかかってくる。

我を取り戻したシュラは絶叫した。

「サクラ逃げろ！」

声を荒げたシュラへ有希奈が飛び掛かった。しかもその威力は尋常ではない、シュラに掴みかかると扉を突き破り、廊下へ吹っ飛んだ。

ガタイが頑強になってきているシュラすら横転させる。

対してシュラは瞳に浮かんでしまった物をかみ殺すように馬乗りになる少女へ怜悧に眼光を眇めて睥睨する。

網膜に映る複雑な表情の有希奈。

しかし幾ら憤怒と喜悦を混ぜたような面貌になろうとも、相手は幼馴染にして初恋の有希奈だ。

そんな彼女の形相を突きつけられては、シュラから瞬く間に力を奪いさるには十分で。

「――きゃあああああ!?」

突然だった。

巡回の看護師だろう女の絶叫が廊下中に鳴り響く。しかもそれは周囲に波紋のように注視をむけさせ、皆が皆、廊下に現れ、通路で行われている蛮行に好奇を寄せてしまう。

抑え込まれているのは来客のシュラであり、襲っているのは重症患者扱いにされて包帯を幾重にも腕へ巻く個室患者の衣服を纏う有希奈だ。

瞬く間に階層は騒然となり、それへ奈奈が沈静の為にナタの刃を取り出そうと抜刀するものだから、シュラは気づいて絶叫した。

「――待って、待ってくれ、有希奈を殺すな!?」

「だが、こいつは不知モノだぞ」

冷静な声音で奈奈が問いかえす。

「でも幼馴染なんだ！　傷さえつけられなければ問題ないから！」

左手は動いていない。

鉤爪を作る右手と、剥き出しの鉤歯を並べる顎の開閉。

錬気を放出、足に力を回して床を蹴りあげる力で体勢を入れ替える。

それだけで十分。

なんとかなる――はずだったのに……

なのに……でない。

「な……に!?」

錬気が、作動しない。

シュラは驚愕して、慌てて必死に氣を練り上げる。

けど、一切でない。

仮面もつけていないのに。

背中の籠から雑多な私物がこぼれ出し、白布に捲かれた太刀まで廊下に音を立てて跳ね落ちる。

それを一瞥したシュラは脳裏に飛来した――抜刀――の文字を認識するが、何を馬鹿な相手は有希奈だぞ――そう言い聞かせて、ただ彼女の喰らいつきにだけ精神を集中させていく。

なのに、そんな中で有希奈の力がさらに強まってしまう。

「ち――」

「シュラ様!?」

咄嗟に絹が白布の太刀を拾ってシュラを見るが、シュラは止めろと目配せで拒絶。意味を汲み取り絹が唇を噛みしめた。
そんな乱闘騒ぎに部屋から怯えた眼差しのサクラが現れ、
「ゆ、有希奈、ちょと落ちついて、やめよ、ね！」
「駄目だ、寄るなサクラ！」
有希奈の足が放たれ、近づいたサクラの腹部を殴打、彼女を強く吹き飛ばしてしまう。
壁に激突するところを奈奈が間に入り、咄嗟に庇うも噎せ返るサクラがくの時に身体を折って沈み込んだ。
「げほ、げほ、な、なんで――」
「妹、後で話してやるから離れてろ。下手に怪我すると兄みたいに一生もんの怪我を負うぞ」
「……え？」
言葉の意味が解らずサクラは奈奈に振り返る。
「――卯月さん、なにしてるの⁉　誰か鎮静剤を！　早く！」
叫ぶ女性の医師らしき声が響いてサクラは視線を戻される。
奥から現れる男の看護師達が、暴れる彼女の手足を取り押さえて、
「ぎゃあああああああ⁉」
その一人が腕を肉ごと噛まれて、大量の血が噴き出した。
その中でも女医師は冷静に鎮静剤らしき物を有希奈へ投与。
しかし一切関係なしとばかりに有希奈は暴れまわる。
「もっと、もってきて！」
更に薬が撃たれ、遂には顎に猿ぐつわまでされていく。ようやくシュラから有希奈が引き離されると、そのまま手足を縛られベッドへ拘束される。その中でサクラは蒼褪め、絹はシュラの身体を支えて抱き起した。

「シュラ様、お怪我は!?」
「大丈夫、ないよ」

そんな二人の会話に女医が険相をかえる。
「貴方達、彼女に何をしたの!?」
「なにもしてない。こいつが暴れただけ」
医師に応えたのは奈奈だ。

「それより、お前が銅羅の知り合いだな」
「え……?」
「お前から微量だが銅羅の臭いがする」

それに女はみるみる面貌を染め、慌てて室内で拘束された有希奈へ視線をむける。そこで暴れる有希奈は少しずつ大人しくなるが、それが鎮静剤のせいかは分からない。何故なら闇の眼窩は消えていた。薬でシラヌモノを抑えるとは到底おもえないのだ。
それでも険悪な眼差しは相変わらずで――

「シュラ様、もうあの方をみないで」

絹すら避ける瞳の曲面には、歪な煌めきを宿してシュラを睥睨していた。

そしてシュラは、彼女の恨みの声が、いつまでも頭から離れず、その場に立ち尽くすしか方法がなかったのだった。

シュラたちは、一応の事情を伺いたいと、一応任意で女医の事務室らしき場所に通されていた。

少しモダンな作りのその部屋は、濃褐色の板内壁に覆われた八畳ほどの広さで、周囲には小洒落た調度品の数々と、異国の薔薇園をイメージした一際大きな絵画が掲げられている。奥の窓辺には執務机と黒皮の椅子。その正面には肌色の対面ソファーと真ん中にアンティークな木造テーブルが置かれていた。

そしてシュラと絹、シュラの肩に乗る奈奈、対面のソファーに妹のサクラが座り、隣の女医が紅茶を注ぎながら、はにかみながらシュラ達に向き直った。

「初めまして、禄武シュラ君とサクラちゃん。そして……」

「あ、絹と申します」

「奈奈だ」

紅茶を興味深げに眺めていた二人が挨拶する。

それに女医は先までの険しい表情を一変させて穏やかに微笑んだ。

「絹ちゃんと奈奈ちゃんね、こんにちは」

白衣を脱いだその女性はブラウンの髪にカールを掛け、化粧らしいものを見せない年の頃は二十代中ごろの女性。茶の大きな下ぶち眼鏡、その奥では明眸も艶やかに大きく、すらりとした鼻梁や膨らむ唇は大人の女性を強調するように美しい。

ただ、サイズが合っていないのか、すぐにずり落ちる眼鏡を必死に直す姿は幼さを感じさせ、語る声は鼻に掛かるような甘声だ。

幼いながらも綺麗な女性、初見の者が第一に持つ印象だと思われた。

そしてチラ、チラ、とシュラをみつめて指をこねる仕草に。絹の眉根が、じり、じり、っと寄っていく。

「シュラ君、あの、あのね！　貴方のお父様、銅羅さん、あ、禄武銅羅さんとは……その、私は、あの、良い……ご関係を築かさせて頂いています、です、はい」

その台詞の後半は、ごにょごにょと、小さく萎んで。

さらに女医の面貌を朱に染めさせる。

――。

シュラは何も返せない。

ただ、絹は破顔した。

ついでに小さくガッツポーズまでつくった。

「コホン」

体裁取り繕いの咳払いが響く。

項垂れたままのシュラの表情から何か読み取ったのか勘違いか。面貌を朱に染めてその女医は小さく咳払いを連射する。

むろん、強制的に注意を向けさせるためにだ。

「あ、あの、私はこの病院で整形を担当する戌亥友梨佳（いぬいゆりか）と言います。サクラちゃんには会った事があります。でもシュラ君には、一度お会いしたかったのに……なかなか銅羅さんが会わせてくれなくて。そしたら死んだなんて聞かされて……」

上目づかいでシュラの様子をみる。

もちろんそこまでの発言から彼の喜怒哀楽を見透かす為だろう。

――けど、シュラは、彼女と父親の関係になど気にしてる余裕すらない。

有希奈が変貌を遂げた。

その意味が解らない。

ただ、確かに有希奈は太刀をもっていた。どうやって入手したのか不明だが、それは間違いなく真実だ。そして化け物のように膨れ上がる筋肉に身を包み、有希奈の言が正しいなら、既に彼女は人を殺（あや）めている。

でも――不知モノではない――はず。

この世に、魍魎――不知モノがいる訳がない。

なのに彼女の眼光は、部屋に漂う気配は。いや、もしかしたらこの施設全てを覆う物は、必然的に有希奈が元凶の可能性へと帰結する。しないまでも何かしらの一端は担っている。そう考えるのが自然だろう。

外界では未だに銃声が鳴っている。駅前でバリケードを構築してた隊員を見る限り、日本が誇る防衛の要は成す術もなく追い込まれていた。

なら、この背後に一体なにがいるのか。
誰が、これを仕組んだのか。
森で会った牙影か？
しかしただ怪しいと考えるだけで即直結に至るのは余りに乱暴だ。
それらを考えればシュラが項垂れたくなるのも仕方がないのかもしれないが。

「――ラ君？　シュ――、おーい？」
「……え？」

「え、じゃないです!?　あ、あの……私の事、嫌いですかぁ……」
泣き顔で女医が何故かシュラの面貌直前まで迫っていた。

「ちょ、近すぎです！」
そしてそれを無理やり絹が引っぺがす。

ただ、何故絹が怒っているのか、女医が泣くのか、奈奈が呆れているのかがシュラには解らない。

「あ、え、いえ!?　あれ、俺、なんでここに、てかここどこ!?」
「――聴いてないし!?」
女医が絶叫した。

「おま、しっかりしろ」
肩の奈奈が頬をぐりぐりと弄って来る。

「奈奈？　そうだ、有希奈が……」
「ああ、不知モノと化していた。だからお前が呆けた、それだけだ」

「不知（シラヌ）モノ？」
シュラと奈奈の会話に女医が首を傾げた。

その仕草はとても二十代の女性には見えない程に幼いが。伝えるべき内容とは思えず口を閉ざすと、女医は眉をぽよぽよと寄せて向き直る。豊満な二つの膨らみがたゆんと揺れる。それに絹が瞬間だけ奥歯を噛みしめた。

その中で女医が幾度か瞼を瞬かせ。

「あの、もしかして……シュラ君、そしてそちらの小さな奈奈ちゃん？　が、卯月さんに、手を施した――なんて、ありえないよね!?」

疑問に彩られた眼差しをシュラと肩に乗る奈奈に寄せた。もちろん愛想笑いの笑みをすぐに展開してだが。

「奈奈が、あの女の腕をくっつけた」

それを、奈奈はバサリと一刀両断した。

「奈奈が、あの女の腕をくっつけた」

目の前にいる子供の言葉に、整形外科医の戌亥友梨佳は驚きの声をあげた。

「ど、どうやって!?　銅羅さんから話は聞いたの。でも、彼女の傷はあっても、告げられた症状は観れなかったのよ。ただ、肩の傷はまだ生渇きのように接合していて、これは何かあると私達は一度彼女を切開しました。けど、なにもなくて。そしたら動き始めていた指先が……」

「動かなくなったんだろ？　馬鹿だなお前ら、治癒用に体内に残した錬気を放っちまったんだ。……余計な事するから」

奈奈が微塵も情け容赦なく言い放つ。

「……」

「奈奈は、お前達の世界の技術に期待してたんだが……。むしろ医術関係は任せない方が良いかもしれないな」

「え？」

なんでもない、と奈奈は言い捨て。女医に一瞥する事無くシュラへと向き直る。

「アホシュラ、お前、こいつらにも徹底して、斬九郎の名を呼ぶようにさせたほうがいいぞ。どっから漏れるか判らん」

「う、ん？」

突然の奈奈の提示に意味が解らず、シュラは力のない声で返事をした。

奈奈はシュラの横顔を覗き込み、小さく息を吐き捨てる。と、そのままヒラリと飛び上り、

テーブルの上に着地。そのままもう一度シュラへふり仰いだ。
けど、そこに奈奈が期待してるような覇気に満ちた男の姿は一片も無く、もう一度大袈裟に溜息をつく。

そしてシュラにしても、ぼーっとはしていたが。
テーブルに置かれた五つのカップ。なみなみと注がれた紅茶の水面に、そのどれ一つとっても奈奈の着地の振動に波紋すら立たなかった動きから、さすがだな、と、奈奈の所作の全てに感心はしていたのだ。

そんな見つめ合う二人に。
特に奈奈に対して、女医もサクラも興味深げな眼差しをむけていく。

「事情の全てを語る前に、友梨佳(ゆりか)、そしてサクラ。お前達はこれからシュラを呼ぶときは斬九郎と呼んでくれ」

見た目の四歳児らしからぬ気配と声の張り、最初は何が始まるかと好機の眼差しを向けていた二人だが。その凛とした気配に押されて同時に喉を鳴らす。

「ど、どういう事？」
怖々とサクラが問う。

「事情があって、シュラはこっちの世界では死人。そしてとある連中から追われている」
「追われてる？」

「ああ、名を変えて、今は斬九郎と呼んでいる。そこは徹底してほしい」
「構わないけど、でもなんでそんな時代錯誤な名前にしたの？」
「そんな事はどうでもいい。知られたら、こっちの絹ねぇと共に確実に殺される。それだけだ」
サクラの疑問など露にもかけず。奈奈は突然シュラの服の襟を落とし、胸元から覗く無残な傷痕を二人に見せつけた。

「ちょ、奈奈!?」
「良いから見せてやれ」
そして二人が険相を変えた。

「な、なにそれ!?」
シュラの胸に刻まれた巨大な傷痕にサクラは怯え、女医も面貌を険しくさせる。
「刀傷……ね」
整形と言えど外科の医師だけあって一目でその傷痕から見抜いてきた。

「そうだ。腹から顎にまで伸びている。有希奈と同じ、不知モノから受けた傷だ」
「シラヌモノ？」
「魍魎に食われたか、魂を捉われた魍魎の事だ」
サクラの問いにシュラが応えた。
ありえない言葉にサクラは半信半疑の色を濃くするが、それに構わず奈奈は続けた。

「この傷は、傷つけた不知モノを殺さなければ生涯残る。さっきの噛まれた男。あいつも有希奈が死なない限り永遠に歯の跡は残る」
「そんな、ありえないわ……」
常識からの見地で否定する友梨佳、それに奈奈は真顔で頭を振った。
ただ、それにサクラが叫びを返した。

「ちょっとまって、それって遠まわしに有希奈が、その魍魎だって言いたいの!?」
「そうだ」
「ありえない、何で有希奈が!?」
「お前を満たせる答えを奈奈はもっていない。ああなった原因が分からないからだ」

その不躾ながらもはっきりした物言いにサクラは呆れ、ただ唇を開閉させていく。でも、所詮は子供のいう事だと、小さく鼻を鳴らしてそっぽを向いた。
そんな様相には構わず奈奈は女医へ向き直る。

「話を戻す。あの時は瀕死のアホシュラを助けたが、今度も上手くいくとは思えない。それだけ奈奈たちは周囲を警戒している。警戒の理由は、……この現状だ」

窓の外。黒煙が幾筋も浮かぶありえない景観が広がっている。
「シュラ君が、あのクラウドαと何かあ――っ!?」
そこで、女医は唇を掌で覆った。

「クラウドあるふぁ？」
奈奈が聞き逃さない。
しかも半眼の眼差しを咎めるように眇めた。
「えっと、部外秘の書類に載ってる……特記事項なんだけど……」
てへ、っと。訊かないでと微笑むが。
「一応話せ」
簡潔に奈奈が言いはなつ。
さすがにここまでずばずばとした物言いは、本来ならだれでもカチンとくるものだ。けど、それすら吹き飛ばす程の物が、対峙する美よう●ょには確かにある。それはのほほんとした女医にも明確に伝わり、気配からして、そこらの四歳児とは訳が違う。
そうはっきり気づいてしまう。
そして友梨佳は、未知への探求か、それとも純粋に奈奈へ興味が沸いたのか。
「ま、いいかな。別に国から制約される筋合いもないし」
他に誰もいない部屋だと言うのに口元へ手を当て囁きをはじめていた。
「えっとね、一応、これって国の命令で開示の拒否を受けてるのよ。で、回ってきた書類には、便宜上つけられた名前があって、叫びをあげて踊るように跳ねる彼らに、それぞれ名が付けられたの」
「それぞれ？」
鬼だけだろ、と続く言葉を奈奈は飲み込んだ。
「影を漏らす子供の一派をクラウドα。でも、最初に捕まえた暴れてた被検体は女性だったらしいんだけど。時代錯誤な服装でね。何て言うんだろ……小袖？　しかもシャラシャラいう棒もってて……あれ、名前忘れちゃった」
「錫杖か？」
「あ、それそれ」
奈奈の顔が強張った。
しかし、眇めた眼差しのまま女医に問う。
「その女？　捕まえたのか!?」

呻く奈奈に友梨佳は小さく頷く。
それにさらに奈奈の顔がこわばった。
ただ、それをどう捉えたのか、慌てて手をパタパタと跳ねさせ友梨佳は続ける。
「わ、私は関わってないからよく知らないのよ。ただ、教授がそう話してて。でも、捕縛してた施設が何故か破棄されて。で、街に増え始めたのが最近なの。しかも増えた暴れる子供が……もう余りに残忍で、力も強くて、運び込まれてくる自衛官さんたちも、損傷がひどいほどで――」
奈奈は、後半の言葉を聞いていない。
ただ意見を求める様にシュラを見上げるが、シュラは心あらずで外を眺めていた。
「――で、千葉県の、シュラくんのいる街で見つかった闇の巨大鬼？　それがクラウドβ。これは見た事ないわ。なんか物凄い強いらしくて、αと同様に鉄砲も効かないとかは聞いたけど」
ようやく向き直る奈奈は、そこで思案。
ふと思い立ち、
「もしかして、とうきょうと、千葉県以外にも、他にもいるのか？」
少し話の論点からずれた質問を投げかけた。
「え、いえ。報告されてるのは千葉県と日本の首都中枢があるここら辺だけよ。あ、こっちが知ってるのはこれで全部！　今度は奈奈ちゃんが知ってる事を教えてよ！」
ぷぅ、っと片頬を膨らませる二十代中盤女。
だが、そんなものを可愛いとか思う思考は奈奈にない。
「奈奈たちの知ってるかもしれない輩が背後で暗躍している。そしてこの世界の兵器とやらではあの連中は殺せない。歯向かえば被害が増えて、たぶんやられた連中の中には、お前達の言うあるふぁ？　みたいに、連中に組みする者が現れる。闇の霧を漂わす死なない輩。攻撃すれば喜悦に喜んで向かってくる輩だ。そしてたぶん鬼の方、刀をもってるだろう鬼も少しずつ増えていくはずだ」
小さな美よう●ょの放つ言葉。
それに笑みを浮かべて聞く女医と、呆気にとられて聞くサクラ。

だが、裏事情をある程度は知る女医に、そして子供の発言と話半分聞いていたサクラも、その的確な発言と、力強い言葉の威力に顔色を失っていく。
冗談で美よう●ょが適当をいってるのではない。それが分かる。
その気配を示す事で、聞く者を納得させるのは十分すぎた。

「貴女……一体何者？」

ここまで来たら、友梨佳も聞かずにはいられなかった。
冷めたティーカップを見つていた奈奈は、その眇める眼差しを女医に向けていく。

「名は奈奈。日本ではなく別の世界からやってきた。そして、あの女、シュラの――」
一度、絹を見て。
「――昔惚れてた有希奈とかいう女。あれは、奈奈の力で体の再生力を高めて治した。それをお前らが崩した。それだけだ」

――いきなり予備知識なしに奈奈が語る。
その言葉に女医は喉を鳴らし、サクラはシュラを見るが。シュラは何も言わずに外の展開されている黒煙へ、力無い眼差しを流していた。
「指をだしみろ」
奈奈が冷たい声で二人に言い放つ。
奈奈が腰のナタから布を弾いて、それに女医は意味を察したのか、迷いなく指を奈奈に向け。

――一閃――

指に一筋の傷をつける。
ただ、その衝撃に痛みがなく、女医はそれを不思議そうに見つめた。
その指へ小さな掌をかざす奈奈。
女医の前で傷が瞬く間に治っていくのだ。これでは女医の瞳も見開かれる。

「な、なにこれ……」
「お前達の知る事のない、知ったところで使えない――技だ」
一瞬、迷いを籠めた。
そして、奈奈はシュラを見る。

「アホシュラ、次はお前だ、錬気刀をだせ」
突然話を振られて双眸をゆっくり戻すが、その表情へ奈奈が旋毛を曲げたように唇をへし曲げ。
「あ、わ、わかったよ」
慌てて錬気を手刀に放ち、力を蓄える様に寄せていく。
それに奈奈はティーカップを差し出した。
「おとしてみろ」
言われたまま。
――ストン――
手刀をティーカップに落す。が、カップの中身に波紋を波打たせるだけが精一杯。その展開された事柄にサクラと友梨佳は訳が分からず見つめ続け、シュラと絹がポカンと口を半開きに言葉を失った。
ティーカップが、割れていないのだ。
「アホシュラ……お前は、氣が練れなくなった。今日から、錬気の事は奈奈が良いと言うまでわすれろ」
呆けた二人へ、奈奈は冷たく、そう言い捨てたのだった。
最初に捉えられた小袖の女。
その女の行方の消失と、今、戒厳令まで敷いて報道機関にひた隠しにする、猛威を奮って侵攻する子供の化け物。
そして千葉にのみ現れたとされる巨大な鬼。
極めつけが……シュラの錬気の消失。
状況最悪の中で、奈奈に錬気封印を言い渡され茫然とするシュラだったが。
突然告げられた奈奈の言葉に納得がいかず。さりとて奈奈は一歩も譲らず、シュラは茫然と、ただ無為に時を過ごして窓辺で立ち尽くしていた。
そしてぴしゃりと言い放った奈奈は、天和の頃からこの世界で確認したかった事柄へと女医

に話を突きつけさせてしまう。
つまり、大切な姉、稍の存在だ。
しかし、その説明は、整形外科医の友梨佳を困惑させていた。
「酷い病で苦しんでいる。今はある術でこいつとねぇねぇを連結しているんだ」
「……」
「日光の下に余りでられない。長く立ってられない。空気は綺麗なところでなければ発熱する」
窓辺で茫然とするシュラを放って、奈奈は真剣に、そして執拗に姉である稍の症状を、懇切丁寧に説明していた――のだが。
「ご、ごめんなさい。それだけの症状だと、ちょっと判らないわ。特に連結して、助かるとか……そこらの兼ね合いが」
兎に角本人を見てみない事には、の一点張りに、ぷぅ、っと奈奈の頬が膨らんでいく。
そんな折りだった。
静かに奈奈の話を訊いていた絹がシュラに告げる。
「あの、砲撃でしょうか、音が近づいていませんか？」
呆けてたシュラが、絹の言葉に我を戻し、窓辺から外を見れば階下でちらほらと自衛官や戦車が、後退をしながら玄関先周辺に集まっていくのが見て取れた。
「どうやら、連中はここに攻め込もうとしてるみたいだな」
告げた言葉に、女医が奈奈との話を打ち切って慌てて窓辺によってきた。
と、同時に。
『――緊急放送です。現在病院外で、未確認の生命体に対する発砲が行われています。大変危険ですのでくれぐれも病院外へ出ないで下さい。繰り返します、現在病院外で――』
放送スピーカーから鳴り響く火急を告げる放送内容。

突然の音声放送に、理由が分からず奈奈と絹が同時に顔を強張らせるが。

「……生まれた仲間を、連れ戻しに来たな」

奈奈の言葉にサクラが反応する。

「――仲間って、まさか有希奈の事をいってるの!?」

「他に誰がいる。今までここは襲われなかったのに、この状況でいきなりだ。そう考えた方が自然だろ？」

奈奈は腰から二本のナタを引き抜き、その白い布を解いていく。

そして一瞥する事無く。

「友梨佳、この世界を、元の平和へ取り戻したいか？」

ぽそ、っと奈奈が話が一方通行だった女医へ呟く。

「と、突然なに？」

「答えろ。大切な事だ。もしもこの世界が救われたなら、やっぱり嬉しいか？」

「それは、もちろんそうだよ！　誰もこんな状況望んでいない」

「なら、奈奈たちに協力しろ」

「協力って、そりゃ、解決するならするけど……というか、奈奈ちゃん、君ね。もう少し目上の人に対して敬語とか――」

「――戦いの場で、目上だろうと使えない奴なら、そんな物は一切意味を無さない」

「――っ!?」

女医の肩が竦み、そして喉を小さく鳴らさせる。

さらに奈奈から、つ、っと一瞥され、友梨佳は確かに体を奮わせた。

「だ、だって……でも――」

「今、大切なのは、まずこの元凶をはっきりさせる事だろ！」

小さな奈奈が部屋の大気を両断するように鋭くも大きな声を言い放った。

それに場にいる全ての者が肩を震わせる。

奈奈が無遠慮極まりなく発言し、それに大の大人が真剣に耳を傾けるのは、ここらの何者にも逆らわせない覇気のような声音によるところが大きいとシュラは気づいている。それはシュラが幾度も彼女に覇王のような風格を感じた事からもはっきりさせられた事なのだが。
それが今、最大限に放たれ場を制していくのを感じていた。

「げ、元凶、この騒ぎの？」
その凛とした言葉に気圧され、女医の声が隠す事も出来ずに震えを混ぜていく。

「そうだ。その捕縛された小袖の女。そいつがこの騒ぎに何か発端を担ったと考えた方が自然だ。そしてそうなれば奈奈たちが動きやすい。お前、出来る限り、今そいつがどうなってるかを調べてくれないか。できれば所在を」

「し、調べるっていっても……ここ病院だし。私、病院からでられないよ？」

「ここが都の中枢に近い病院なら、そして一番被害がでかいこの地区の、補給の要所になっているのなら。それ相応の国の重鎮か、それに準じた何者かが来てるか、もしくは運び込まれて手当を受けてるはずだ。もっとも、民を見捨てて保身に我先と……尻(けつ)を捲って逃げてなければの話だがな」

「……」
奈奈の言葉に、友梨佳は言葉を返さない。
それどころか、ほわほわとした印象を払拭して。

「……なにか、方法があるの？」
声を潜めて聞いてきた。

「原因さえ分かれば、方法なら……ある」

「――――」
その言葉は友梨佳どころか絹やサクラ、そしてシュラまで巻き込み驚きを上げさせる。

「方法、それ、一体、どうやって」
友梨佳が縋るように訊いてくるが。

「この日本で、いや日本を取り巻くこの世界で、最高峰の医療術が集約してるここで勤務するお前に、約束してもらいたい」
言葉をはぐらかすような奈奈。
「な、なにを」
それに友梨佳は、美よう●ょに放つような声ではなく、語尾に強さを含ませる真剣な声で返した。

「奈奈の、奈奈のねぇねぇを、救ってほしい」
「そりゃ、来てくれたら内科でも信頼できる人がいるから、一緒に見るけど……」
「無償で、みてくれるか。世界を救った代償に」

奈奈が、白の布巻をバラリと破ってナタを抜刀する。
「――ひっ!?」
突然の凶器にサクラが悲鳴をあげる。

絹は何も言わず、ただ籠から同じ布巻の太刀を解いてシュラに柄を向ける。
その行為に、そして籠から現れた凶器にサクラも友梨佳も唖然とするが。それを無視してシュラは太刀を受け取ろうとした。

「……」
……一瞬、困惑の色を浮かべたのを奈奈は確かに見受けていた。
そしてただならない二人に何かを感じたのか。

「……わ、わかった。そうね、別の世界の人なら、保健とかないもんね。いいわ、私が全面的に面倒を見る」
「約束だ」

奈奈はシュラへ眼差しを向け。そしてシュラはようやく向けられた奈奈の笑顔に頷くと、差し出された太刀をしっかりと受け取り左腰に回した。

「いいのか、右に携えなくて」
奈奈の問いに、シュラはコクと小さく頷く。

ただ、そこで友梨佳も我を戻して。
「ま、まって二人とも、ちょっと待って。先に階下の様子を聞いてくるから！　こ、ここにいて。く、くれぐれもここから出ちゃ駄目だよ！」

慌てて友梨佳が扉に向かい、そのまま走って退室する。
と、外部からガチャリと音がした。

「閉じ込めたつもりか？」
奈奈が睥睨するが。
「いや、たぶん、連中が乗り込んできた時を想定して、鍵を掛けてくれたんだろう……守るために」
シュラが応える。

「守れるほど、ここの奴らは強いのか？」
ふぅ、っと奈奈が溜息を衝く。
少し、疲れたのだろうか。
珍しく多弁な彼女にシュラも少し心配になるが。そんな物不要だとばかりに奈奈がきつく双眸を眇めてシュラに答えを催促するように見上げていく。
そんな彼女をシュラは抱き上げた。

「病院施設に戦える武人みたいなのはいないよ。外の警備任せだ」
「あの女は、現状が判らないんだな」
「俺達の実力も知らないし、それに、年月をここで過ごせば過ごすだけ、ここの現実に慣れ過ぎていくから」

それは天和に赴き、シュラが一番、骨身に染みて解った事。

「しょっぱいな、こっちは」
「言うなよ。こんなでも……俺の故郷なんだ」

やがて、シュラ達の耳朶へ無数の銃撃が鳴り響く。音が途切れる前には必ず絶叫が上がり、外の壮絶な光景をまざまざと知らせてくるようだ。

「きゃ!?」
絹の小さな悲鳴。
窓ガラスが砕けるかどうかの瀬戸際の音が、振動と共に大きく響いて地鳴りを招く。それが戦車の砲身が発射される音だとシュラはすぐ気づくが、と、同時にここが公共施設の近くであり、しかも相手が子供なら砲弾に信管が抜かれてるだろう事も連動して想像がついた。

ならば――爆発までは起らない。
そしてそんな物が役に立たないのも予想ができる。

有希奈が示したシラヌモノ――
なら、どこかの部位をふっとばしても、彼らは立ち上がり喜悦に微笑みを向けて迫って来るだろう。

そして階下ではシュラの予想通り、防衛に当たる自衛官らは、その首筋に強靭な歯は突き立てられ断末魔の悲鳴と共に倒れていく。機銃が死に逝く主から解放されて、無秩序に弾丸を弾いて放射される。

――ぱきパキぱき

小気味良い音を出してシュラの眼前の窓ガラスに弾痕を幾つも刻んで天井を射抜く。
そして程なく、銃撃の音は足元から響くようになる。

「来るな……ここに」
「有希奈の部屋の前に行った方が良いな」

扉へ向かう途中で。
「ちょ、お兄ちゃん何言ってんの……さっきから聞いてればどうしちゃったのよ!!」
舌鋒鋭くサクラが叫び、行く手を遮るように立ち塞がる。

「サクラ、そこを通してくれ」
「先に説明して、どういう事……なんで、なんでそんな刀持ち歩いてるの!?」
話の途中から胡乱に聞いてたサクラでは、この現状が今一理解しにくいのだろうが。

いや、もしかしたらあの女医さえ理解出来てないだろう。下手したらシュラたちを奇人とし

て、ここに化け物の到来よりヤバイ奴らがいると、精神神経科の医師が雪崩れ込んできてもおかしくはない。
そこらはシュラにも痛いほど解るのだが。
ただ、いずれにしてもこのままでは有希奈は浚われる。それが明確に分かっている。

「サクラ、時間がない。行かせろ。そしてここから出るなよ。出たら確実に殺されるぞ」
「もしくはあの中に魑魅がいるなら、あの女の仲間にされる……」
奈奈が補足する。

「いずれにしろ、生きられません」
続ける絹の余りに現実離れした言葉に、サクラはただ唖然として訳が分からず後退る。

「狂ってる……みんな、狂ってるよ」
茫然と呟くサクラ。
それにシュラは返さずに、絹へと振り返る。

「絹、サクラを頼む。半狂乱になったら――」
「――気を絶たせます」
やんわりと伝えられる言葉にうなずき、シュラは一度絹を抱きしめた。

「椅子とかでバリケードを作っておいて」
そう告げ、扉のノブを落とした奈奈と共に扉をかい潜り、絶叫の飛び交う院内に飛び出していくのだった。

不浄の踊り手たち

酷い喧騒に包まれていた。
友梨佳の執務室から飛び出したシュラは階段の踊り場まで一足飛び。
そのまま下の階にある有希奈の個室病棟が並ぶ階層へ飛び込んでいく。と、まだそこに騒ぎの元凶たる存在は現れていない事に安堵の息をつく。

「油断するな」
「そうだな……ごめん」

クリーム色の内壁にダークグリーンの廊下は、まるでどこかで火災でもあったような黒靄が広がり、背筋に怖気を招くかのようで気色が悪い。

蝸牛を劈くような銃声と絶叫。

指示を出す怒号に悲鳴が半狂乱に渦巻き、それは階下から地鳴り交じりの音となって響いて来る。シュラは唇を噛みしめていく。

「元凶は、小袖の女だ」

「あ、ああ」

肩の奈奈が心中を慮って優しく声をくれる。

なのに、天和に招いてしまった太刀の存在が否が応にも自らを苛んでいるように感じて仕方が無い。

「くそ……」

そう、小声を出すだけで精一杯だった。

『――一般外来に起こしの患者様は、どこでも構いません室内に退去して下さい。院内ロビーから各廊下に絶対に出ないで下さい。繰り返します一般外来に――』

放送が慌ただしく状況を知らせていく。

恐慌状態になっているのだろう階下の総合ロビーからは無数の悲鳴と振動が延々と響く。

シュラは、既に仮面を身に着けていた。

もう何が現れるか、誰がどこから見てるか分かった物ではないからだ。

警戒する二人の前に、有希奈の部屋扉がようやく見え、そこに友梨佳が手配してくれたのだろう男の看護師が二人、扉の前を守るよう立ち塞がっていた。

「す、すいません、どちら様ですか？」

看護師の一人が、近づいてきた見知らぬ男の姿に怯えるような声をあげる。

しかも見知らぬ男の腰には日本刀の鞘が見えるのだ。その状況に、そう声を掛けるだけで精一杯だったのだろう。

それに安心させるようにシュラは作り笑顔を向ける。

「外からきた連中の狙いはこの部屋だ。入って中からバリケードを作ってた方が良い」
シュラが助言する。

さすがにここがターゲットと言われるとは思わなかったのか、ますます蒼褪め挙措を失う男たち。真剣に二言三言相談を交わし、その一人がナースステーションに走っていく。

「いいのか、中に入ってなくて？　幾ら戌亥さんの指示だからって危なすぎるぞ」
シュラの言葉通り、その一人はその場に残っている。
「今、連絡を取りに行ってますから……」
「そうか」

シュラはとりあえず邪魔にならないように対面の壁に背をつき、階段がある右手の通路の先を警戒する。

音が幾つも響いている。

『――一般外来に起こしの患者様は、どこでも構いません室内に退去して下さい。院内ロビーから各廊下にでないで、室内に――あ、あああああああああッ!?』
放送が、突然絶叫に変わった。
対面の男が眼に分かる程の肩を弾ませた。
激しく争う音が伝わり、やがてガタリと思い何かが倒れる音。
階下や周囲、そして頭上から、怯えた気配が広がっていく。
音が跳ねて、幾度も反響する世界で。

『……フッ……、……フッ……』

「なんだ、なんの音だ……」
看護師が恐怖に耐えられなくなり声を上げる。
響くのは放送スピーカーからの音。
シュラは、その放送からの音だけに意識を集中させる。

『……に……きた……』
誰かが語っている。
それは誰でも解る。

けど、シュラは何故か握る鞘に力を籠めてしまう。

『……迎えに、来た、来た、……迎えに、来た……よ……』

きょろきょろとした、口元に小さな掌を当てて擽ったそうに笑うような少女の声が響く。
それは楽しいおもちゃを見つけて、悪戯をしかけるような声色。

その声に、ざわめきが広がっていく。
連鎖して騒乱の音も響いてくる。

階段から夥しい数の何かが、無数の落石が迫るような、重い響きがやって来る。
乱れながら、そして正確に、ここへとまっしぐらに迫って来る。
廊下のロビーに見た入院患者の姿はもういない。

『……迎えに、迎えに、迎えに来た、卯月……有希奈……卯月、有希奈……』

響く声。
声の色は違うが、その様相は覚えている。
かつて侍所の司役が放ったような、気狂いにも似た歪な反復台詞。それがシュラの身体を、まるでトラウマのように強張らせていく。

「肩の力を抜け……」
唯一、心許せる奈奈の言葉が染み込んで来る。
それが嬉しくて。小さく頷くと、大きく深呼吸。迫る災厄に眼差しを眇めていく。

対面の震える男を加勢するように、ナースステーションから男達と、消火器やパイプ椅子をもって女達が集まって来た。
だが、彼らに一体何ができるのだろう。

『……有希奈、有希奈……迎えに、来た、一緒に、行こう……そして……』

音が響く、響き渡る。
既に階下からの地鳴りは消え、階段からの音が執拗にここまで迫って来る。
雪崩のような音に身を竦ませる看護師たち。全院内に放たれる声は、最後の言葉を笑いなが

ら告げていく。

『……迎えに来たよ……蓬莱の……斬九郎……』

「な――」

シュラの総毛が波打った。

これには奈奈も面貌に険しさを浮かばせる。

そしてまさに同時――気配が明確化した。

それは正面ではない――

「しまっ、背後!?」

「関係者用エレベーターからか!?」

奈奈とシュラの声が鋭く響く。

気配が膨らんだ場所、そこは階段ではなくナースステーションの正面に設置された患者搬送用のエレベーター。

開く音と同時。

――コロ、っと足元で音がした。

皆が見る。

だが、シュラと奈奈だけは原因を見定める。

側面を過(よぎ)った風の主に全神経をとがらせた。

転がった物、それは対面の男の肩から離れた頭部。

ただ瞳だけが痙攣し、やがて口腔から舌をだらりとはみだし。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ」

ナースが一人悲鳴をあげた。

しかも崩れ倒れていく男の残った身体が、ナースの一人に倒れ込み更なる悲鳴を跳ねさせる。
皆が半狂乱になって飛び退き、幾人かは慌てて周囲を探し、そして扉二つ先で異様を見る。

子供がいる。
それは小さな男の子だ。
でも、その子供は壁に足を付けて、真横に立って階段へ顔を向けていた。

重力無視した出で立ちに常識を基盤にする大人達は色を失う。
やがて静かに振り返る男の子は、酷い焼け焦げで、もう……顔がない。

『……ケラ……』
笑う声。

それだけで幾人かは気を失い廊下に倒れる。
やがて子供は身体にべたりと血のりを付けた姿を露わにする。

そして階段から無数に跳ねる不浄の踊り手たちは跳ね飛び、それを背後に背負って子供は楽しそうに一言残す。

『……斬九郎……みーつけた……ケラっ』

屈託な笑みを浮かべて、子供は確かにそう告げたのだ。

アマツマラと

笑う子供が一刀の元に両断された。
口火を切ったのは奈奈。

壁に立っていた子供はゴトリと転がり、怜悧な双眸の奈奈が場所を奪い取るように壁に立つ。
その異様な光景に大人たちは戦慄し、

「傷を受けるな……。この餓鬼共、全部不知モノと思って斬り捨てろ」

奈奈の言葉に迫る子供の波を、まるで幾人にも分裂したような奈奈が、滅多矢鱈に斬り飛ばしていく。
歓喜に絶叫を上げて雪崩れ込む餓鬼の群れ。
その全てへ不遜に鼻を鳴らして奈奈が突っ込む。
そして迫る者全てを肉片に変える。

赤い牡丹の花弁が虚空へ飛び散るように、廊下に闇と赤の華が散っていく。

美しい剣技をみせる奈奈。子供姿でも一切容赦のない彼女をまずいと判断した餓鬼の群れは、享楽よりも使命を優先するのか。遠回りに雪崩れ込み、大人たちの人垣へも侵攻を開始する。

迫る喜悦の子供。
けど、既に瘴気を放って人ではない。

だからこそ、対峙したシュラも黒霧『異』の柄に素早く手を回し、
「――！」

腕を両断されて肉塊に沈む有希奈を見る。

ゾッとする。
腕が震えた。
刀が抜けない。いや――

刀の柄を握った腕が……動かない。

それでも目の前に迫った子供は、歪に曲がる鉄の棒を握っていて――まずい!?――咄嗟に躱すと同時、カウンターの拳で叩きつける。

吹っ飛ぶ小さな身体が壁にぶつかり、間髪容れず蹴り飛ばしてロビーから迫る輩纏めて退ける。が、仲間をふっ飛ばしてもなお身を翻して四つ這いで着地。その顔が歪に拉げて笑みを向ける。だらりと伸びた舌がリノリウムの床を強く叩く。
既に人ではない存在と分かっているのに。

感傷的な思いが飛来する。

見た目はまだ年端も無い子供。
小学校2〜3年くらい。

——しかし、あどけない笑顔でも発狂寸前の狂気の絶叫。
回廊に木霊を残して雪崩れ込むように仲間と迫る。

相対する看護師は瞬く間に飲まれ、噛まれ、毟られ、都度にその肉片を黒靄漂う大気にばら撒いていく。溺れるような絶叫と、悲鳴、号泣の中に響く後悔と怨嗟の渦が周囲に広がっていく。

各室内から聞こえる叫び、ナースステーションからも悲鳴が聞こえる。
そして終わりを知らない雪崩れ込む餓鬼の群れ。

でもシュラは動けない。

壁に背を付いたまま茫然と成り行きを見つめ、ただ、その震える指先の意味が解らず。揺らぐ眼で周囲を見る。
奈奈が無数に切り裂いている。
周囲の看護師たちは噛み砕かれていく。

雪崩れ込む化け物の数は終焉が知れない。
それが展開されている残酷な現状だ。
——なのに、太刀を握る事が出来ない己の心理の意味すら分からず。

目の前に奪い取ったのだろう軍式のナイフを掲げた餓鬼が舞い踊り——シュラを狙う——それをシュラは確かにみる。
迫る凶器の冷たい輝きが天井の明かりを反射させ。

「——斬九郎様！——」

場に響いた甲高い声。
その飛来した出所の意味すら分からず茫然と立ち尽くし。目の前に突然現れ、身を挺して庇ってくれた絹の鮮血が舞い踊ったのだけを網膜に焼きつけてしまう。

「……き――ぬ……？」

理解ができない。
何故ここに彼女がいた？
思考の中でシュラの顔に、血がべちゃりと掛かってシュラの眼差しの先を朱に染める。

「シュラ様……」
か細い声が、倒れ込んで耳元に唇を寄せた絹から告げられる。
ズルリと下がった絹の力無い体に、唇が震え、奥歯が延々と鳴り続け……

「……あ、あ……あ、あああ……」

シュラの呆けた声だけが、そして両の手を染め上げていく絹の血が……

「あぅ……く、ぐ……ああああああああああああああああああああ」

シュラを慟哭に叫びを張り上げさせた。

その様相に、子供の魍魎シラヌモノは喜悦の面貌を一斉にむける。
正しい獲物と見定め、飛び上る。口腔を耳元まで裂けるほど広げる餓鬼の群れが、けたたましく絶叫して一斉に鉤歯をギラつかせる。

「迷うな――抜け！」

奈奈の絶叫に――シュラは絹を強く抱きしめ、背後に隠すと同時に抜刀――一閃――絹を斬った餓鬼の腹を真横一文字に両断した。

「――ああああああああああああああああああああああああ!!!!!!！」
絶叫の喚きで、シュラは手当たり次第に切りつけた。

抜刀、居合、ではなく。ただ両手で柄を握り、手当たり次第に溢れた亡者を斬りつける。
跳ね飛んで襲ってくる無数の餓鬼。
子供の姿をしたシラヌモノ。

それを――斬って、斬って、斬って、斬って、斬って、斬って、斬って、斬りつけた。

亡者は思う。

喜悦に笑い、骸は立ち上がる。

そう思って仲間と共にそれを待つ――なのに、斬られた仲間は誰も立ち上がってこない。

それが残った亡者の動きを止め――

シュラが使う太刀に瞳を凝視する。

――そこを相対した奈奈が存在を刎ねた。

「阿呆が」

弾ける血の塊が壁に跳ね、返り血を浴びてなお終わらないシュラの絶叫が無数の肉片を宙に跳ね上げる。

そこに礼節も、太刀筋、剣の術もなにもありはしない。

シュラが次の獲物を求めて兇刃を奮う。

……ただ……殺す……

無情な血に塗れ、怨嗟に塗れた男が暴れていく。

「お、おに……ちゃん？」

廊下の奥から、階段から怖々降りて来る少女がいる。

場違いに明るいファッション系衣服そのままの艶やかな姿に身を包む少女。

――サクラだ――

しかし見つめる先で、展開された物に血の気を引かせて凝視する。

噛み殺された大人。子供の無数の死体、そんな物が廊下中に散らばっているのだ。ふら付く足が壁に手を付けさせる。

ぬるりとした感触。

自分が触った物を見て、危うく悲鳴を上げそうになる。

壁に飛んできた血の滑り――それが即座に認識されて奥歯を噛みしめさせていく。

鼻孔を衝く鉄臭と、あまりに生々しい腐った脂の臭い。
肌に触れる通風口からの微風が、生温かい風を招いて肌にべたりと纏わりつかせる。無意識に手の甲で頬を拭っても、そこに何かがある訳ではない。ただ、粒子と変わった脂が肌にこびりついているだけ。
既に清潔な消毒液の世界は汚物に塗れて悪臭と化していた。
少女は震える四肢に力を混め、
痙攣する世界を映す眼で、展開された全てを見る。

笑う子供を無情に殺す美よう●ょ。
笑う子供を絶叫あげて切り裂く兄。

「……ちがう、なに、これ、なんで、何でこんな事になってるの、おに、ちゃんじゃない。あれ、だれ……あれ」

支離滅裂に語られた譫言のような言葉の中で。

『……名を変えて、今は斬九郎と呼んでいる……』

兄が、部屋で告げた言葉がよぎる。
「――ざ、斬九郎？」

それはシュラの妹、サクラが漏らした異常な光景で放てた、唯一振り絞った必死な声。
回廊の奥で戦うシュラを見つめて放てた異常な名前。
宛がわれた名を、親から教わった子供のように無心に小さく、桜の花弁の様な唇で告げていく。

そしてシュラは、ただ斬り続けていた。
斬って、斬って、斬り続けて。ようやくひと段落と言うところで、また階下から餓鬼の群れが上がって来るのだ。

シュラは、ただ絹の前で、有希奈ではなく、絹を守って立ち塞がっていた。
有希奈の扉は既に壊され、拘束されたベットの上で以上な眼光と靄を放つ有希奈が見つめている。それでもシュラはただ絹を見ていた。

「……シュラ、錬気の技を放出する……今のお前じゃバラバラになるかもだから、逃げろ」
呼吸もまともにできず茫然とするシュラへ奈奈が言う。

「……絹、助けてくれないか……」
「終わったら必ず治療す――」
迫った亡者を奈奈が振り向きざまに一閃する。

バシャリと敵が両断され、それを茫然としたサクラが踏み潰しながらやってくる。

「き、絹さん……？」

さっきまで元気に動いていた絹が、喘ぎながら、苦悶に眉間へ皺を寄せている。
それがサクラに現実を報せ、戦慄く双眸で絹を抱き起こさせる。
「なんで、来た……サクラ」
血塗れの兄を、サクラが見上げる。

「ざ、斬九郎さん、奈奈ちゃん、これ、これなに……」

質問に返さず、サクラは呻く。

「現実だ」
奈奈が突っぱねる。

「なにが現実よ……こんなの、現実な訳ない」
「そう思うなら有希奈の部屋を見ろ。あそこに何が寝そべってる」
示される有希奈の部屋。

そこに闇の眼窩を広げる魔性の女が横たわっている。
それは口角をへし上げ、見定めたサクラを嘲笑するように見つめている。

同時に――餓鬼が雪崩れ込む。
奈奈が前に立ち構え。

――――――――――――――――!!
大気へ何かを叩きつけたような絶叫が餓鬼共から上げられた。
それは喜悦ではない。
断末魔の叫び。
次いでシュラと奈奈は、確かに面貌を強張らせた。

……シャラン……シャラン……

耳に優しい音が響く。
夥しい亡者の亡骸の上を、編み笠を被った綿服の男がやってくる。

「……馬鹿、な……」

シャラン……シャラン……

シュラの茫然とした呟きに、奈奈は唾を飲み込み構えを取る。

「ようやくみつけました……斬九郎殿」
くぐもった、深く、重い声がする。

シャラン……

音が止まり、最後に呻いた餓鬼の頭部へ錫杖が押し潰す。
その男を、シュラが知らない訳がない。
噂の小袖の女……でもない。

「なんで、……こいつがいる……」
「わ、わからん。けど、斬九郎、構えろ！」
奈奈が火急に叫ぶ。
けど、シュラは構えられない。

目の前に現れた男。
それをみて、シュラは腹の底から煮えくり返る。

その男は、

「ああ……ようやくだ……俺も見つけたぜ」

あの日、虎綱の屋敷で、全ての事を起こした、黒霧を撒く僧。
シュラの切っ先が、男に向けられていく。
その切っ先は、荒ぶる心のように、

「――アマツマラ！」

惨劇の僧、その男に向けられていくのだった。

「――アマツマラ！」

迫りくる亡者の中から周囲を噴き飛ばし現れた存在は、蓬莱を追われる事になった、シュラへ惨劇を宛がった僧、そして闇の太刀を撒いて回る災いの張本人。
怪僧にして鍛冶師の集団。
さらには異様な太刀を造った輩――アマツマラ。

それが突然、この現代に、しかもシュラの前に現れた。

黒霧『斬』の事を思いだし、それだけでも戦慄する。
あまりに尋常ならない事態にシュラは叫び、咄嗟に太刀を構える。
構えるどころか足が勝手に突っ込むところで、その足を奈奈のナタの背で押さえられた。

「落ち付け、本物の僧だったらお前以外は皆殺される」
「――し、しかしっ!?」
「お前もただではすまない。離れてろ、奈奈がやる」

奈奈の判断に歯噛みするシュラ。
けど、骸を踏んで乗り越え対面の男は迫って来る。
逃げる事も出来ず、戦っても勝てない。

そのシュラを守るように間へ立ったのは四歳児。

短気に任せて突っ込みたいが、突っ込んでも確実に返り討ちにされる。そう告げられたようで悔しくて堪らない。
あれだけ戦って修行して、生き長らえてもまだ勝てないのか――それが、腹の奥から言いようの知れない苛立ちと怒りを込み上げさせる。

「――何の用だ、また俺の前に現れやがって！」

血を吐くように叫ぶだけのシュラ。
ただ、

「……はて、初見のはずですが？」

シャラン。
錫杖で傘を上げる男が、小さな頬髯に包まれた面貌を露わに有り得ない事を言い放った。
年の頃は三十後半だろうか。
天和の者の年齢はいまいち分かりづらいが、それがシュラが思った年齢。

そしてさらにシュラも疑問を持つ。
シュラの知ってる僧は、決して顔は見せなかったはず。それがいとも簡単に面貌を曝け出したのだ。
ありえない――虚脱を生むほど疑惑が、向けた太刀を震わせた。

「……」
奈奈も戦いを仕向けない。ただ、突然の変異に対応できるよう立ち位置を変えて出方を警戒しながら待っているようだ。
逃げる訳にもいかずシュラも奈奈の隣で構えを取る。

もう、怖いとか……後悔とかではなく。
ただ、生きる為に一度納刀、震えはあるが、抜刀の構えへ移行する。
しかしその男は首を傾げて二人へ言う。

「アマツマラ――その名を知ってるようなので誤解を解く意味で名乗りますが、拙僧はかのアマツマラではありません」

「なに……？」
声を放ったのは奈奈。
「とりあえず今は、この地をお去り下さい斬九郎殿」
「何者だ、お前……。何で俺の名を知っている」
跳ね上がりそうな殺気と声を押し殺してシュラは問う。
「はッ、拙僧は海咬国は牙影の黎弥様の従者にて三鈷杵（さんこしょ）と申します。先月天和は西の都、天津之原（あまつのはら）国から帰還した、祓い術を会得した僧でございます」
そこで、シュラは片眉を跳ねさせた。
「先月……？　では、蓬莱や天武にいたのではないのか？」
「は？　蓬莱に……天武でございますか？　いえ、拙僧は帰還してから海咬にいましたが？
ただ、斬九郎殿と駈月との死合いの立ち合いに向かう牙影様には付き添――」
「話、あとにしろ！」
奈奈がサクラを突き飛ばしナタを奮う。
サクラが絹共々横転させられ非難の面貌をむけるが、パイプ椅子が両断されて壁に突き刺さる光景に小さく悲鳴を跳ねあげた。
投げられた場所は室内から。
「嘘だろ……」
そこへシュラも双眸を向けてサクラ共々魅入られる。僧も奈奈も警戒するしかない。
ベットの上でゆらりと女が揺れる様に立っている。
「……有希……奈……」
シュラが茫然と呟いた。
拘束されていた少女。それがベットの上で、まるで力任せに引きちぎったように身体から、

千切り後の残るベルトを垂らして闇の眼を廊下へ向けて立っているのだ。

そして拘束が外れたが為だろう。警報の音が、誰も止め手のいないナースステーションにて、けたたましい音を鳴らしている。

階下からは未だに地響きがしている。まだ餓鬼がいる。なのに、その音を背負ってシュラは茫然とした。

有希奈の室内は完全に闇の気に覆われ、まるで闇の墨を大気に流したように色濃く揺蕩っているのだ。

この世界ではそれが誰でも視認できるが為に、同席するサクラも面貌を蒼白にさせていく。しかもその姿を愉悦とばかり、有希奈は長い髪を妖艶に梳き上げ、視線だけで値踏みするようシュラを見つめていく。さらにペロりと下唇を舐め上げた。

それらを踏まえても、シュラを硬直させる要因がある。それは有希奈の変貌。その闇の眼窩。そして赤い目。漂わす異常な闇の靄だ。

――本当に魍魎、シラヌモノなのか。気配が余りに強すぎる。

有希奈を見るだけで、今まで殺した輩と違い、肌へひりつく何かまで感じさせる。

それは戦いの折りに感じる剣気にも似ているもの。

そんな物が戦いの素人の有希奈に放てるわけがない。

嫌な気配が不安を招いて、ありえない疑惑をも抱かせ、禍々しい気配に血の気も引かせるのだ。

しかもこの色濃い色。これをシュラは覚えている。

唯一会った魑魅……斬月村の弐癒芙。

そして……

「あの、駈月と同じだな」

廊下の入り口を隔てて有希奈と対峙すると、奈奈がナタを構えて彼女を睥睨した。

その側面で。

ギャ、ギャ、ギャ、ギャ――

歪な声をだして、遂に階下から餓鬼が溢れてきた。
僧が素早く駆け出し、錫杖を振り回して片っ端から吹き飛ばす。

「斬九郎殿、こちらは拙僧で十分」
「共闘、してくれるって事か？」
「この騒ぎを収める為。そして牙影様の命において、信用して下さって結構」

そう言われても、はいそうですか。とは納得し辛い。
しかも現状はそれどころではない。
有希奈が重力を無視するように、ふわりと浮かんで床へ降り立ったのだ。

「まさか……闇漂（ヤタ）……なのか？」
「さっきまでは違った。けど、わからん。それ相応の奴だ」

奈奈でも不明かと、ただ抜刀の構えだけを向けていく。

錬気の出ない状況。
震えが走る腕で握った太刀。
これらでこの状況を打破できるとは思えない。

けど、ひとつ有希奈に有効的な物は存在している。

かつて斬月の村で、駈月は凶悪な姿に変貌した。
それを戻した技が存在した……未完成の技――

「――風波、壱の太刀の弱体技か？」

シュラの心を読み取り奈奈が言う。
「あ、ああ……俺では最大級の技だが」
「阿呆。さっき言ったばかりだろ。錬気の事は忘れろって」
「で、でも……」
「今のお前じゃ錬気だせないんだよ。出たとしても威力を掌握できず、あの娘の頭部を吹き飛ばしかねない。それとも殺したいのか？」

伝えられた言葉にぞっとする。
そして達人の奈奈が言う以上、うかつに試せばそうなるはず。
なら、シュラにはどうにもならない。

そんなシュラを慮ってか、
「奈奈が風波を打ち放ってもいいが」
奈奈が優しく声をくれる。

「いいが？」
「あんな弱い風波、奈奈には無理。ドカンと吹っ飛ばすのが奈奈の信条」

止めてくれ――純粋にシュラはそう願った。
と、同時に有希奈が――

『ねぇ、サクラ……貴女も染まろうよ』

不知モノ特有の、たどたどしい声ではなく、平然と理知的に言葉を発したのだ。
それでも響く多重音。
それは駈月と同種の気配。
森で砕けはしたが、黒霧『異』の影響、もしくは名残りとシュラは予想した。

『なんでみんな下がるの……こっちおいでよ』
闇の眼窩の中で赤い眼がぎょろりとサクラへ向けられる。
そんな物を向けられては、ターゲットにされたサクラが小さく肩を震わせる。

「間違いない、闇漂人だ……、近づくなサクラ！」
叫ぶシュラを無視して、恋人のサクラは有希奈へ――と、近づかない。

「あんなの有希奈じゃない。なに、なんなのこの有希奈は⁉　それにこの部屋なんでこんな暗いの⁉　もしかしてあの化け物ども、みんな彼女を迎えにきてるんじゃないの」

捲し立てる様に彼女を真っ向から否定した。
壁に夥しく付いた血糊をみて、小さく悲鳴をあげる。それらは間違いなく有希奈の部屋に集中しているのだ。状況からサクラもそれに気づいたらしいが、あまりに異常な恋人の所作に怯

えを色濃く宿して下がっていく。

『怯えてるの……おいでよ。私が気持ちよくしてあげるから……』

しどけなく衣服を乱し、豊満な胸で妖艶に身を捩っていく。

『毎日、楽しんだじゃない……ね、おいでよ』

「いや、こっち、こないで……」

サクラが下がり続けて廊下の壁に背を付く。

だけどそこにはベトリとした血糊がこびり付いている。

それにサクラは絶叫のような悲鳴を上げた。

「念の為に言うが。傷をつけられるな、付けられたら生涯残るぞ！」

奈奈の言葉にサクラが幾度も頷いて、ただ倒れる絹を抱き上げる。そして迫る有希奈へ怯えた眼差しを向けていた。

それに有希奈は――

「――はやい!?」

駆けだす。

シュラは唖然とした、あまりの身のこなしに警鐘が鳴ったのだ。

有希奈がサクラ目指して走り出す。

一瞬の世界――そして奈奈と相対させたら、手練れとなれば奈奈もナタで平然とぶった切る。

錬気の強い奈奈なら闇漂人と言えど殺せるだろう。

なら、

「すまん、有希奈――」

震える腕。奥歯を噛み潰して抜刀――ではなく、遮二無二担った太刀を引き抜く。

それが限界だった。

そのまま刃を返して迫る有希奈の腹部へ、強烈な当身として峰を放り込む。

ベットまで吹っ飛ぶ有希奈、けど気など立たない。

再び侵攻を仕掛け、それにシュラが応じて峰で――

禄武流居合――百舌鳥落とし。

――の、軌道。

だが、震える腕がそんな鋭利な太刀筋を生む訳もない。ただ、無理やり、あの時の小学校で二体の鬼を――有希奈の腕を断裂した技を、もう一度有希奈へ叩きつける。

異様な震えが体を走る。

その悪寒に押されながらも彼女を救う為と言い聞かせ、その一手目で、脇から有希奈の右肩の関節を打ち抜く。

『――ぎぇえええええええええええええええええええええ!?』

外れた骨に、口腔を限界以上に開かせ有希奈からありえない絶叫を上げさせた。

それでも身体のみでシュラへ突っ込み、その凶悪な嶮山のような牙を開いて頸動脈を狙って幾度も開閉させる。

奈奈がすかさず足を狙ってナタの背で叩きつけた。

ガツン――と音がする。

その状況にシュラの双眼が震える。恋い焦がれた初恋の少女を生殺しのようにしてる自分に、シュラはただ吐き気と腹の底から沸き上がる不快感を踏み殺し、早くとまれとばかりに動けないよう太刀を幾度も奮う。奮い続ける。

その為に少女が、悲痛に呻く。

恨みがましく、何故奮うのか――と、言わんばかりの眼差しで。

それにシュラが「ひぅ……」気押され。

「手を抜くな！」

奈奈に舌鋒鋭く叱咤されて、震える腕で奮いつづける。

なのに、一切気を絶たず、恨みの眼差しをシュラへ見つめ続ける。

『……お前が私を斬った』

「――!?」

動きが、鈍る。

『……お前が私の肩を潰した』

恨みの声が、シュラを包み込むようにもたらされる。

それにシュラは、腹に力を入れて言い返した。

「――だって、そうしないとお前がサクラを襲うだろう！」

『……しかもこの餓鬼は私の足を折った』

シュラの言葉など一切聞いていない。

それが分かる。分かるのに、それでもシュラは叫び続けた。

「お前を助ける為だ！」

『助ける？　いたい……こんなに……いたいのに……いたかったんだよ？』

不協和音はあれど、優しい声の色に変わっていく。

闇の眼差しの中で、すらりとした鼻頭が朱に染まり、鳴き声のままに有希奈がシュラを絆すように甘声をだす。

そんな物を見せられては、いつも彼女を思い描いて苦難を乗り切ってきたシュラの動きが鈍ってしまう。天和の光景に照らしていた少女の面影が、今まさに重なっていく。

そしてそれを、いま、自分が砕くように刀を振るっている……

「……やめ、ろ……やめろ！　――惑わすな!!」

『なのに……貴方は……助けてくれなかった……』

「違う、助けるためだ！　助けたくて――」

『……私は、ただ……帰りを、シュラの帰りを待っていただけなのに……』

「――!?」

その言葉が、シュラの攻撃を、完全に止めさせてしまった。

「――阿呆ッ！」

奈奈が悲痛に、絶叫のように叫んだ。

その一瞬に、有希奈が飛び掛かってきた。

『――シャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

有希奈の絶叫に身を竦ませ、シュラは呻く。呻くどころか押し倒され、刀がカツンと床を跳ねて転がった。

殺気を帯びた奈奈が、担ったナタの峰を返して刃を向けた。

『――アアアアアア、――アアアアアアアアアアアアアアアア』

喜悦に喚く有希奈の牙が幾度も幾度も振りおろされて開閉される。

それにシュラは、遂に悲鳴の声を上げた。

「違う、違う、違う、違う違う違う違う違う！」

『――違う、何が違う!?』

「お前が変異したからだ！　お前が太刀なんか握るからだ！　お前が――」

粘る程液を引く口腔から、その鉤歯が剥き出しにされる。その牙は既に人の物ではない。ただ化け物の象徴のように怜悧に輝きシュラを狙う。

その顔を、力任せに両手で押さえてシュラは絶叫した。

そして有希奈は恨みを綴って紅眼を凶悪に眇め、それでも叫ぶシュラへ歪な笑みをむけた。

そこに初恋の面影とか、可憐な女子高生の挙措や、あの日、シュラが旅立つに至った玄関前に立っていた、夕暮れの光景の中に妹と映った少女の形姿も残り香ももう感じられない。

それが、ただシュラの双眸から光を漏れさせる。

ただ、哀しかった。

自分がやっている事。

これからもしなければいけない事。
なんで、こんな世界に至ったのか。何故、あの天和にいたのか。
何故、この世界に……背を向けたのか。
それら全てが、憧れた隣人の少女と重なっていく。

『ぎゃあああああ、ぎゃあああああああああ、ぎゃあああああああああ』

喚く少女。その見てはいけない醜い部分を露呈するような所作に、シュラは悲しくて。ただ、双眸に涙が幾つも浮かんでいく。
背後で見つめるサクラはその凄惨な現場に、呻き続ける絹を抱きしめ奥歯を鳴らして震えるだけが精一杯。

「斬九郎殿――封呪を行使します！」

飛来した声と、何かが有希奈へぶつかり。
『ぎゃ!?』
彼女を窓辺まで叩き飛ばした。

それは一枚の札。

しかもシュラ達を覆う様に、
「……こ、これは……」
室内に無数の札が飛び狂う。それにシュラは見覚えがあった。
紘羽の町で、暴れた不知モノを封じた紘羽アカネが使ったものに酷似していたのだ。

「離れよ！」
部屋に入ってきた三鈷杵が叫ぶ。

「な、奈奈、任せよう！」
咄嗟に叫ぶシュラの叫びに奈奈は一足でサクラの元まで離れ。そしてシュラが離れた途端。
その札の全てが雪崩のように有希奈を覆い尽くした。

「このまま一次封印します――」
そう叫んで何かの印と、言葉を発し。

『……お前は……私の腕を、その太刀で……斬り落としたんだ……』

「――!?」

鼻孔も口腔も包む札が有希奈の最後の言葉を包み込むと、やがて、彼女は一切の動きを停止させる。そのまま僧は縄を放り、それは瞬く間に有希奈を包み込んで拘束した。

ぱら、パラ、っと包んでいた札が有希奈から外れ。

瞬く間に姿を消失させていく。

「こ奴の気配を完全に外界と封断します。とりあえず、これで彼らの侵攻はここに向かないでしょう」

「ああ、……ありが、とう」

信用は出来ないが。それでも礼だけはとシュラは伝えた。

身体が、まだひどく震えている。咄嗟に目尻に浮かんだ涙を拭いさる。

奈奈はもう一瞥も無く、ただ絹の治療に廊下で錬気を放出していた。

それを見定め、

「……三鈷杵さん。事情を説明してくれないか」

「と、仰られますと？」

「この少女の変異。この一連の騒ぎ……。俺達が来た時には既に始まっていた。なら、先に着いていた牙影の黎弥は知っているのだろう。だから俺に助っ人をするよう頼まれたんじゃないのか」

そこまで話すと、三鈷杵は錫杖を一鳴らしさせ、簡潔にシュラへ告げた。

「共に来た牙影様の従者が、裏切りました――魑魅だったのです」

その言葉に、シュラは……そうか……とだけ、告げた。

そして絹の様子を見に向かうと。横たわる絹の横で奈奈が錬気を使いながら、悲しそうにシュラだけに聞こえるよう呟いたのだ。

「アホシュラ、もうお前……」
「……なに？」
「――もう、戦いは、無理だ――」

封じられた太刀

人を襲った餓鬼群れの骸は、その一切が塵となって消えていく。廊下には未だ温かい看護師たちの無残な亡骸が床に壁にと横たわり、夥しい血がリノリウムの床を染めて階段を越えて垂れていく。

一応の終焉を見せた襲来。
けど、大学病院に自衛隊が乗り込んできたのは少し後の事。

隊員たちは武装のまま、化け物のいなくなったロビーや各階層に展開していくが。既に目的の有希奈が三鈷杵の結界に気配を消され、更なる餓鬼群れは彼女の行方を見失い、再び東京の街並みへその姿を消していた。

そして奈奈達は自衛隊との調書に発展しないよう、そして要らぬ騒ぎを避ける為に、再び友梨佳の執務室に戻っていた。

シュラはサクラを伴い部屋を出ていた。

「話は解りましたぁ。とりあえず有希奈ちゃんは、ここから動かさないようにして、自衛隊の人に中で護衛を付けて貰うよう頼めばいいのね」
やんわりと、舌足らずな声で女医が言う。

「そして先にも言いましたが、こちらの卯月有希奈殿の縄や札には決して触れないよう厳守願いたい。この世界の者には理解し難いかもしれませぬが、法術にも限度があります。これも人死にを減らす為。それだけ厳守してくだされば問題はないかと」

「たぶん院長や教授なら許可してくださるはずですよ」

倒れた絹に錬気を使い続ける奈奈。
でもそれを見つめる友梨佳は、三鈷杵の話に上の空で生返事を送っていた。というのは絹の怪我が瞬く間に治る不思議な光景を目の当たりに、傷の蘇生を夢中になってみつめていたのだ。

そんな女医の姿から一応の決着と判断したのか、三鈷杵は部屋の扉に手を掛けた。

「拙僧は、これより病院内に幾つか破邪札を仕掛けてきます。戌亥殿は、この施設で権限がある様子。できれば施設内で札を見つけても取らぬよう周囲に厳守していただきたい。外れると、この施設にまた入り込むでしょう」

そう告げ三鈷杵が部屋を出る。と、

「……あれ、ここは……」

ソファーに寝かされていた絹が身動ぎした。

「目が覚めたか絹ねぇねぇ。医者？　だっけか。友梨佳の部屋だ」

「絹さんの怪我どうなの、本当に治ってるの!?」

突っ込んで訊いてくる友梨佳に、絹はビクリと肩を跳ね上げるが。あれだけ出血した傷は既に塞がり、絹も痛みは感じなかった。

この時点で、先の傷具合と現在の様子から判断して、友梨佳はただ感嘆の声を上げる。

「すごい、本当に治ってる」

「え、ええ……治ってます。全然痛くありません。……ありがとう奈奈ちゃん」

「いい。そこまで深くなかった。これ以上やられたら……のみ込むしかなかったけど」

「飲み込む？」

「いや、気にするな。とりあえず血の補給はできないから、あとで何か栄養ある物を喰った方が良い。あまりこの世界の食い物は腹に入れない方がよさそうな気もするが……」

そう、冷たく奈奈は言葉を閉ざした。

「そう言えば、私どうして怪我を……？」

「ああ、覚えてないのか？　アホシ――ん、斬九郎を守ろうとして、絹ねぇが突っ込んできた

んだ。で、あいつの身代わりに斬られた。……部屋から出るな、っつったのに」
ぶす、っと奈奈が頬を膨らます。
「ごめんね。酷く嫌な予感がしたから」
「そこだけは良い感してる。今のあいつは駄目だ。戦いにならん」
テーブルに置かれた血塗れの鞘。
それを見て絹も頷く。
「何か、思いつめてますものね」
「絹ねぇねぇも、気づいてたのか？」
奈奈の問いに、絹はまだ力は入らないのか弱弱しい笑みを向け。
そして絹は、
「気づくよ。だって……」
「だって？」
「彼を、ずっと見てるんだから」
絹は柔らかく奈奈に微笑んだのだ。
何も言わず、小さく頷く奈奈。そして錬気を与え続けていく。
傍目には何もせず、ただ掌を翳す不可思議な作業だ。だがそれに友梨佳は理解できないながらも、少しでも何かが学べないかと注目だけは続けていた。
その間、友梨佳もメモを取ったり、一々感嘆を上げるのだが。そんな彼女を置いて絹は部屋を見渡し、対面のソファーに寝かされた有希奈を見つけて眉尻を下ろしていく。
「どした？」
「う、ん。……あまりに似てるから」
「なにがだ？」
「卯月有希奈さん？　だったよね。とても他人とは思えないほど……蓬莱の姫神、紘羽アカネ様に生き写しなんだよ」
「そんなに似てるのか？」
「似てる。絹は蓬莱で虎綱様の使いとして何度も会ってるの。それに今回、あの方の手紙も預

かってきてるから」
そこで奈奈は声を上げた。
「あ!? そう言えば、余りに目まぐるしくて気にかけられなかったが。絹ねぇは、蓬莱に言ってたんだ。再会した時の農道での剣幕を思い出す限り、間に合ったんだろ？」
「うん、間に合った。そっちは大丈夫だから、任せて。……でもね、旅の間、ずっと疑問だったの」
「何がだ？」
「何故、斬九郎様は、あんなにアカネ様を心配してたのか。似てるとは聞いていた。名を貶める結果になって自害をとも心配なされていた。けど……会って間もないのに、あまりに彼はアカネ様を心配し過ぎてた。あの時、庵で絹が告げた言葉に、彼は面貌を蒼褪めさせていた。……その意味だけが、ずっと疑問だったから」
対面のソファーには呼吸さえ感じられない少女が縄で幾重にも巻かれて札が数枚張られている。一切触るなと三鈷杵の命で。ソファーごと端に追いやられ、まるで置物のようになっていた。
蒼白の面貌のみならず、呼吸も生命の躍動も感じさせない。
さらに彼女の寝顔は同性から見ても美しく、それが返って先の姿と相まり、見る者に言い知れない妙な不安すら起こさせるのだ。
いきなり目を見開いて、暴れる様な――
そんな危険な気配を放つ有希奈を一瞥して、凶悪に双眼を眇める奈奈は吐き捨てた。
「でも有希奈は、あいつなんか見捨てて妹に転がった。その判断は、奈奈はどうとも言わない。むしろ男としても剣客としても、今のあいつは魅力がないと思ってるからだ。いつまでも幽霊みたいに未練たらたら引きずってないで、さっさと見捨ててぶった切ってれば絹ねぇねぇにまで迷惑かける事はなかった！」
鼻息荒く吐き捨てる奈奈、その頬へ苦笑う絹は手をあてる。
「そう言わないで、それを割り切れないのが彼でしょ」
「……そうだけど。そうだけど、あいつは恋も剣技も優柔不断だ」

不遜に鼻を鳴らして一気にティーを煽る。
治療は、一通り終わったのだ。

「でもぉ、それが彼の……初恋、だったんじゃないの？」

そう告げたのは、繁々と観察していた友梨佳だった。
絹は身を起こそうとして、それを友梨佳が咄嗟に支えた。
奈奈は絹の懐に座ると絹の腹を枕にした。動くなと言う意志を示したのだろう。
ついでに絹のお腹に頭を擦りつけて定位置を探してグタリとする。
そして言うのだ。
「初恋？　あれなら、他にも色々ハァハァして、もう本人も判んなくなってそうだけどな」
「ううん。男の子の初恋の子はね……特別なのよ」
「特別ねぇ」
つむじをよせた奈奈が女医を見てから、そのまま絹を見た。

一瞬見上げた奈奈に絹も何かを言おうと思ったが、敢えて今の奈奈には言わない方が良いような気がして、その言葉を飲み込むのだ。

「こっちの世界は、人同士の繋がりが疎かになりやすくてぇ、誰でも殻に籠りやすいのね。けど、恋だけは人を外へ導くように進めてくれる。それが初恋なら、まさに新しい新天地すらみせてくるんだよぉ。そんな相手子なら……きっと、彼の心はまだ向いているのかもしれないし」
持論へ満足げに頷く女医。

それに絹は少し意気消沈。
しかも、
「まだ、奈奈ちゃんには早いかな。ちょっと、分からないか？」
やんわりと紅茶のお代りを注ぎつつ友梨佳は大人の女性のゆとりを見せつけ、人差し指を軽く振る仕草まで披露するのだ。

それに珍しく奈奈は微笑みを向けた。
「そうだな。解る分からない以前に奈奈は既婚者だから、現在進行形で男を狙ってる女達の事は、よーわからん」

「え……？」
一瞬、友梨佳を強張らせた。
「やっぱり、あいつは馬鹿だな」
絹には最後に呟いた奈奈の言葉の意味は解らない。
それでも片頬を膨らませて視線をそらす奈奈を、優しく引き寄せるのだ。
「奈奈ちゃんのおかげで助かった……本当にありがとね」
そっとぬいぐるみのように奈奈を抱きしめる。と、奈奈は珍しく暴れる事はせずに、
「いいさ。お前に死なれたら、あいつ……もう二度と柄さえ握れなくなりそうだし」
小さく声を潜めて絹にだけ聞こえるよう告げていた。
そんな三人は、静かに紅茶を啜るだけの時間が流れ。先まで聞こえた惨劇の砲火とのギャップに、どうしていいのかやる事も判らず。ただ時計の音だけが場を支配する。
やがて、その均衡に耐え切れなくなったように絹が声をあてた。
「……そういえば、斬九郎様は？」
周囲を見ても、ここにシュラはいない。
「それなんだが、一階ロビーから見回ってくるって言って出てッた。ついでにサクラがくっついてった」
そこで奈奈を抱いたまま、絹がいきなり立ち上がった。
「お、おい、あまり無理はするな!?」
「大丈夫よ。まさかと思うけど、外に出てないか確認したほうがいいと思うの！」
「幾らなんでも大丈夫だろ。そこまで馬鹿なら、ここで死んでるし。第一、一応気配はここからでも感じてる」
「でも……合流したいです！」
既に回復したらしい。いつものノリで血色よく宣言。
それに友梨佳は微笑みを向けた。
「なら、絹さん、このあと皆でデパートに行ってみないですか？　さっき奈奈ちゃんから訊いたんだけど、服を買いに行くんでしょ？　それなら騒ぎの進んでる中心地と反対、少し遠いんだけどデパートがあるから、車で案内するよぉ」

「デパートって、表衣を商いされてるところですね！」
そう、嬉しそうに絹は飛びついたのだった。
「――でもさ、事情は分かったけど。ほんっと、よくできてるよね！」
「え、なにが？　というか耳元で力一杯言わないで」

シュラとサクラが辿り着いたのは病院の屋上だった。
一人で病院内を回りたかったシュラだったが、サクラは心配だからと獅噛みつき、結局絹を奈奈に任せて院内を少しだけ二人で歩いた。

砕けた屍が塵芥（ちりあくた）と化していく様を見るサクラの顔色は、瞬く間に変わっていく。

そのおぞましい景観から目を背けさせるように、シュラは掌でサクラの双眸を覆い、無理やり連れ出すようにして一階ロビーへと向ったが。

未だに散乱する人の死骸や、今頃駆けつけた自衛隊が雪崩れ込んで、生存したナースたちと何やら揉めている。

そんな騒乱の現場に妹のサクラを連れていきたくなくて。シュラはサクラの手を引き他の階層を適当に流して最上階へ。でも、そこはやけに厳重な警護がされていた。不審に思いながらも最上階を越え、シュラたちは無人の屋上へと辿り着いた。

物干しに干されるベットシーツや白衣が連なり風に激しく靡いている。

サクラは先の戦い前の不機嫌極まりない声は鳴りを潜め、冷静さを取り戻した双眸で、改めて事情説明をシュラに求めていた。

それに応えたくて、シュラは細かく旅立ちから身に降りかかった全てを、そして戻ったこの世界での出来事も含めて話して聞かせた。

それにサクラは幾度も頷きながら真剣に耳を傾けていく。
その中でシュラは、奈奈が治癒に長けてる事や、今現在……力の源ともいえる錬気も、震えて抜けなかった太刀の事も全て話して聞かせた。

サクラがどう思っているかは不明だ。
けど久しぶりに兄妹で会話が出来たという事実が、少しシュラを嬉しい気持ちにさせていた。

全てを聞いたサクラはやがて唇を動かす。
その台詞は、前より少しだけ明るい声。そして最初に興味を示したのが、そのシュラが着けている仮面だった。

「その仮面！　おにーちゃん、今自分がどんな姿してるか分かってないでしょ」

「そりゃそうだよ。向こうでは魔討津の鏡くらいしか鏡がなかったし、しかもあれは、鏡と言うより俺の力量を測定してるような感じだったから。自分では今どんな姿かなんて見れなかったんだよ」

「ふ～ん、そうなんだ」
「それに、たぶん俺の視点では仮面着けてる姿しか見えないと思うぞ」

「じゃあ、教えてあげる。お兄ちゃんに似てるけど、凄い影のあるイケメン！」
「そうかイケメンか、ごめんな中の人がブサメンで……」
「いいよ。見慣れてるから！」

あれだけ怒っていたのに。あれだけ恨み節が全開だったのに。とある一言で、妹は機嫌を直していた。

それはたぶん、奈奈が治癒に長けているという事実の掌握。そこから有希奈への希望を持っていると思われた。

少し溜息交じりにシュラは呟く。

「女の子って……わからないな」
「何か言った？」
「いや、べつに」

風が、酷い生臭さと据えた臭気を運んでくる。
見える首都高は所々が橋桁単位で崩落を起こし、幾数台の車が落下地点にかたまり未だに黒煙をくすぶらせている。

真っ先に目につく崩落したビルは何かのセンタービルらしいが、それが銀座方向に倒れて酷い惨事を招いたらしい、倒壊した景観から手に取るように様相が分かってしまう。
どれだけの人間が死んだのかは余り想像したくない。

そして斜めに倒れたビルの向こう。
遠く、輝きを放って消えるのは、きっと自衛隊の砲撃だ。
現状から見るに、自衛隊と戦闘を起こしてるのが、例の子供の亡者だけとは思えない。

「クラウドベータも来ているのか」
「先生が話してた奴だね」

「未だに正式な名は知らないけど。不知モノ関係で生身の人間たちの武器では、あいつらを倒せない」
「本当にその黒霧？　だけなの？」

「ああ。あとは奈奈レベルに錬気を高められたら……可能かもだけど。俺には黒霧と相対するレベルくらいしかだせなかった。もしかしたら……今の……俺なら可能なのかもしれないけど」

現在、錬気は……まともに出ない。

それを思って言葉をこれ以上放てなかった。
代わりに双眸を見開き、開かれた視野の中で何か動く者はと探していく。

やがて網膜に投影されるのは階下で蠢く幾つかの戦車だ。しかしそれはシュラが望むような希望になる存在ではなく、目の前で瞬く間に、しかも一方的に襲われ破壊されていく儚くも哀れな光景だった。

既に一般市民の通行は規制され、路上には緑黄色の服装に身を包むヘルメット姿の男女が病院との行き来を繰り返している。

この病院を異様に警護するあたり、有希奈の件が知れ渡っただけとは思えない。たぶん、階下にそれ相応の要人が運び込まれているのだろう事は想像しやすい。

でも、そんな物よりシュラは吹き抜けた風に眼差しを眇めていく。

「ここも、鳥がいないんだな……」

「え？」

吹き荒んだ風。

血風を浴びすぎて固まった黒髪が、特にその前髪が、ビルを吹き抜く風になぶられ激しく揺れていく。べたつく指で、それでも髪を梳くと、陰鬱な気が自らを束縛しているような気がして仕方がない。

その怖気にも似た感覚を振り払いたくて、シュラは強めに髪を梳くように落としていく。

「おにーちゃん、変わったよね」

「ん、そうか？」

「変わったよ。前は勉強から逃げてるだけのアホだったのに」

物怖じせず、婉曲的な言い方もしてくれないところは少し奈奈に似ていると思えた。

ならばと、率直に妹へ返してみる。

「死にたくなかったからな」

それにサクラは一瞬硬直。

しかし小さく頷いた。

「死にたくない……か。普通だったら、何言ってんだ、って思うけど。もう、話が嘘だとは思えない。なんか胸の傷、とんでもなかったし」

「……」

「黒ずんで赤っぽいし、生々しいけど……痛くないの？」

「今も痛いよ……けど、師匠はもっと巨大な傷を持ってずっと頑張ってる……負けてられな

いさ」

「そっか……」

そこで、また会話が止まる。

そしてサクラは小さく息を吐き捨てた。久しぶりに再会した妹に気の効いた台詞も言ってくれない酷く落ち込んだ兄を見て、サクラは兄の肩を叩く。

え、っと遅れて振り返ったシュラの頬へサクラは指先をあててていた。

「父ちゃん言ってたよ」

「なんて？」

「シュラを怒る前に、あいつが奥義を会得してしまった事を悲しんでくれ。だったかな」

「なんだそりゃ。あれだけ殺されそうになれば、切っ掛けさえあれば誰でも使えたさ」

「奥義って、そんな物なのかなぁ」

横に立つ妹はシュラの袖を強く掴んでいた。

シュラは、それが懐かしいと思えた。

覚えている限り幼少時代、それほど遠い過去に一度だけされた行為。

それが少しだけ彼を驚かせたのだ。

シュラはその意味するところが解らず、訊く事もできず。ただ、崩落して砂塵を巻き上げる東京の惨状を二人で肩を寄せて寂しそうに見つめていた。

その中で……やがて妹がぽつりと、まるで独り言のように言いだした。

「葬式の終わった後。おにーちゃんを燃やしてお墓へ納骨したあと。父ちゃんが言ってたんだ」

「……」

「あいつは自殺じゃない、殺されたんだ。うちの一族は寿命とは別に、死ぬ事で全てが繋がっている。だから昔先人たちが散々人を殺してきたから……ツケが、恨みが、一気に回ってきてるのかもしれない、って……泣いてた」

握った手に、シュラは手を重ねていく。

「殺人術だとは聞いていた。そして俺は、そのおかげであの山狩りでも生き残れた」
「本当に……人を殺したの？」

サクラの戸惑うような声色。
それにシュラは曇った大空を見上げ……

「ああ……」
「……」
一言、それでも力強く呟いた。

「お前の手を握っているこの手で、殺した。殺されたくなかったし、あの絹を守りたくて。一人ぼっちで罪人で殺されるはずだった俺に、希望と未来をくれた女性を守りたかった」
「……」
「感謝している……。けど、あの子のせいには絶対にしない。俺は、俺の意志で泣き叫びながら斬り殺した。とても、情けない……恥かしい行為。でも、しなければ生きられない行為と知ったから」

「……だから、そんな悲しそうな顔をしてたんだ」

サクラの言葉に、シュラは返さない。

「あの子が向こうで幸せになるためなら、俺はなんでもやってあげたい。そして身の潔白を晴らさなければ、彼女も大手をふって歩けないなら、その為に尽力したい」

「……そっか……」

「なんだ、元気ないな、この手、気持ち悪いからか？」
その言葉に妹は頭を振った。

「ち、ちがうよ！」
「わかってる。……俺、殺したく……なかったよ」

膨れ上がりそうな感情を表に出したくなくて、シュラは空を見つめて大きく息を吸い込

んだ。
吸わないと、今にも双眸から何かで出てしまいそうだったからだ。
だからだろうか。シュラはただ必死に茶化して笑っていた。
そんな兄の姿にどう思ったかはシュラには分からないが。
「……父ちゃんは、ボクに剣技は教えてくなかった。でも、もしも教わって、ボクが天和にいってたら、……きっと同じことになってたと思う」
「そんな事、考えるなよ。お前はこっちで元気に――」
言葉は途中で止まる。
二人の感傷を吹き飛ばすように、突然上空から耳を劈く衝撃が降ってきたのだ。
「なんだ!?」
二人が見上げると上空に戦闘機が二機、大気に輪を作って通り過ぎた。
余りの衝撃に近くのビル、その一つがガラスを粉砕されて階下へ無数の煌めきを落としていく。まさか上空から爆撃するのかと見留めれば、それは幾度か東京上空を旋回。
首相官邸の方なのか。
それとも皇居の方向を守っているのか知らないが。
いずれにしろシュラは、何かが起っているのを予見する。それでも、そこへ救助へ向かうとか、そんな気は無く。ただ感慨もないまま成り行きを見つめていた。
「奥義の継承、あれ、どうやるか知ってる?」
浮世など、どうでもいいとばかり。今までの話と関係なさそうな言葉をサクラが告げてきて注意が削がれた。
「いや、なんだいそれ。昔山籠もりで親父から見せて貰ったくらいだよ。あとは練習しろ、って事だったんじゃないのかな」
「今、使える?」
「……向こうで再現して、会得したけど」

「やっぱりね。だから父ちゃん驚いてたんだよ」

トン、そんな音が聞こえそうな挙措でサクラがシュラを手で弾く。
シュラはそれに数歩下がるが、目の前のサクラは、今まで見せた事のない優しい笑みを向けて来た。

「禄武の奥義は、……師匠を殺して会得するんだって」

風の吹く屋上で、サクラは身を翻す。
まるで奥義の真似事をする子供のように。

そんな仕草を、シュラは危ういと思えた。
ただの回転。けど、それは殺人の模倣。
しかも告げてる言葉が尋常じゃない。

「だから、父ちゃんは、ボクたちのお祖父ちゃんを斬殺して会得したんだってさ」

あっけらかんとした挙措で告げたシュラへの言葉。
それに対してシュラに驚き――は、なかった。

幼少の頃、突然亡くなった祖父に対する死の疑問。

山からおっこって死んだ……それは幼少の二人へ父が告げた台詞だ。
付き添った男は、父と仲の良い警察や弁護士。

山で父親に見せて貰った、二手ある奥義の妖しさの意味がしっくりした気がしたのだ。

「そう……か。やっぱりな」
「気づいてたの？」
「さっきも言っただろ。死にたくなかった。だから殺した……そうしたら、会得したって。親父は、そうやって禄武流居合を授かったんだ」

覚えた――とは言わない。敢えて授かったと、シュラはサクラへ告げた。

そうしないと父親は祖父を惨殺して技を得た、そう思われ家族の絆が根底が揺らぐかもと危ぶんだのだ。

そしてシュラは思う。
現在、シュラは二つの奥義を知っている。

天和で使ったのは、『奥義の壱、川蝉』
さらに未だに出来るとも思えない『奥義の弐、落鵬』
知る限りはこの二つ。

ただ、そこで別個の疑問がよぎる。
奈奈だ。
彼女は布団の上で、ふざける様に蹴りで行った。

あれは、彼女の類い稀な身体能力が叩きだした物なのだろうか。
躊躇ない奈奈。
あの刃の奮いは――余りに冷たすぎる。
ならば、やはり奈奈も……
そこまで考え、シュラは思考を捨てた。

酷く重い感傷が、腹の中で渦巻いている。
そんな気がしてならないのだ。

「……向こうの世界に持ち込むのは剣技だけでよかったんだ。冗談でも刀なんか持って家から出てはいけなかった。それがこの惨劇を招いた。……俺はそう思っている」

「でも、あの太刀が原因って確証はないんでしょ？」
「俺の持ってる太刀みたろ？　連中の持ってるのはまったく同じのだ」
「見たけど。父ちゃんの太刀の……材質違いだっけ？」

「誰かが型を抜いて、材質になる物を流し込んだ。誰かがその太刀に何かを仕込んだ。誰かが太刀を撒いている。そして誰かが有希奈達を鬼化させた。誰かが子供のみを選別して不知モノに仕立てあげ、何かの意味があるのか始まりの千葉と、この国の中枢、東京のこの場所をピンポイントで襲っている……。それは確かな事で。そしてその全ての支点が――あッ!?」

「え？」

――いま、一瞬、何かが見えた。

刀を撒いている。
刀を持つ者が鬼と化す。
鬼が崩れて魑魅と成す。

揺らぐ思考の中で、何か打開策が見えた気がしたのだ。

「――そう言えば、その刀が原因なら、なんでおにーちゃんは化け物にならないの？」
突然の甲高いサクラの声。
それに現実へ引き上げられてしまう。

「え、あ、……だな、なんでだろ」
ふ、っと浮かんでた考えが、サクラの一言で完全に霧散してしまった。

――もう少しで、解決の糸口が見えた気がしたのに……

そんな思考を置いて、シュラはサクラへ告げる。
「鍛錬してるから……ならない、とかかも」
「そんなものなの？　ちょっと乱暴じゃない？」

「乱暴か。そうだ。ならお前の方も教えてくれ。有希奈とずっといたんだろ？　どうして有希奈があんなになったのか原因を知ってるはずだ」

そこから、打開策が浮かぶかもしれない。
これだけ多発してる事態。政府からもコードネームで呼ばれるクラウドβは、たぶん、ここらにも来ているのだろう。そうでなければあんなビルが破壊される事態になるとは思えない。

そう思っての発言だが。
なのにサクラの唇が、確かに一瞬揺れたのだ。
それをシュラは確かに見る。

「なにかあるのか？」
「ある……というか」
「あいつをこれ以上闇漂人にしない為にも、一応経緯を教えてほしいんだ」

そこでまた何か押し黙る。
しかも耳まで赤くして。

「おい……隠し事か？」
「や、そんなんじゃなくて。その、有希奈助かるなら、なんだって教えるけど……あまり、良い話じゃないというか。そんな、大した事じゃないというか」
益々しどろもどろ。さらに面貌を朱に染める。
「なに？」
促すように強めに声を掛けた。

「え、……えっと」
「ん？」
「……してたら……その、ね」

「は？」
「だ、だーかーら！　有希奈と近隣のセンターに避難したんだけど！　水とかお手洗いあればいいかと確認だけにして。空き家が近くに合って、そこ、綺麗だったし、布団もちこんで、二人きりだったから。その……ね、ちょっと互いで抱き合ってたというか。ちょっと暑かったし……。将来、オランダ行って、結婚しようとか話してて……ね」

「……」
シュラが、一歩引いた。

「だ、だから言いたくなかったのに!?」
喚く妹を押しのけて視線を逃した。別に妹の喚き顔に向ける顔がなかったとかではないのだが。
腑に落ちなかったのだ。

「それだけで、変貌……か？　いや、ちょっと待て、裸で乳くり会ってる時に変貌したんだな」「ち、乳くりとかいわないでよ!?」

「真面目に答えろ」
「そうよ、悪かったわね！」

「いや、変だ」
「へ、変って、そこまでいう!?」

「馬鹿、そうじゃない。確か親父……道場の日に来た門下生が変貌して、化けてたとか言ってたんだ。――だから騙されないぞ！　って、やけに俺に怯えてた」
「道場で誰かがエッチな事してたってこと？」
「えっちから離れろ。そうじゃない、もしも門下生が、既にその時点で太刀を持っているのなら……サクラ、有希奈は太刀をもう持ってたのか？」

「え、うん……それっぽいのは持ってたよ。綺麗な桃色の布巻の細長いの持ってた。今思えば、あれ太刀を包んでたのかも」
「そこらから……皆にあって、俺にないもの」

「頭が悪い？」
「……」

「ごめん」
いや、案外そうなのかもしれない。
ふと、シュラはそんな気もしていた。

「……俺、身体に色々細工されてるみたいなんだよな」
「細工？　なにそれ」
「向こうの世界で奈奈とか師匠や婆さんとかから、ほら、俺ってこの籠背負ってるだろ？　あんな感じで色々修行らしくてな」

「それの何かが、おにーちゃんの鬼になるのを食い止めてる？」
「そう考える方が自然なんだ。そうじゃなければ、俺は斬月の村で既に駈月との戦いの中で変異しているはずなんだ」

「ねぇ、あの太刀を捨てる訳にはいかないの？　その黒霧……斬だっけ？　あれとは違って、語り掛けてきたり、その何とか門から何かを呼ぶってのもないんでしょ？」

「錬気もまともに放てない今の俺の生命線だぞ？」
「そっか……修行、頑張らないとね！」

内容の意味が分かってるのか。気楽に微笑む妹は少し可愛いと思えた。けど、シュラの顔つきが変わる。

「どしたの？」
「――しっ！　サクラ、名を斬九郎に変えてくれ」
「え、うん。でもなんで」

突然の兄が放つ怜悧な声音に、サクラは驚くが。
シュラの警戒する眼差しが、屋上と館内を隔てる壱枚の扉に注がれ、意味を悟ってシュラの背後へ隠れていく。

「誰か、上がってくる気配がする」
「そ、そんなの判るの!?」
「ああ、あのチビ師匠に鍛えられてるからな」

錬気で集中する。
氣で扉の向こうを観ようとしたのだ。
けど、なにも起らない。
感情の極端な爆発の兆しも、手に取るように分かった周囲を見定める方法もできない。
五指に錬気を集中させ拡散していく基礎もためすが、なにもでない。

――本当に錬気がきえている。

いや、辛うじて残っているのだろうが、あまりにか細くて認識できない程微量なのだ。
しかも太刀は執務室に置いてきた。

誰かが階下から、そして踊場へ、やがて扉の前へやって来る。
そこで、扉の向こうの存在は気配を消した。
それが解るからこそシュラは警戒、サクラも息を必死に押し殺す。

……ギギィ……

掠れた音を立てて隔てられた鉄扉が開かれていく。
そして現れた存在はシュラをみて、一瞬錫杖を構えるが。

「こちらにいらっしゃいましたか斬九郎殿」
「なんだ、三鈷杵さんか」

編笠、綿服、そして手に持つ錫杖がシャランと揺れる。階下から音が聞こえなかったのは、わざと鳴らさないよう構えていたのだろうが。
そのまま彼は一礼すると、札を出して屋上の五角に札を置き。そこに何かを唱えると床へ沈めさせた。

「結界、ですか？」
「はい。この場所を認識し辛くさせて。卯月殿の行方を晦ませます」

「あの、三鈷杵さんにも訪ねたい事があるのですが」
「なんでしょうか」
「牙影さんの仲間が、魑魅……闇漂人だったんですよね」

三鈷杵は、その言葉は覚悟してたのだろうか、ただ何も言わず、少し悲しそうに頷いた。
「共に牙影様に付き従い、ゆくゆくは斬九郎殿。新たな月に猛る王への忠誠を示すはずでした」
「でも、今回の原因になってる可能性があるんですよね。一緒に来たのではないのですか？」
「そのつもりでした。ですが、ともに来たそ奴は坂を落ち、我らは、誰かが足を止めても先に進む約束をしておりました。故に、先に進んだのですが……奴は先にこの根の国に現れました。その時には既にもう太刀が広まり……」
「時の流れが歪む坂か」

「気づいていれば、牙影様が間違いなく討っていました。ですが、この事態です」
沈痛に呻く三鈷杵。
だが、それも程なくだ。

「――おい、斬九郎。デパートいくぞ！」

突然三鈷杵の話しが止まる。
流れ込む様に、奈奈と絹が飛び出してきたのだ。

その絹の元気な姿にサクラは呆然、さすがに顔色を変えた。
「な、これが奈奈の力だ」
そうシュラが告げるのだが。
「ゆ、有希奈は、有希奈の腕は!?」
「一応、自然に治るところまでは進めておいた。でも、今は駄目だ」

「な、なんで!?」
「なんで？　魑魅化してるんだぞ。本来なら斬九郎がぶった切って祓うべき相手だ。でも、こいつが――情けを掛けた」

ふんすと鼻息荒く奈奈がシュラを睨む。

「俺が待ってもらった。俺の調子が戻れば――魑魅化も防げるかもしれないし。そう思って、さっき、現状維持を頼んでおいたんだ」

「甘い……。時期が来たら可能ですか？　その前にあれが封を破る程強大になる可能性もあるのですよ……伝承とは違い、貴方は甘いですな」
そう笑ったのは三鈷杵だ。
彼はそれだけ告げると扉を目指して錫杖を鳴らした。
そんな三鈷杵に絹が問う。

「一緒に行かれないのですか？」
「拙僧の役目は斬九郎殿の護衛成れど、人との馴れ合いを良しとはしていません。ここで不知モノ共の侵入を防いでいましょう」

やがて音を残して消えていく彼を見つめたまま、シュラは何も言い返せなかった自分を、少し情けないと唇を噛みしめた。

「あれの言い分も判る。だが、いまはデパートだ。友梨佳が車なる物を出すらしい！」

既に避難騒ぎで閉店してるような気もしたが。

とりあえず行くだけ行ってみるかとシュラは頷き、絹が持参した太刀を受け取り、それを今一度腰に回した。

「ありがとう絹」

「いえ、お礼を言わなければならないのは絹の方です。守っていただきありがとうございます」

「婚礼をするんだろ。未来の嫁さん守れなくて何が月に猛る王だ」

そう伝え、シュラは微笑んだ。その行為に奈奈は一瞥も無く。そんな二人のやり取りを、サクラは何か言いたげな面持ちで見つめているのだった。

「姫様には、これがいいです！」

何日滞在になるのかが不明なシュラたち天和からの一行。

早急に買い揃える必要な物もあり買出しは予定されていたものだ。

要らぬ騒ぎに巻き込まれはしたが、本来の目的通り、被災地から離れたデパートがある地区までシュラ達一行は移動していた。移動は僥倖にも友梨佳の車だった。

砲撃の収まる感覚を見計らい、友梨佳は車を爆走させた。

車窓から見える、未だ無事な建造物の展望が絹と奈奈から感嘆を上げさせていく。

ようやく平和になった区画に入り、周囲を観覧する余裕が出来てきたのだ。

でもシュラは白布に捲かれた黒霧『異』を落ち込むままに見つめていた。

例え抜いたとして今の自分に何が出来るのか――

ただ、自分も皆を脅威に貶めるだけなのではないか。

妹の言う、捨てるべき太刀。

そして、抗えない敵へ対抗できる、唯一生存を助けている太刀。

その誘惑を受ける様に、絡められていくような思いに苛まれながら、シュラは人を化け物に変える太刀から瞳が離せなくなっていた。

そんな一行を乗せて、やがてサクラお勧めのデパートへ到着。サクラと友梨佳の案内で女性フロアーにやって来たのだが。

「ね、ね、姫様はこれがいいですよね！」

意気消沈してるシュラの鼻ずらへ、絹がそれはそれは嬉しそうに一着の着物を提示した。

もちろん華やかに並ぶ衣服から自分の物は、ちゃっちゃか用意して山にしている。そっちには何も言う事はないが。絹は仮面なんかとっくに外し、シュラへ突き突けるように姫用としてある物を引っ張りだしてきた。

ぼんやりとした眼でそれを見て、その口角の両端をゆっくり下げていく。

そんな挙措を一切無視。

絹が唇を◇にして絶叫した！

「これきっと喜びますよ！　御望み通りの和服ですし！　やりましたねシュラ様、あ、いえ、斬九郎様！　これでまたあの子とイチャイチャできますね畜生め！　あ、私はこっちで結構ですよ、きゃ、やだ、これ可愛い！」

一瞬本音が聞こえたけど、シュラにしてもそれどころではない。

白い和服……とも呼べない巫女が清めの禊（みそぎ）に使いそうな長襦袢（ながじゅばん）が目の前で揺れている。

家で着るには少し趣（おもむき）があり過ぎるし、それでどこへ行ける訳もなく。

「嘘でしょ――？」

「いえ、本気です」

シュラの遠回しの、もうやめてあげてよ、という意志を絹は平然と一蹴した

正直少しイジメなのではとシュラも呆れ顔を浮かべるが。

ただ、絹は理解しているのだろうか。

これには別の使い方、意味もあって。

「それ、天和でどう使うかしらないけど……もしかして自害的な時に使わない？」

冗談か本気か判らないが、落ち込むシュラとは対照的に、溌剌（はつらつ）とした笑顔が白

の襦袢を押し付けてくる。

「だってぇ、シュラ様と奈奈ちゃんがいない時に、こちらの世界の御召物は恥かしいですぅ。とか言ってたんですよ！　我が儘全開猫かぶりで！」

「……」

「だったら長襦袢でいいんじゃないですかぁ、本来着るべきだったはずの死に装束みたいでぇ」

「ちょっと、止めてよ縁起悪い!?」

どうやら全開で理解していた。

本気で恐ろしい子だ。

シュラは強くそう思って、顎に伝った汗を手の甲で拭う。

「だって、あの女が憎いの！　可愛い、優しい、凄い美少女、しかもしたたか、ふざけんなですよ！　何か残しとこうよ！　これじゃ絹に勝てる要素が無いじゃないですか！」

そのまま絹が頬をぷぅっと膨らませて顔を背けていく。

奈奈並にあからさまな仕草だ。

「あの、絹さん」

「なんですか！」

「何か機嫌が悪くなる事されたの？」

「べっつにぃ～。ぷぅ」

擬音ではなく、声で言われた。

とりあえずシュラは、じっと絹を観察する。

そしたらどんどん背後を向いていくので、追いかけていくと「ぷい！」顔を反対へ背けた。

「……何か、あった？」

「別にです」

同じ返答で、さらにそっぽ向いてしかめっ面。

女の子がやってほしくない顔をした。

シュラの眼差しが胡乱になっていく。
絹は視界の隅に入ったシュラをみて、また慌ててそっぽを向く。が、慌てて振り返る。

「……」
「……」

下唇を噛みしめ、怒りとも悲しみともつかない顔をする。
そこでシュラは溜息を捨てたものだから絹が絶叫した。

「そ、そんな目で見ないで下さい、溜息しないで下さい!? 溜息一つでたっくさん幸せが逃げるんですよ！」
「そ、そうなの。なら気を付ける。けどさ、変な目でみたくもなるよ？ 普段素敵な子が、そんな顔してたら……心配になるでしょ」
「え？」

突然、まさにいきなり、ちょっとシュラが持ち上げてみた。
そんな事をされたら絹の肩もぴくっと跳ねあがる。

「絹は……誰とでも仲良くなれる、人だし。俺、……尊敬も、してるし」
たどたどしく頑張る。

それに絹はごきゅっと喉を鳴らした。
「え、え？ ――え!?」
「だから、何か困った事があったらいつでも相談に乗りたい」
「そ、そんなに……絹の事を？」

喜色に振り返る絹は瞳がキラキラだ。
色々あって本気で落ち込んでるシュラだが。それでも何か悩んでる女の子がいれば、やはり元気づけたくもなるのは男の性。だからこそシュラは何度も頷いていた。

それに絹はずすいと迫る。
それはもう、ハァハァと。

「だから何かあったなら教えて。相談にのるよ――」
「シュ、シュラさまぁ～～」
絹が歓喜に瞳を潤ませ、ダイブしようとした。
「――だって、姫も絹も同じ大切な仲間なんだから」
最後の言葉に、絹はシュラを勢いのままに突き飛ばした。
「痛い!?」
「痛くない！」
「え、なんで怒っ――いや、なんで突然泣いてるの!?」
しかも絹はさめざめと泣いたのだ。
「いいえ、そうですよね！　シュラ様はそういう方でしたよね！　本気で忘れてました。けど、改めてこの機会に言われると本気で泣きたくもなりまする!!」
彼女の言ってる意味はシュラには分からないが。
本気で泣いてるのか、嘘なきか。挙措の中に秘められた真意が一切不明な彼女を見て。とりあえず絹の頭を撫でようとシュラは手を伸ばす。
そこで……
「あ……」
シュラは動きを止めた。
院内や、学校や、そして風呂場でみた真っ赤な血に染まった両の掌。
それを突然思い出したのだ。
シュラは面貌を強張らせていく。
震える指先を見つめるシュラをみて、絹はすぐにシュラの変化に気がついた。
「シュラ様」
「あ、いや……。なんでもないよ」
――とてもこんな、血で塗れた手で絹を撫でたくない。

そう思って、シュラは掌を握りしめていく。
綺麗な彼女が、その血に染まった手で撫でると、本当に汚れてしまうように思えたのだ。
それが嫌でシュラは手を引っ込める。

そんなシュラを絹は悲しそうに見つめるが、またそれにすらシュラは気づけない。

「――あ、女性用の作務衣とかもいいかも！　これだったらいいでしょ！」

突然絹が声をあげ、今度は紺の作務衣を突きつけた。
「え、あ、ああ……普段着代わりにはいいかもね。予算はあるから着物コーナーもあるし、色々さがそうよ。サイズはサクラを参考にしてさ」
「分かりました。とりあえず絹のを先に終わらせちゃっていいですか？」
「うん、それはかまわないけど」

絹が再び物色する。
その間にシュラが視線を周囲に向けてみると、奈奈とサクラ、そして友梨佳はキッズコーナーへと移動していくところだった。

「……奈奈が全然会話をしてくれないな」
普段いるはずの存在が肩にいない。
それがシュラの気持ちをまた沈めていく。

「え、何か言いました？」
「いや、絹がいてくれてよかったな……って」
「ど、どうしたんですか突然⁉　褒めても何もでないんですからね！」
それでも、にひ、っと声出して笑う彼女は本当に楽しそうだった。

「じゃ、早く絹のを済ます為にも、ちょっとこっち来て手伝って下さいよ」

頬を高揚させる彼女がシュラの手を掴む。
そのままずるずると試着室の前に連行されてシュラも気づいた。
つまり見て選んでくれ、との事なのだろう。

瞬く間に試着室に飛び込む絹。

ゴソゴソと鳴る衣ずれにシュラが赤面していく。
こんな時に気を紛らしてくれる奈奈もいない。
それがシュラには酷く寂しかった。

「――わ、どうですかこれ、シュラ様、シュラさま！」
そんな思考も吹っ飛ぶほどに、禁止の名前を平然と中から連呼された。

バラ、っと開かれたカーテンの向こうからとんでもない少女が現れた。
着こなした衣服は落ち込んでたシュラですら直視を憚らせるほどに愛らしい姿だった。

今年の夏を彩る新作だろう落ちついた大人を演出するオリエンタル柄の長めのスカート。薄手のニットソーを下地に、シュラの好きな青色でのワンピース。しかも黒のハイソックスに茶のハーフブーツ。見事に肌を見せず、シュラの眼を惹きつけさせるその手腕。

かつて虎綱の屋敷で重い雰囲気を与える奉公人の支給着を、リボンのみで愛らしく魅せてた実力を完全にシュラは失念していた。
しかもとても即興で選べる訳のない衣服の組み合わせにハーフブーツ。
たぶんここに来る前、妹のファッション雑誌を網羅してきたのだろう。

さすがの朴念仁も絹がここまで愛らしくなれるのかと、不覚にも条件反射で背後を向いてしまう。

絹がおっかなびっくり訊いてくる。
「ど、どうですか」
「え、うん……すごい」

それが精一杯。
跳ねる程の心臓を抑え、必死に冷静になろうとした。
クラスの女子でも、ファッション雑誌のモデルでも、こんなに見事に着こなす人がいただろうかと考えてしまう。

ただそんな時だ。

「……」
絹がそっと、シュラを後ろから抱きしめたのだ。
「――ちょ、あぅ!?」
あまりに、優しく抱きしめられ、それが不謹慎にも気持ちよかった。
「あれあれ……。どうされましたシュラ様？」
耳元に唇が寄せられ、ひそひそ声があてられる。
しかもそれは甘く、艶っぽく、厭らしく。
さらに、わざとか偶然か。小さな鼻孔から優しく耳周りの髪を揺するよう、執拗に吐息をあててくる。これにはシュラもゴクっと唾を飲むしかない。
そのタイミング。
まるで見計らったように、
「うぁ、絹――」
シュラの胸元へ、絹が優しく両手を添えてきた。
唾液も飲んだばかりで、もう何も飲めず、ただうぐ、っと声が詰まる。
そうなれば音は漏れる。
その挙措に気づいた絹が背後から満足そうに微笑みを向けてくる。
さらに絹は唇を、すーっとシュラの首元へ当て、優しく呼吸をし始めていく。
しかも聞こえる様に。
「……あ、ちょ、うぁ、絹……」
「大丈夫ですよぉ。誰もみてませんから」
「そ、そういう問題じゃない……あ!?」
優しく声を、呼吸を耳道へ直接送り込むよう囁きだす。
試着室の足場は床より一段高い。
そこに乗れば背丈がシュラより低い絹と言えど、シュラの首元へ顔が寄せられる高さとなるのだ。

「ぎゅ、ってするの……嫌……？」
「べ、べつに!?」
絶対断れない言葉を放ってくる。

解ってるのか、解ってないのか。
さらに絹の子細な動きに合わせ、薄手の生地が二つの柔らかな膨らみを顕著にシュラの背中に押し当てる――
「うぐっ」
「――思わず声もだしてしまう」
「ちょ、描写みたいに言うのやめてくれ!?」

――なんだろう、この旅に出てから、絹がとても攻撃的（恋愛絡みで）になってる気がして仕方がない。

少し広めに作られた空間。
そこにはハンガーと、赤色ライトと、全身鏡台があるだけの世界だ。
そして背中から倒れたシュラへ。

「ずっと、怖かった……です」

その一言は、先までの彼女からはありえない言葉だった。
「こ、怖かったって……鬼の事？」
「いいえ、シュラ様に……捨てられるんじゃないかと思って」
「す、すて、そんな訳ないだろ!?」

どこまでが彼女の本音なのだろう。
外ではふざけてるような仕草だったのに。
今ではそんなそぶりが一切ない。本当に怯えてた少女の姿がそこにあった。その判断ができないシュラは、ただ困惑を余儀なくされる。

「どうしたんだ……絹？」
そう、聞くだけで精一杯。
それなのに、絹はシュラの予想にも及ばない事を伝えて来た。

「だってここは、シュラ様の国」
「え、そうだけど……」
「なら、もうこっちに逃げ出せば二度と天和は必要ないじゃないですか。そしたら絹なんか放ってったって……シュラ様はこっちの世界で生きて行けます。でも絹の故郷は天和だから……必ず戻らないといけないですし――そうなると」

大きな瞳に溢れる様に涙が浮く。
一瞬さっきまでの冗談の続きか、彼女の誑かしかと思ってしまうが。けど、シュラが見上げる眼差しの先にそんな挙措は一切みあたらない。本心からの言葉だと気づく。
そこで、シュラを蒼褪め、言葉を失い、その喉を鳴らした。

自分が今まで自分の為だけに動いて、こちらに来てから抱いているだろう不安を、平静に、はしゃいでるように見せてる彼女の心に、一切安らぎを与えていないのだ。

奈奈と赴いた小学校での戦闘において、もしもシュラが負けて大地に散れば、彼女はこの世界で戻る道も知らず一人になるという不安がある。
そして絹には、シュラのように奈奈みたいな相談役はいない。
いるのはライバルの姫とその従者。

相談なき者の、一人だけで抱えて来た苦しみ。

もしもシュラが天和を捨て、罪人である事など忘れて天和に背を向け日本に戻ったら。
もしも、日本で暮らすから、絹とはここまで……等と言って、絹を天和に返したら。
そして絹の生存が何かの拍子で知れ渡り、その途絶えた罪状を再掲されてしまったら。
役人たちは延々と絹を探そうとするだろう。
そしてシュラを取り巻き続ける事件は動き出す。

なのにここに来て、シュラの初恋の有希奈の存在。

そんな人間模様を見せつけられても絹は不平を言わずに堪えている。そしてシュラはなにも絹に優しい言葉を伝えていない。

たぶん絹が望む――大丈夫だよ――そんな言葉をだ。

なら、一体どんな気持ちになっていたのか。
もしかしたら、それが病院での戦闘にまで乱入してしまった絹の暴挙の真意だったのかもしれない。そう思えばシュラは言葉が見つからない。
それを今さら、ようやくシュラも気が付いて蒼褪めた。

震えてる絹に、シュラは血に塗れた掌を、拭っても消えないような幻影に苛まれる掌を、震えながら彼女に寄せる。
幾度もなる喉で、先までの妖艶な作り姿に絆された自分が情けない。
そう思う。
なのに彼女は言うのだ。
「怯えないで……」

全てを理解しているような彼女の声。
構わないとばかりに彼女へ密着され、シュラは、そのまま彼女を抱きしめていた。

すると、

「好きな姫様いるのに、ごめんなさい」
濡れそぼる彼女の唇は近づいて。

「まって、ここで――」
告げたかった言葉が掻き消された。

せっつくような、優しい感触。

啄(ついば)むような優しいキス
くっついては、離れ。離れてはくっついて。
糸が引くようなキス。
でも、それはやがて離される。
そして次に告げられた言葉は。
……シュラを震えさせた。

「……怖かったんですよね」

彼女の小さく囁かれた言葉……
したばかりの唇での言葉。

自らの事ではなく、他人を心配していた絹。
それは、シュラの心を酷く揺すっていく。

「知ってます……好きで有希奈さんを斬ったんじゃないと」
「絹――」
唇に、人差し指をあてられる。
何も言わなくて良いとばかりに……。

「知ってます……好きで彼女をあんな体にしたんじゃないと」
何も言わせず、絹は続ける。

「大切な、初恋の人だから……平和に暮らしてほしかったんですよね」

柔らかく、絹は微笑んでいく。
震えた唇で、シュラと同じように。感情を押し殺している。
美しい明眸に映る、決して言葉にされない悲しみ。

それはシュラも同じ。

その抑えてる感情を揺さぶられていく。
でも、そんな物を、女性に、絹にだけは見せたくない。

「……俺は……もう、有希奈やサクラが暮らしていけるだろう平和な時を、生きる事が……できないから」

嗚咽交じりに出てしまった言葉。
非難めいた、それでいて不平と、叶えられない願望の台詞。

それにも絹は柔らかく微笑む。

そして、こう言ってくれた。

「……それでも、二人で居れば、へっちゃらですよ」

にひ、っと笑う彼女は本当に強い――そう思う。
ただ、そう思っただけなのに。
女性の前なのに。

シュラは頬に伝う余りに溢れかえる物を抑えきれず力が決壊してしまう。
絹はそんなシュラを胸元に寄せ、強く、ただ強く、引き寄せる。
その狭い個室で怯えた、ただの十六歳の男を抱きしめていたのだった。

「し、下着と、水着なるものを……買いたいと思います」
「え？」

試着室から人の眼を気にしながら這い出たシュラへ、背後から絹が衣服を整え恥かしそうに頬を染めて水着コーナーを指さした。

互い仮面を装着する。
この仮面、他人がどう見えてるか知らないが。シュラが見る絹の姿は絹で、絹が見るシュラの姿はシュラらしい。

坂道で絹が使ったという遠隔と幻影は既に把握しているが、でも、未だに試してないシュラには本当に効果があるのか今一つ疑わしいのだ。それでも周囲から禄武シュラという男の存在を消すのには多大な役目があるらしく今まで露見する事も無くやってこれた。

そんな仮面を着けて絹がもじもじとしながら、みんなで買い集める為に持ってきた商品カートの中に選んだ服やブーツを仕舞っていく。
そして絹はシュラの袖を掴んだのだ。
眼差しを向ければ煌びやかにカラーな世界。
下着も水着も一緒に置いてある。

「あ、あの……見て、貰えますか？」
次いだ赤面させながらの台詞に我が耳を疑った。

「し、下着を!?」
「い、いえ、いえいえ、水着、なるものだけ……」
「つ、遂に、着ちゃいますか……水着」
「せ、せっかくの日本の夏装備……。毒を喰らわば皿までとも。雑誌なる物の本に書いてあると、サクラ様が仰ってましたので」

――何教えてるんだ妹よ。素敵な妹め。

そうは思うが、絹は本当に恥ずかしそう。
とりあえずカラフルな水着の陳列棚へ足を寄せるが。
「ほ、ほんとうに薄い……。これが、水着なのですね」
露出の多すぎる水着を前に絹が硬直する。

「うん。こっちの女の子はこれで海に入るんだ」
「なんと……破廉恥な。でも、探してみます。滞在中……着るかもですし」
「き、着ちゃうんだ」

興味があるのか意味があるのか、力強く頷く絹。

とりあえず予算と相談。その後は、恥かしいのでと、絹が一人で探索を開始した。
真剣な眼差しで、立て鏡と自分に当てた水着を交互に見合わせ、その度に小さく悲鳴をあげて顔を赤くする。
何だかんだと真剣に探している事だけはシュラも理解した。

そしてその間にシュラは絹へ一声かけてから和服コーナーへ移動する。
姫の事も忘れる訳にいかないのだ。

手頃なのを店員と相談の上で数点選び。高級な物と、比較的な安めなのがある事を学んで、彼女に似合いそうな浴衣や、上質な和服を似せた比較的安めなものを選ぶ。上質な物はあまりに高すぎたからだ。

そしてそこから絹を見れば、ちょうど試着室に入って行くところだった。

まだ、掛かりそうだ――そう判断して、さらに和服を物色。
「女性の買い物は長いと言うが……あれは都市伝説じゃなかったんだな」

そのまま視界を友梨佳やサクラ、そして奈奈がいるキッズコーナーへ向けると、店員や他の客に生温かく見守られながら何やら揉めているのが見えた。
どうやら下着について奈奈が喚いているようなのだが。

「早いだろ……四歳児……」
相槌不在の状況で、ある程度を購入して上質な箱に収められ紙袋に入れられた和服をカートに入れる。そのままシュラはレジ脇のベンチに腰掛け、とにかく絹を待つ事にした。

居ずらい女性コーナー。
試着室からの絹の合図がいまだない。
そうなれば嫌でも一人の時間は現れる。

絹は優しく抱きしめ受け止めてくれたが。
やはり一人になると想起されるのは太刀が抜けなかった恐怖。
これからの戦いに対する怯え。
さらに奈奈から告げられた……

――もう、戦いは、無理だ――

剣客としての終焉を予期させる台詞が頭をよぎっていく。
せめてと錬気の発動を促そうと指先に込めるも、指先には何かが現れてる気配すらない。試しにと壁を触っても、やはり変化はない。

「どうしちまったんだ俺の身体は」
傍目に奈奈を見る限り、錬気の発動が微塵でもあれば奈奈がこちらを振り返りそうだが、それすらないところをみると本当に何も起こっていないらしい。

まんじりと指先を見つめ。
どれだけ経っただろう。

「絹、……まだ選んでるのか？」

シュラは立ちあがり、試着室の前に歩みを寄せた。
そして未だに足元に靴があるのに気づいた。

「絹、まだ決まらないのか？」
そろそろ絹に対しても代わりの名を用意したほうが、とも思うが。今は敢えてと、その名で呼ぶ。けど、彼女から返答は一切ない。

しかもシュラが感じる限り気配も無くて。
シュラの双眼が細められていく。「絹、開けるぞ」細めに開けば、カーテンから覗くシュラの姿が鏡に映るばかりで絹がいない。

「――絹!?」
カーテンを全て開き。
「――!?」
シュラは、それを見て硬直した。

『女ハ預カル。日比谷公園跡地へ一人デ来イ』

鏡に鋭利な何かで彫られた歪な文字。
それは紛れもなく絹が浚われた事を意味している。
けど、いつの間に？
血痕等の争った形跡はない、しかし周囲を見る限り絹はいない。

奈奈すら気づいていない。
なら、奈奈の元へ走ろうとして、

――一人デ来イ――

その文字に、動きを止める。

シュラはレジに向かい、店員からメモとボールペンを借りて手早く記載すると、カートの紙袋に張り付ける。

「あの、このデパートから日比谷公園跡地はどう行ったらいいですか？」

地理に疎い事を告げ店員に場所を聞く。と、
「公園はありますけど、跡地なんてないですよ？」
訝しがられた。
それでも一応訊き受け。
背負った籠から白布巻きの鞘を取り出し握る。
シュラはそのまままっすぐ公園目指してデパートを飛び出した。

ここらの表通りは比較的に穏やかだった。

――やはり早駆けが出来ない。
つまり錬気は絶望的だ。
さらに抜刀は躊躇するような精神状態で抜いても威力はない。
そこらの大木すら両断は出来ない。

「なら、頼りはこの仮面だけだが……」
習った言葉を小さく呟く。
そして籠の錘に振り回されながら、瓦礫の世界をひたすら駆け続けた。

瓦礫と、異臭が強まっていく。
「走れば走るだけ被害が酷くなってる。それに、こっちって皇居とか国会議事堂がある方向なのか？」
頭上に掲げられた青看板は公園や皇居、議事堂。
国の中枢を示していた。
つまり連中は、これらに向かって攻め寄せているのだ。

デパートからおよそ三十分程の道程だが。信号が生み出す車列の流動もない国道を抜け、崩落のビルや首都高を越えていく。進めば進むだけ亡者が作りだした亡骸が、老若男女問わず屠(ほふ)られている。

しかも周囲に漂うのは異臭だけではない。
黒の霧。

既に陽光は夜の大海の如きうねりを帯びた黒雲に消されている。
そうなればシュラの視界が、闇に沈む景観だけを捉えていく。

近づいてくる銃撃の音。炸裂する音。
続く絶叫。

進めば進むだけ新鮮になる血だまり。自分が進む目的地が、不知モノらの目指す方向と一致させている事を認識させる

「こんなところに絹が……」
無事なのだろうか。
ただ、それだけが焦燥を煽る。

やがて崩れたバリケードに囲まれた東京駅に血と硝煙、瓦礫の臭いを感じつつも横断して、そのまま公園へと足を運ぶ。と、

「こ、これは……」

シュラは茫然とする。
どこから飛んできたのだろう。
一体誰が起こしたのだろう。

周囲のビルは、皇居や近くの議事堂を守るためか、比較的に低く造られている。
けど、なにか鋭利な物で掠められた様に、その外観は中ほどから消失し、失われた一部は皇居の堀を埋め、また路上すらも封鎖していたのだ。

目的地らしい公園――いや、記載されてた通り既に跡地には、綺麗にくり抜かれたビルの屋上部分が幾つも逆さに横転し、割れた窓から散乱した書類やら事務用品が焼けこげるままに散っている。
焦げた原因は潰された車両だ。公園に展開していたのだろう自衛隊の補給物資や車両が、軒並みビルに潰れてる姿を晒し、黒煙と炎をあげ続けているのだ。
病院から見えた幾つかの黒煙。
その意味がようやくシュラにも理解できた。

ふと、気配に東京駅を振り返り、

「まともじゃないな……」
未だに線路が無事なのか沈み込む様に視界へ消えていく電車の姿を見留めた。こんな状況でも交通機関は、まるでやけっぱちのように生き続けているのだ。
「――こんな状況でも人間を運ぶか」

ふと、そこでシュラは違和感を覚える。
けど、その意味が解らない。
理解する前に、闇を纏う巨大な鬼が飛来してきたからだ。

右腰につるされたシュラと同種の太刀。
なのに、それはもうシュラと同じ物とは言えるような物ではなかった。

刀身に滑るのは血糊。
黒霧『斬』のように蒸気を上げて、血糊を飛ばす事はないのか黒霧『異』の同型は、シュラの前で惨殺の太刀を体現して異様な気配を示している。しかも歪な変異が見受けられ、幾本の絡まる触手が腕に食い込み波打っているのだ。

対してシュラは、既に抜刀のできない指先で力任せに鞘から太刀を抜き放った。
灰色の太刀を握り、自然体で大気に示す。

「――」
そしてシュラは、自分に対しても有り得ない物を見た。

灰色の太刀。
その色が鉛色ではなく、薄らと闇の斑点が浮かび上がっているのだ。

「なるほど……そういう事か――」

まさに……雛。
そう思えた。
これからどんどん何かを吸って、あの忌まわしい太刀になる。その一歩手前。そんな気がした。闇に少しずつ染まる色彩にシュラはただ奥歯を噛みしめていた。

鬼が、正眼で切っ先をシュラへ向けた。

シュラも大地をふみしめる。
『……』
「……」
ふいに、構えを解いた鬼が太刀を軽く跳ね上げ背を見せた。
「な……に……？」
つまり、着いて来い――そう言ってるのだ。
奥へ進む鬼がビルの瓦礫を乗り越えていく。
抜刀のまま、とりあえずはと……シュラも警戒しながらついていく。
鬼の導きに、シュラは噴水らしき物があった場所へ案内された。
少し開けた芝生の大地の上には幾つものビルの残骸がある。
その中心に一際大きなビルの頭があり、その避雷針に――項垂れた一人の女が縛られている事にシュラは気づいたのだった。
「き――」――ぬ。
出かけた声を直前で止める。
闇をすくい取ったように色濃く広がる瘴気の中で、ビルの残骸に突き立つ避雷針に求める少女は捕らわれていた。
妹のチェック柄のロングスカートに薄紫のワンピース。
それはかなり前のブームになった服装で、今はさらに改良されて類似の人気になった服が別にある、なら東京の都心部で使われるような物ではない。
該当場所に捕まる少女。
さらに鬼が案内する。
そこらから考えても、捕らわれてる少女は絹で間違いない。
でも、近づくシュラに振り仰いだ顔は見知らぬ面貌。
たぶん、あれが仮面の作る別の姿の絹なのだろう事はすぐに予想つく。が、

――何故突然、幻影としてみえる……？

「斬九郎さま！」

叫ぶ絹。声も間違いなくあの愛らしい声。

でも……

「そういう事か」

ようやく、その違和感の意味にシュラは気づく。

そして幾つかの言葉を小さく囁き。

同時にシュラは避雷針まで駆け出した。

『月、猛る王――首、頂く』

圧し掛かるような重い声が大気に響く。

「空か――」

シュラが反射的に視線を向ければ、どこに隠れていたのか五体の鬼がその巨体でシュラを殺そうと飛来してくるところだった。

それを見定めシュラは駆け続ける。

五体の飛来した鬼は、眼前の、何もない空間へ衝撃混じりに太刀を振り下ろす。

テスト的に仮面の力を使ってみたのだが。その鬼すら狂わせた弐癒芙の作った幻術の面の威力にシュラはただ舌を巻く。

自分の走る先に幻影のシュラが出るよう念じた。

それだけで鬼は確かに襲い掛かった。

と、同時に走りながら構える太刀に力籠め――

「くそっ！」

――握る指が震えた。

腋から弄られるような悪寒に、背筋に走る怖気が拭えない。

絹との事で吹っ切れたと思えたが、不快感も露わな感触が嫌でも背筋を押してくる。「でも、

もう戦いは始まってんだ！」泣き言は言ってられない。目の前に向かうべき場所がある以上斬るしかない。

「――せぃッ！」

走り抜けざまに、背を向ける二体へ斬りつける。
『おおおおおおおおおおおおおおおおお――――――！』
仰け反るままに上がる凄まじい絶叫。
それにすら身体が怯えて震えを走らせる。
奈奈が言った、

――もう、戦いは無理だ――

その言葉が押し寄せてくる。
それでも唇を噛みしめビルの瓦礫を駆け上がる。

「斬九郎様！」

拘束へ一太刀浴びせて――と考えた。でも、震える指に自信が持てない。
ならばと指先で無理やり縄をひっぱり、太刀の先端で切り離す。
それしかできないから――

普段だったら、正確に両断できるのに。
物心ついた時から弄っていた真剣は、何もかもを誘導するよう太刀筋を沿わせてくれた。

――でも、今はそれが出来ない。

どうしても有希奈を両断した思いが脳裏を過り、その度にシュラは歯噛みする。

歯痒さが、苛立ちを沸せる。
錬気も太刀も震えない自分に腹が立つ。
見捨てられたに等しい奈奈の言葉、剣客としての終わりを示す言葉が重く肩から圧し掛かる。

握る太刀に、ますます力が籠められる。

けど、それは過剰な力。

こんなもので相手の呼吸と自らの呼吸や所作を合わせる居合等が出来る訳もない。それが解っているからシュラはさらに怒りが篭って力を籠める。

なのに、目の前で呻きを上げる五体の鬼。
さっきの力任せの太刀筋では殺すことなどできやしない。
しかも明確に殺気だけは解ってしまい。振り向く事なく苛立ちに任せ、自らの脇腹へ太刀を通す――ように、紙一重で通過させ、背後からの、太刀で斬りつけようとしてきた絹へ、黒霧異を見もしないで突き立てた。

「おふっ、これは痛いですね」
絹からありえない声がでる。

「殺気出すぎだ」

その言葉に、異なる姿の絹が嘲弄を露わにする。

「……いつから気づていたのですか？」

落ち着きある大人の女性の声が背後から寄せられる。
その声に力弱さは、微塵もない。

「――お前を見た時からだ」

絹の幻影の姿。
その姿は他人には見えてもシュラは見た事もない姿に他ならない。
シュラが見てたのは、いつも仮面を着けた絹だ。
これを作った弐癒芙もそういう風に作ったと奈奈は言っていた。
そんな異質な姿が、突然この状況で見れる訳も無い。

なにより父が言っていた――模倣の姿をする何か。
それが引っかかって、いつも警戒していたからこそのシュラの判断だった。

それらが導く答えにおいて、シュラは太刀に力を籠める。
絹もどきから叫びが上がる。

同時に、さらに次の一手を考える。が、どうした事か何も思い浮かばない。
代わりに浮かんだのは、坂に入る直前の奈奈。
あの時から奈奈が言っていた言葉。

――迷いなく全てを斬り捨てろ！

それがやけに頭に響いている。
何度も何度も、奈奈はこっちでも似たような言葉を告げてくれていた。
なのに……
――俺は彼女へ、一度も態度で返していない。
――大切な時に、まともに一回も意志を放っていない。
せいぜいが小学校で奈奈の前で勢いに任せて数匹の鬼と、有希奈の腕を落としたくらい。

「くそ――」また、指が震える。
しかも、気づかれる。

「なるほど、無邪気な心故に刃に怯えたか斬九郎」
「――!?」
「なら、噂程に危険視するべき強者とも思えないわね」

「……」
「牙影が陶酔してる男、蓬莱の斬九郎。次なる世救い人……月に猛る王。アレがそこまで逆上(のぼ)せるなら、さぞ力ある益荒男と思って警戒していたが。…あの駈月の件は、やはり何かの手違い、もしくは奴の油断なのでしょうね――ここまでお膳立てする必要はなかったか」

膨らむ殺気に、シュラは咄嗟に太刀を引き抜く。
と同時に崩れたビルから慌てて飛び退いた。
その足場が、ゴト、っ見事にスライスされたのだ。

「冗談じゃない!?」
――ゾッとする。

バラ、バラ、と横薙ぎにさせられたビルが、音を立てて砕け散る。
何がどうなってそんな事が出来るのかシュラには一切解らない。
少なくともこんな光景は見た事もない。

ビルに逃した視線を再び戻せば、残ったビルの上で絹らしき女の姿は崩れていく。
「お前……」
「ほんっと、……残念ですよ斬九郎」
きつく眇めるような細めの女性が現れていく。
白粉を塗ってるのか妙に白い肌。少し面長の女は薄くも長い眉からすらりと鼻梁を作って鼻唇をくっきりと浮かばせる。さらに長いのだろう髪を、頭部で幾つかに畳み止めている。弥勒の凛狂を思わせる美しい女性が姿を現せる。
しかも真紅に染まる小袖は妙に彼女には似合って――
「小袖の……女!?　この騒ぎに黒霧『異』を撒いてる女か！」
「よくご存じで。初めまして柊(ひいらぎ)の木葉(このは)……以後、お見知りおきを。もっとも……ほんの数刻程のお付き合いとなりましょうが」
「ふざけんな！　お前だな、あの餓鬼の亡者を造りだしてる奴は!?」

おや、っと美しい女が頬に人差し指を宛てて見つめてくる。
その美しくも黒い眼差しが、少しづつ眼窩へ広がっていく。
不知モノにみる……闇への変化。

そして女は言う。
「応える義理はないですが……まぁ、いいでしょ。ええ、私が子供を一つ一つ喰らって使役しています。この木葉。可愛い子供が、特に男の子が大好きなもので」
「男の子って……お前……」

戦慄するシュラに彼女は微笑む。
「大人の男はすぐに毛深くなり醜く崩れていきますでしょ。とはいえ女衆に走れば嫉妬に塗れる醜い女を見るだけ。なら女なども興味に値しない。ゆえに子供が好き。なら不知モノにした

い……魂を直接喰らう。二度と人に戻れないように――そう思って何か不自然でしょうか？」

「お前……魑魅……闇漂人なのか」

「ほんっと、よくご存じで」

泉に墨を流すように闇が色濃く周囲を覆っていく。既に陽の光はなく夜の様な様相に、ソーラー灯なのか、幾本の常夜灯が明滅を起こして光を放つ。

しかし魑魅から放たれる闇は、その光さえも飲み込んでいく。

「薄々皆で予想してたが……こりゃ……本物だな」

ついに相対する弐癒芙以外の、しかも敵意ある闇漂人。

天和を掌握している不知（シラヌ）モノの主。

そして師匠厳に、戦に手練れの闇漂人からは逃げろ……と告げられている存在。

言われた通りに正直逃げたいが。

絹がどこかにいる以上、ここから逃げる訳にはいきはしない。

彼女が小袖の懐を乱し、その異常な程巨大な乳房の膨らみを強調する。こぼれそうな程の胸は、ほぼ半分は大気に晒され、その淫らな姿態のままに飛び上る。さらに優しくシュラへその手をさしのべる。

見ているだけで見惚れそうな挙措だ。

なのに、全然嬉しくない。

切り裂かれるような、圧し掛かる程の怜悧な気配を如実に捉えたのだ。

シュラは反射的に横っ跳ぶ。

――ピィーン――

と、突然大地にカマイタチのような何かが通り過ぎた気がした。――いや、気ではない。確かに大地が抉れていく。抉れるどころかささくれ立つよう噴き上がり、大地に幾つかの隆起が起ってシュラを驚愕させる。

「このサイコなショタ野郎が！　そういうのをこっちでは腐――やばっ!?」
女がシュラの方へ手を向けていた。
彼女が奮ってから、大地がささくれだった間隔を正確に計る。
それを頼りに、「今か!?」感覚のみで飛び退き様、太刀を、

――横薙ぎ一閃――

手が、確かに何か堅い感触を受け止めた。
「なんだ、これ!?」
「あらら……ほんっと、弱いくせに意外とやる」
太刀が幾つかの重い衝撃を断続的に受け止めた。
それに引きずられ、浮いた体が吹っ飛ばされていく。
周囲に現れていた鬼が、その勢いに両断され、さらにシュラの左腕へ、薄らと四つの裂傷痕を浮かび上がらせた。
「――まずい、まずい、まずい!?」
見えない武器もヤバイが、魑魅の傷はヤバイ。
――こいつを殺さなければ生涯残る。
生涯シュラを苛み続ける。
胸元の、不知モノの女が着けた傷のように。
「女の攻撃って執念深いのかな、消えやしないし」
「あら、その不浄の傷も女性からですか？　安心して下さい、その傷も消えませんから」
「最低だな、お前」
ふっとばされるまま大地を削る現状に、一部、安全と思われる空間を見切る。咄嗟に身を捩じり、太刀でさらに弾いたままに大地へ身体を横転させる。
そのすぐ真横に何か、気配がよぎり。
大地が飛沫のように幾つも噴きあがって砕かれていく。
見えない武器。

奥から歩いてくる闇の鬼たち。
しかもボスは戦いに秀でた魑魅――闇漂人（ヤタビト）だ。

「ほんっと……最低だな」

その状況を見て、見えない何かに怖気を走らせるまま、シュラは跳ねて迫る木葉を、ただ睨みつけるのだった。

『――ふぉおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』

巨大なファンが大気へ音を響かすように。
その鬼は握った巨大刀を天へ翳し、隆起し躍動する筋肉を波打たせ、ただ一人、孤軍で奮闘するシュラへと執拗に躍りかかっていた。

地上から立ち昇る人肉が漂わす異臭と、冷めやらぬ熱気が天空に広がる闇雲に渦を作り、稲光を招いて轟音と共に地上へ一瞬の煌めきを送り続けていく。
闇に覆われた地で戦うシュラは、その光を太刀に浴びせて鬼を斬る――

「オオオオオオオオオオ!!」

光さえ吸い込むような闇に近づく太刀。
その不吉な太刀で迫る刃を躱し、振り下ろされた腕をシュラは力任せに斬り落とす。
怖気と悪寒、抱いたままの今にも砕けそうな精神で。絹を浚われたという怒りと、何もできなかった自分。さらに錬気もままならない自分に苛立ちを覚え、それを晴らすように遮二無二太刀を奮っていた。

乱雑に、走り抜け様に横薙ぎへ、さらに袈裟切りと立て続けに奮い続けてひた走る。

傍目にも重い所作捌き。
その太刀筋。

かつて糸のように美しい太刀筋は、今やシュラには微塵もない。

あるのは子供が焼けばちになって振り回す蛮行の象徴、ただ周囲を傷つける兇刃で。

走れば走るだけ鬼は集まり、会話も無く、吼える互いの絶叫が、未だに周囲で聞こえる爆撃すらを凌駕するほどがなり上げられていた。

そんな状況に、病院を襲った残りの餓鬼らが興味深げに瓦礫から顔を出すが。都度、木葉が繰り出す何かが邪魔だとばかりに粉砕していく。

「斬九郎……何故、そやつらに止めを刺さない」

刎ねられる腕。

噴き出す脇腹の肉。

少なくとも急所に入らない太刀筋が、胡乱とばかりに木葉の眼差しを嘲弄とさせる。

「その方、まさか怯えておるのか？」

「……」

ようやく語られ始めていく木葉の台詞。

それに応える事なく、シュラは鬼が布陣を敷いて守る木葉へ眼差しを向けた。

木葉の前に展開していく鬼たちの守り。

シュラは瞬時に周囲を把握していく。

陣形を作れば、シュラ目掛けて迫る鬼の群れ。その個々の動きを頭上から気配で捉えていく。

かつて高校でシュラが使った、周囲を、自分すら他人を観る様に掌握していく技法だ。

子供の頃から出来る存在の把握。

それらを元にタイミングを計れるよう走り位置を決め、シュラは真っ向から駆けだした。

迫る速度に、タインミングを沿わせ、力任せに撫で落とす。と、吹き荒ぶ黒紅の血飛沫が、まるで土砂のように切り口から流れ落ちる。

木の葉を守る正面の鬼が叫びをあげた。

連動して他の鬼が、左右に下がるよう鶴翼に陣形を敷いていく。その様相に相対するのが一人ではどうにもならないが。けど、シュラにも存在をなますに切り裂く太刀はある。

――結局、俺は太刀に頼るしか生きられない……

でも、思うように奮えない。
奮えば見える、両断した彼女の腕が。
飛ばされた彼女が。
風呂場で染まった血の掌が。
さらに彼女の有希奈の恨みの眼差し。
闇に沈む有希奈の姿が今でも見える。
太刀を放てば、放つだけ怯えが色濃く心へ宿っていく――

それが、再び苛立ちを沸して。

――いい加減にしろ！――

身体に不要な力を籠めさせ、シュラへ焦燥にも似た怒りを腹底から身体へ染みるように広げさせていく。それが蹴り足に力を籠める。

顕現しない錬気すら振り切るようにシュラは、

「ふざけんな、――やらなければ殺されていたんだッ!?」
つい、叫びのままに駆けだした。

それに崩れたビルの上から木葉は薄ら笑みを浮かべ。

迫る鬼。
「――ち!?」
咄嗟に思考を戻し、太刀を脇構えに移行する。
先頭の鬼から振るわれる大上段からの強靭な一撃。ほぼ直上から迫る大刀を、シュラは眼差しで殺せるほどに双眼を眇め、峰に片手を添えて受け止めた。

刹那の動き――

「――」
互いがぶつかる衝撃。
それにも苛立ちが沸く。

凄まじい剣圧に加えて超重量から繰り出される威力。巨躯の鬼に比べれば小柄なシュラは瞬く間に潰されていく。強靭な唐竹割りを流す事無く震える腕で受け止めたのだ。
いずれにしろ連鎖するよう左右後方へ展開している鬼の陣形は、先頭の鬼が足を止めた事により綻びが生じ、それでもシュラを取り込む様、歪んだ陣形でも左右から狭めてシュラを逃すまいと展開する。

つまり、陣形が崩れる。
全てが刹那の動きの中で行われる一陣の連携だった。

と、同時にシュラは広がる気配を、正面の視覚から、そして上空から把握。潰される威力に足を――踏ん張らず。潰されていくまま。走ってぶつかった威力も殺さず、押されるままに鬼の股へと滑り込む。
仰ぐ形のまま鬼の足を両断。
巨躯が大地に崩れ、そのままシュラは木葉目指して駆けだした。

高みの見物していた木葉が顔色を変える。
「斬九郎……ッ!!」
怒りに放たれた何かが鬼どもを次々粉砕させていく。

「やはりそれも黒霧なのか！」
「黒霧？……ああ、ヴェーダね。そうよ斬九郎、少なくともあんたのよりは使えるでしょ」

振るわれる指先。
ささくれ立つ大地。
その衝撃を予想すれば、嫌でも誘導されるように木葉の前に導かれていく。

誘われている――「――でも、そろそろネタが解ったぜ！」

木葉の指が捩じられ、一気にシュラを横薙ぎした。
対するシュラはタイミング見越して、迫る側面へ袈裟で斬る。

ギャン――

鋼鉄の何かを黒霧『異』が鋭く弾く、走って伝わる激しい衝撃。

と、同時にガシャンと重い響きを確かに腕も捉えて、それどころか威力を殺したが故に重量を顕著に太刀が示し身体を引きずる。
「このやろう！」
両足を踏ん張り、そのまま一気に大地に振り下ろして、
「やっぱり……」
雷光が、照り返させた光が黒霧の姿を一瞬捉えさせる。
「暗器系の武器で確か鋼鉄をも両断する……斬糸って奴だったか？」
キリリィ――っと大気を斬る、耳障りな音を伝えてくる。
「指先四本から伸ばした四連の糸だろ」
「そう思う？」
「ああ、思うさ！　漫画やアニメでよく見る鉄をも両断する細く鋭利な糸だ！」
そのまま糸を手繰るよう、太刀が伝う感触に合わせて駆けだした。
「ネタが割れたら、大した事ない！　このままお前を切り捨て、さっさと絹を助けさせてもらうぞ！」
太刀で押さえつけて糸の戻る力を制御して、一気に叩き斬る。
これなら相手がなんだろうが、そして怯えがあろうが居合も何もない。
それだけで終わるのだ。
ただ純粋にシュラはそう思った。
なのに、
「まるで子供ね……」
囁きに怖気を覚えて横っ跳ぶ。
だが、「!?」肩に、よりにもよって左肩に何かが貫通していた。
それがシュラの面貌を蒼褪めさせる。
「指……動いて……ない？」
女が微笑みを浮かべていく。

血のように赤い唇から、さらに赤くぬめる舌が現れ、下唇を妖艶に舐めとっていく。

太刀で押さえてた何かは、木葉から延びる何かと未だに大地に転がっている。それを輝く雷光だけが確かに見せている。

薄い、羽衣の様な何か。はっきり見た！

なのに、

「ば、ばかな……ッ!?」

――突然霧散した。

肩から飛んだ血の飛沫。

刺突された方向は背後、上空から斜めに貫通して大地に深々と穴を開けている。

「糸？　指？　あんた……本当の阿呆ね」

突き刺さった何か。しかし手で触ろうとは思わない。

なら太刀で両断したい。けど、同じ黒霧、斬り落とす事ができるか確証がない。下手をすれば硬質過ぎて、己の肩をも両断しかねない。さらに今のシュラは剣筋も悪く、太刀が振るうのに適さない利き腕の付け根をやられたのだ。

こんな物で得体の知れない何かを斬れるだろうか？

健は切れてないが、このままでは時間の問題だ。

それがさらなる焦りをさらに生む。

「この黒霧は糸――」

「……」

「――じゃない」

仰ぐ先、それは得体の知れない何か、木葉が放った狂気が落された虚空の世界がある。

闇の霧と、闇が覆う空。

そして木葉の周囲にも闇がある。

色濃い霧が創りだす漆黒の闇だ。

それが輝いているのだ。

そこで、「あ……」シュラは気づく。
けど、ありえない。否定する。
否定したくて、
「ありえない――」声に出す。
「ありえない？　戦乱の天和、その古来から続く殺人術が、貴方の常識で計れる程の底の浅い物だと思う？」
まるで肯定するよう木葉が笑う。

「そうか……それなら理解できる……信じられないが」
「そう、でもたぶん、それが真実よ」
「ついでにその指は、ただの――」
「ええ、ただ動かしてるだけ。馬鹿がこれで～って勘違いするのは、本当に楽しいわ。私ね、男の子を食うのも好きだけど、大人の男を滑稽に仕立てあげて、踊らせるのも大好きなの」
「最低だな、お前」
「ありがとう。もっと罵って、もっと悔しそうに。それが木葉への最高の賛美よ」

告げられた言葉に、身震い一つ、シュラは構わず駆け続けた。
四方、八方から殺気が飛ぶ。
肩に何かを突き刺され、それでも駆け続け、肩の中で撓んでいく姿に確証する。

「これは闇の――光。光の帯。無形で、なのに質量を持つ闇光の黒霧なのか……」
「ふふ、……正解。そうですよ斬九郎。姿なき存在にして。強大な武器。闇があればそこから光が放たれる闇光の黒霧……そして」

女が小袖の帯を外し、その豊満な胸を晒していく。
けど、シュラはいつものように視線を離すとか照れるとか、そんな挙措は作れない。
目を離せば恐ろしいから。何があるか判らないから。
――ではない。

身体に、異様を見た。
木葉の腹部から鳩尾にかけて。闇が楕円を描いて埋め込まれているのだ。
ただ、それは木の根のように食指を広げ、やがて腹部の周囲へ、紅い文字を作って浮かばせていく。

「梵字……黒霧に現れる文字――まさか!?」

「そう、我の名は木葉。黒霧『降』と一体化した使い手、降魔の木葉。そして、私こそが、月に猛る王を二回殺す者……」

「なに、どういう――」

木葉が、歪に拉げる笑みをシュラに向ける。

その刹那、それだけで、四方八方から降り注ぐ光が、シュラの身体を瞬く間に貫き吹き飛ばしていくのだった。

「さっきネタが解れば――と、仰っていましたが。幻の術ほどネタに困る技はありませぬ。ゆえに施せる者は先に使えば死に直結する事を熟知しているもの。それを先出ししてしまったのですから、これは揺るぎなく明確な死……それとも、それにすら気づきませんでしたか斬九郎……?」

ポタタ――鮮血が散る。

それは、悠然と構える木葉からの物ではない。

彼女はいま天空に仰向けで仰け反っている。

と、同時に木葉へ迫っていた正面のシュラが無数の光に射抜かれ霧散する。

凄まじい突風と、吹き飛ぶ塵芥。

噴水広場だった場所に放られた瓦解したビルの屋上。

シュラはその屋上へ立っていた木葉の側面に現れた。

乱れに乱れた錬気で無理やり起こせた早駆け、幻の仮面の力で姿すら消失させたシュラを、その力がそこまで導いてくれたのだ。

そこでシュラは着地と同時に彼女の側面に立つと、動きずらい左腕の腋へ通すよう刺突の一撃、彼女の左脇腹目掛けて確かに放っていた。

――だが、この結果だ。

血が、さらにボタタ――っと腹部から垂れ落ちる。

「がは……ッ!?」
しゃがむ姿で刃を向けていたシュラの腹部を、頭上からの一筋が見事に貫いていた。
それゆえに鮮血と――吐血。
しかも彼女はそれこそ光の速さで消失、天空に現れていた。
放っていた太刀の一撃、それは虚空に放たれている。これにはシュラも唖然とした。
「そんな物まで巻いてんなよ……」
両の乳房も露わに木葉が失笑を上げる。
表立っては上半身をまろみだす素肌での出で立ちだが、その実、光の帯を幾重にも体に纏って、身体すら光の速さで上空まで逃げおおせていたのだ。
ならば、そんな物が追いつける訳もなく。
無情にも、シュラは血だらけの刃で、木葉を支えた一筋の闇光相手に鎬を削る形になっていた。
まさに刹那の動き――
天へ体ごと持ち上げられていた木葉が小袖を乱して舞う様に降って来る。
「がはッ、げへ!?」
「おや、かなり致命的ですか？　もう少し楽しみたいのですが」
幾度も、幾度も噎せて、その度に血が漏れる。
大気に同化する見ずらい糸程の闇の輝きがシュラの腹部を掠めている。それが引き抜かれ、前傾りに倒れ込むシュラの首を狙って、上空から木葉が闇の光で撓りを効かせて叩きつけてくる。
咄嗟にシュラは跳ね飛んだ。
かろうじて一撃を避けるが、大空から、漂う靄から、果ては瓦礫の影から迫る闇の輝きはシュラを執拗に狙って縦横無尽に責め立てる。

肩から噴き出す止まらない血飛沫が、蒼色の輝きを迸らせたのはこの瞬間だった。

その輝きが、一瞬闇の輝きを揺らがせたのだ。
まるで、それだけが闇の輝きを砕くように。

「――え？」
咄嗟に身をひねり、噴き出す血で迫った一本へ当ててみる。
見えずらい光。
確実に迫る攻撃。

だが、それはまるでぷつりと切れたように蒼光の前に霧散した。

――何が、どうなった？
でも、考えてる暇がない。

着地した木葉はシュラに背を向けた形で微動だにしない。
着地と同時、シュラは遮二無二駆け出した。が、そのタイミングで木葉が指先を、シュラの幻影が撃ち抜かれた場所目掛けて奮わせる。

対してシュラは彼女から遠ざかるようにビルの屋根を力強く蹴り放った。
瞬く間に迫る闇光、それにビルの床が抉れていく。

見る事無く駆け出すシュラ。
刀を口に咥え、駆け続け。

無数の追尾レーザーの如く迫る狂気から、逃げる様に駆け抜け、強制的に間を開かされていく。しかしそのまま避雷針に飛びつき、威力に回転起こして一八〇度反転。
光の流れた先を見る間もなく――

「――早駆け――」

叫ぶ言葉に加速した。
もう制御もできない錬気に頼り、前のめりに吹っ飛ぶ形で、身体を一回転させながら、彼女の右肩へ袈裟切りで黒霧『異』を切り落とす。

「ぬるい……」
見もせぬ木葉が両手を背後へ上げ、両の手の間に伸びた闇色の光が掴まれ背後で盾と成す。
ギャリリリリ――
耳障りな音がシュラの耳朶を激しく揺さぶった。
「おそい……」
木葉が呟く。
と、同時にシュラは横っ跳ぶ。
伸ばしたバネをいきなり弾くように、まるでムチの如き光が撓(しな)りを効かせ、シュラへと叩き落とされたのだ。
サルのように飛んだ姿勢で闇光を弾き、着地と同時に身を下げて素早く彼女の懐へ飛び込み激しく攻める。
――が
「殺気が足りない……」
彼女はシュラが狙った足元への薙ぎを軽くジャンプで躱し、握った光を再度ムチのように落ち降ろす。それをシュラは弾き、突き、彼女は闇光を回転させて突きすら瞬く間に防いでしまう。
「なんだ、お前!?」
「はん、斯様な剣技で、この木葉を滅せるモノかこのど阿呆が」
異常な殺気。
咄嗟に背後へ飛ぶと、左右上空から光が幾つも降り注ぐ。
背後へ幾度も飛んで、間に合わないのは太刀で弾き。
――ガラ
足場が、脆くなった瓦礫が崩落を起こしてシュラの着地点を奪う。
「しま――」

言葉の中で、太刀が光に弾かれ飛ばされてしまう。

「獲った――斬九郎！」

迫る光の渦。

咄嗟に錬気の爆発を狙うが――でない!?――横転し、迫る光が降り注ぐ。

それは、一太刀浴びれば生涯消えない傷を生む呪詛の刃。

奮うのは不知モノすら使役する冥廟門の魑魅――闇漂人。

それらを殺すのがシュラの存在する意味であり、怯えれば瞬く間に窮地に落とされる。

理解していた。

していたからこそ、一つの結論へと至っていく。

――弱ければ、殺される――

それは天和では日常的に行われる常套の決まり事。

切り殺された者は被害者ではなく、ただの弱者。

もし、刀を持って誰かを守る存在となるならば、弱いだけでは済まされない。それは周囲を巻き込み守ろうとした者にすら恐怖と死を与えてしまう。

山狩りで、シュラが絹を守れなかったように。

まさに罪人に等しい存在に成り果てる。

剣を持つのは、それだけの意味が其の両肩に掛かって来る。

そうならないように、巌の元で修行を志した。

なのに――。

蠢く運命に翻弄されて帰還してしまった世界で。初恋の者の惨劇に、割り切れず――また、ここで周囲の守るべき存在を置いて、彼女らへ恐れと死を招く事態に陥っている。

今のシュラには絹だけではなく、姫も従者も、そして奈奈すら守らなければならないのに。

有希奈の惨劇すら、心を殺してでも見捨てなければならなかったはずなのに。

頭では少なからず理解をしていた。
なのに彼女を斬ってしまった事に怯えて、錬気すら満足にだせず、太刀の心すら殺してしまっている。
それが、ようやくシュラにも認識出来たというのに。
まさにこの瞬間、死が突きつけられている。

強くなければ殺される。
それを体現するように。無数の雨のように。
今まさにシュラの身に降りかかろうとしている。

もう今さら、横転したシュラではどうにもならないが、
ただ見つめる先から訪れる狂気に、

「――ちくしょぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

そう叫ばせるだけが精一杯だった。

奮迅空しく絶叫したが為に、虚空へシュラの叫びが木霊していく。

着弾と同時に、沸き上がった轟雷のような音。
噴きあがる土砂は周囲の大気を激しく揺らして、その凄まじい威力を物語っていく。まさに間欠泉のような景観で、木葉の嘲笑がたただただけたたましく飛散する。

「ハハ――まさか、本当に二度も月に猛る王を殺す事になるなんてね。あの男が崇拝するから如何程の男かと期待したが、まさか太刀に怯え、さらに満足に剣技も出来ないただの餓鬼だったとは笑わせてくれる――この木葉、蓬莱の斬九郎打ち取ったり」

幾度も、無尽蔵に、姿なき黒霧『降』の力を使い続ける。
まるで肉片すら残らないように。
大地すら地底奥深く砕くように。

木葉は踊り、それに呼応するよう闇色の光が降り注ぐ。
遠く爆撃の続く世界を見ながら、堕ちる寸前の日本の首都中枢の崩壊を背後に、笑う木葉が使い続け。
やがて、その攻撃の全てが終わると――

――ぴしん――

その眉間に、何かが確かに当って地面に落ちた。

「え？」

落ちた白い物体。

それに視線を落として木葉は、ただ睥睨する。

どうみても、どう眼差しを眇めて見ても、それはただの白のチョークなのだ。

……どこから？

そんな思考の果てに。

「あんたの口車にのって、お気にのお洋服が砂まみれですん！」

場違いな、鼻にかかる甘ったるい声が粉塵の中から響く。

「な、なに――？」

木葉の唖然とした声。

だがその声は、こんな荒廃とした世界に、不似合な涼やかな印象を与える声にかき消されていた。

「まぁ、そう言わないで。これも我らが王の為ではないですか」

木葉が薄れる砂塵に見たのは桃色ブラウスに黒のミニスカート。

小さな所作に扇情的な仕草は、木葉よりも巨大な二物が必ず音を立てて揺れていく。木葉の妖艶な色気と違う、噎せ返るような過剰な色気が、隠す気も無いらしく場を飲み込み、降臨した姿態も見事な女を際立たせる。

そして彼女は不平に口を尖らせると、掌に白のチョークを幾つか跳ねさせ優しく握る。

それが瞬く間に一つの塊。

圧縮された状態で掌に現れた。

「王の為？　あんたが連れてきちまった従者ですん。自分のケツは自分で拭きやがれですん」

「出来ればそうしたいですが、彼女――どうやらどっかの闇漂人らしくて……むしろ貴女が適任でしょう？」
「失礼な男ですん」

そこで、ようやくシュラも眼差しを開いていく。
と、同時に唖然と眼を見開いた。
そうするしか、他に方法が思い当らないのだ。

「おや、お目覚めですか、我が君？」
直上で振り回して光の斬撃を全て防いだのだろう幅広に伸びた黒霧『異』が、静かにシュラの脇へ降ろされていく。

「な、なんで……あんたが、それに、何でお前もいるんだ!?」

シュラの言葉に男は嬉しそうに相好を綻ばせ、女はただ鼻を鳴らす。

「牙影の……黎弥……。それに――」

――なぜ、この女がここにいる。

牙影の隣で佇む存在。
それはかつて出会った弥勒の駈月の姉にして妖艶を漂わす凛狂。それに似た、シュラがもっともこの世界で逃げ出したかった存在――

「黒織部……先生……」

禄武シュラの担任黒織部彩香二十四歳が、髪を掻き上げていく姿だった。

フェロモン教師、市立木白高校担任黒織部彩香（24）が瓦礫と崩壊した東京の真ん中で立っている。
舌足らずな鼻にかかる甘声で、カールを捲くブラウンヘアーを掻き上げる。たれ目を覆う長い睫が印象の、小顔の美女教師。かの弥勒は駈月の姉、凛狂と瓜ふたつの相貌は、シュラに未だに疑惑を抱かす程。せいぜいの違いが髪の色くらいなものなのだが。

そんな彼女が、軽くシュラを一瞥する。
その眼差しは少しまともじゃない。
まさに転がる豚を侮蔑と嘲笑で見る女王様のように、見下しと、甚振りを切に望む眼差しで、そんな物を一瞬浮かべ、すぐさま慈愛の微笑へすげかえる。
全校でも羨望の女教師から、踏まれることを自ら望む男子は数多いが。
少なくとも今のシュラには恐怖の対象だった。

「女、何者だ貴様」
木葉が突然現れた黒織部の一点を眺めて冷たい声を垂らしてくる。

「私ん？　黒若葉彩香と申します。市立木白（もくしろ）高校で教師やってるんですよん」
「教師だと……」
黒織部を狙って放たれる光、それは確実に彼女の胸部を狙っている。が、頭上で太刀を回していた牙影が稚戯とばかりに薙ぎ払う。
木葉が舌打ちをした。
そして牙影に向き直る。
「……貴方様もこの東京に来られてるとは思いませんでしたよ」

「木葉、お前の使命は一命をもって我が君を守り覚醒させる事だ。なのに、よりにもよって鉾をむけるとは、この愚か者が。貴様、もともと我が国に使える気も無かったな」
「応える義理はないでしょう？」

頭上から放たれた光の全てを弾くという荒業を見せた秀麗な公家だった男、牙影の黎弥。
長身痩躯の出で立ちながら、不釣合いな隆々たる筋肉が脱ぎ捨てたジャケットの中から露わになる。膝裏まで伸びる流れる様な銀髪、絶えない笑顔はこの状況ですら何とかできる自信の表れなのかもしれないが。
いまだに頭に乗っけている野球帽だけが妙過ぎて、シュラには今の彼の姿にも、この場にも、酷く不似合いだと思えた。
そんなシュラへ牙影が声をむける。

「我が君、遅れた事をひらにご容赦を。斯様な事態は予見し、貴方様とお連れを駅から見守ってはいましたが……途中で見失い、このような事態だというのに、即座に馳せ参じる事すらままならなくなり、今に至ります」

「いや、なんとなく来てるのにはきづいてたけどさ」

電車の気配――それはすぐに思考に乗る記憶だ。

だが本当にこの男が味方なのか敵なのか。

それだけは未だに判断つきかねる。

もっとも……それはすぐ解るような気もしていた。

「なぁ、牙影さん。やっぱり貴方が木葉を……？」

「面目次第もございません。お察しの通り、私の従者としてこちらに向った者の一人です。が、坂の途中で足を踏み外して行方知れずになっていました。私どもがこちらに現れた時には、時の湾曲でもしていたのか。木葉は時の流れに捲かれて私よりもだいぶ前に到着。こちらで暗躍していたようです。これも……全て私の責任です」

口惜しげに牙影が木葉を見ながら小さく頭を下げるが。

シュラは思う。

牙影よりも前にあの女がこの世界に到着してたというのなら。一体いつからあの女はこの世界にいたのだろうか、と。

少なくとも牙影は、シュラたちよりもだいぶ前にこの地に来ていたのだけは事実だ。

彼がこの地へ連れてきた従者、木葉。

その正体は魑魅の闇漂人。

そんな存在相手に適当なノリで相対すれば、瞬く間にあの女は牙影の命を奪うだろう。

そして牙影も本当に太刀をあれに向けるなら彼が味方かどうかもはっきりする。

「あの愚か者は、私どもが責任を持って処分します」

そう告げ、牙影は太刀を木葉に向ける。

「処分？　愚か者のお前に？　本当に直上馬鹿ですね・き・ば・か・げ・さ・ま。わざわざ月に猛る王が生誕した国へ木葉を招き入れただけではなく。本来の王もこっちで討ち取らせてく

ださり、のこのこ現れたこいつもここで死ぬ。挙句鬱陶しいお前もここで滅びる……全ての流れは私に向いている。貴方程度にこの降魔の木葉が討ち取れるものですか」

牙影の太刀など物の数ではないとばかりに余裕綽々高説をたれる木葉だが。

それに牙影は一手を放つ――事無く、首を傾げた。

「……どういう事だ？」

「なにがでしょうか？」

「本来の王……うんぬんだ」

「あん？　お前も疑っているのだろう」

「意味が解らぬ」

「解らぬ……？　あの山狩りですよ」

牙影の太刀が、かすかに揺れる。

「……本当にあの王は死んだのか……」

告げられる言葉に牙影が銀髪を揺らす。

「禄武、シュラか……」

「ええ。誰も死体など見てはいないのですから。仮に生きていれば……闇漂人にとって危険な因子の一人です。そして斬月の村に現れ、羅刹行（らせつぎょう）と化した駈月すら一度は屠（ほふ）り、さらに命を授けた蓬莱の斬九郎。この男からも確かにシャクティの片鱗を仄かに感じる。ならば、この者も含めて、新たな月に猛る王は現段階で二人も存在する可能性が現れてしまうのです」

黒織部が話を聴きながらシュラの身体を起こしていく。

鼻孔を擽る柔らかな香りが全身を包み、豊満な肉体は柔らかくもシュラを絆していく。しかしそんな感傷に呑まれている場合でもない。

眼前の牙影へ笑う女は、紛うことなき魑魅なのだ。

油断すればまたどこから光が飛んでくるか判らない。

ゆえに警戒を露わにシュラは太刀を拾い握りしめる。
しかし、その前で牙影が言葉で木葉を切り払う様に強く言い放つ。
「そうだ。だからこそ、この御方は希望！　ならば覚醒するまで私が守らねばならん」
「そうですね。ならば逆に問いましょう。もしもその男が王でなければ、貴方様ならどう動く。誰を守ろうとなさいますか？」
「な、に……？」
「もしもその男が王でなければ、お前はどうする気だときいているのだよ牙影の黎弥」
流暢に丁寧な言葉が、牙影へ乱雑に突き立てられる。
それに眉目秀麗の男は鼻を鳴らす。
「下らん、ただの言葉遊びだ！　片鱗がある以上、彼も王の者。ならば守る、それだけだ！」
「違いますね。貴方はその男がニセモノであると分かれば放るでしょう。そしてわき目もふらず、確実に山狩りに合ったあの男の生死を探そうとやっきになるはずです。その為なら貴方様は国元なども放りだし、下手をすればさらに諸国を回りだすかもしれない。この木葉、確かに彼の首を狙っていますが、そんな無駄な徒労を随伴するのは御免ですよ」
「だから裏切ったか」
牙影は、ふぅ、っと強く息を吐き捨て八相から脇構えへ構え直した。
「その可能性は、ある」
「でしょ？　だが、そんな回りくどい方法をしなくても、禄武シュラを見つけ出す良い方法を書物が教えてくれたのですよ」
「お前の言い方は逐一論点を外して聞き取りずらい。はっきり言え！」
相対する二人。構えの無い天衣無縫の木葉と、脇構えで瞬刻の攻撃を予見させる牙影。
それに、ケラ、と木葉が笑う。
「伊賦夜の坂は、月読において守られる月に連なる闇の道。故に朧。儚く乱れ、時流の流れが坂本から頂きまでを乱している。そこは神仏すら恐れる時砕きの坂……」
「そうだ。時が乱れている場所だ」

「正しく抜けるには、門を開いた珠がいります。だから、貴方様より後に出口を抜けた。木葉の持つ珠の力で、皆様が出現するさらに前、過去へとぶようにして」

「何のために……」

「言ったでしょう？　貴方様の徒労の随伴は御免だと。だからそうならないよう、この地獄の地から天和へ向かうはずの王を……禄武シュラを――」

「あッ!?」

そこで声をあげたのはシュラだった。

父から聞いたシュラの死。

崖に落ちたもう一人のシュラ。

その死体。

話を聴けば、警察は自殺と認定してマスコミまでを巻き込む騒ぎに発展している。

だが、その中で銅羅はさらに疑念を招く言葉をシュラに放った。

『――殺されたんだ――』

太刀を握る剣術家ゆえに、落下して崩れた身体といえど刻まれた刀傷が創る切り口を一目で見抜くのは造作もない。特に殺人の剣を代々伝承していく者なら猶更だ。それゆえに、警察とは違った見解を得てあの時シュラに告げたのだ。

そしてさらに前、シュラや牙影より先に、遥か前に過去へきていた木葉が存在するのなら、そして木葉が社にいたとしたら。そこでシュラを惨殺したと言う気なら、彼女の言う様に天和に禄武シュラは存在しなくなる。

となると自分は一体どういう存在になるのだろう。

まるで別の世界のシュラ――パラレルワールドのシュラが死んだと聞かされたようで、シュラも疑問をよぎなくされる。

だが、別の世界のシュラが死んだというのなら、父の話しも頷ける。

と、同時にそこらから何故これだけ闇の鬼が増えたのか。さらに餓鬼が群れているのか。まだまだ疑問は多々あれど、一応の謎に結末がでた。そうシュラも幾つかの辻褄があうのを感じていた。

そして皆がシュラを見る眼差しを踏まえた故に、シュラは尋ねる。

「お前……禄武シュラを、天和に行く前のあいつを……胸に一撃くれて崖から落としやがったな」

放った発言。

それは以外にも木葉から感嘆の声を招きあげさせた。

「本当に、よく知っているな斬九郎。まさにその通りよ。禄武シュラを殺した山。そして築かれていた古の社、あそこは坂本へ至る根の国は堅州国の出発点。なら、確実に伝承にある者は春嘆きの宵月の儀に招かれ、それ故にあの地を踏む。ならば木葉が待ち構え、後は坂の途中で襲えば済むだけの事」

そうして殺した。

……なるほど。

それならばとシュラも納得する。

だが、そうなると腑には落ちない事がさらに幾つか湧き出す。

まず、今の自分は何なのか……だが、それ以上は思考が許されなかった。

「お前もここで死ねば天和の闇漂人は安泰なのよ斬九郎。全ては牙影、天和を愛する貴様が木葉をここに招いてくれたお蔭だからだ！　恨むなら、その男を恨むのだな。そして見ろ、この世界を――」

広げられる両手、酔うように、まるで天の神々へ地上から嘆願する巫女のように、その女は哄笑も高らかに絶叫した。

「この地は中枢をせめてやれば、ぞんざい脆かったぞ。こちらの兵は皆弱く、さらに頼るのが火薬とよばれる鉄の弾を弾（はじ）く稚児（ややこ）をあやす玩具ばかり。みろ、この夥しい死体を。仰いでみろ、この崩れた建造物のなれの果てを」

闇の光が遠くビルをなで、それは音を立てて崩落し滑り落ちていく。
しかもその巨大な落下物を光は掴み、持ち上げ、遥か遠方だったこの公園までふきとばしてきたのだ。

衝撃にふっとばされるところで、シュラは黒織部にしっかりとつかまれていた。

……なんだ、この違和感は。
一瞬浮かぶ、不安。
それの意味する事にシュラは気づけない。

「手土産にこの地も世界も全て我らが掌握してみせようぞ」

闇に煌めく何かが降り注ぐ。

「これは、まずい」
あまり拙くなさそうな声音で、牙影が無数に迫る光を太刀で弾いていく。

「三鈷杵は何をやっているんだ、王をこのようなところで一人にさせるとは！」
「さ、三鈷杵さんなら病院で守りの結界を――」

黒織部は牙影へ告げたシュラの唇へ掌を宛てる。

「話は後でしたらん。とりあえず斬九郎ちゃん、死にそうだから、ここから逃げましょうか」
「ふざ、ふざけんな。ここにはき――」ぬ、と名前が出せない。「連れがいるんだ！」

「連れ、ここに？　黎弥、感じるかい？」
「いや、ここに生者はいない。誰かいるというのでしたら、すでに骸にされたか、最初からここに連れて来られていないのではないですか？　彩香――いいから王をどこか安全な場所へ！」

黒織部の言葉に否定を入れて牙影が行けと、言い捨てる。
シュラは震える足で相対しようと向かうが、――襟首を掴まれる。

「いいから、彼に任せなさいな。こっち、任せちゃっていいわよねん」
「もとより」

牙影が帽子の唾を深く沈め、太刀を回転から一閃、放つ剣圧で雲間に光を作り出す。
その凄まじい剣圧を前に、シュラは唖然と牙影の実力をしる。

相対したら……勝てない。

その一振りで、肌の毛を立たせてそう認識したのだ。

「ち――」
舌打ちは木葉。
突然闇光が止んで、牙影は八相に構え、跳ねる――

「は、早い!?」

シュラですら呆気にとられるほどの踏み込みで木葉に迫る。
瞬く間に詰める間合い。
だが、その直前で牙影は身を宙へ翻す。

塞がっていく雲。
それに危険を察知したのだろう。
蹴った足場の前に。クモの巣のように闇色の光が張られ、それが牙影のいた場所へ迫っていたのだ。
しかも牙影の動きに瞬時に反応、闇の光は拡散する。

身を翻す牙影が懐から鏡で、その一筋に当て、反射、湾曲させて木葉に浴びせかけた。

だが、その光を木葉は平然と受けた。

「牙影様、黒霧が担い手を傷つける訳ないでしょう」
「ええ、もとよりですよ木葉。ですが、間は詰められた」

シュラでさえ間に入る事に苦労した光の帯を使う木葉に対し、一切憂慮なく責め立てた牙影

は、着地と同時に一足で間を詰め、その握った幅広い黒霧で――一閃――木葉を両断する。

……

「残像か!?」

虚空を斬る。

「――知ってるでしょう、この黒霧『降』そこらの黒霧と少々違うと」

ヒラリと躱す木葉が宙を舞いながら、めくらめっぽう光を放つ。

幾つもの光を太刀で払い、防ぎきれない物は牙影は掌に収まる鏡で弾き続ける。

シュラが黒織部へ問う。

「あれは、魔討津の鏡か……」

「そうよん。そんな事より、移動しましょうかね」

「だ、だけど、幾ら牙影さんでも――」

「今のあんたよりは数万倍はマシだよ斬九郎ちゃん。太刀や刃、奮う事に怯えてるあんたじゃ、女の姿というだけで、斬れる機会が出来ても斬れやしない。ちがうん？」

「――」

まるで、筒抜けの様な言葉にシュラは息を飲むしかない。

「はっきりって、今の君は邪魔なのですん～」

襟首を掴んだまま黒織部が跳ねる。

その異常な跳躍に、シュラは目を剥き、襟首掴んで軽々と跳ねる女教師にただ恐れを抱いて凝視する。

――なんなんだ、この女。

そうとしか思えない。

さらに公園の外、気配を感じた。

「なにかくる!?」

人影が二つ現れ、シュラと黒織部に追走してきたのだ。

「誰か追いかけてくるぞ!?」

「ああん？　大丈夫よん。彩香ちゃんの手足になってもらってる子たちよん」

「手足って……」

急難の場から離れた事により、闇が色濃く含む大気が薄れていく。

それに伴い、その二人の姿から、かつてシュラが天和で着込んでいた市立木白高校の制服を纏う男子生徒二人だと気づかされた。

しかも覗いた顔に――

――まさか、柿崎と、猫谷!?　なんでこいつらが!?

それは、シュラが在籍していたクラスメートの二人だった。

かつて柿崎はシュラが小学校の頃に友達だった事がある。

だが、『成績悪いお前と関わると女子にもてん！』その発言と共に高校進学後、シュラと同クラスになっても、まともに会話すらしなくなっていった。

それでも数少ない会話をしていたかつての旧友の姿にシュラはただ唖然と黒織部を振り仰いだ。しかも柿崎、猫谷、この二人から、微弱ながら闇の霧が漏れてる気がしたのだ。

なのに向けた双眸の先で、黒織部は一切の感情を面貌には宿していない。

代わりに向けられたのは冷たい眼差しと冷笑だった。

「こんな世界になっちゃってるからねん。学校は子供を守りましょうの観点から休校になっちゃってるの。でも、彩香ちゃんは手下が欲しくて、だから彼らを傀儡にさせてもらっちゃったのよん」

「たのよん――って、あんた」

柿崎と猫谷が前を走る。

そのまま握るナイフで、瓦礫から現れた餓鬼の亡者を両断していく。

「一体……なにがどうな――がはっ!?」

シュラが噎せる。

その口腔から吐かれた唾液に血が混じる。
みれば、腹部の貫通した跡から血が滲んでいた。

吐血したシュラを遂に抱える黒織部が、瓦礫の中で二人へ指を手繰り、それだけで二人は止まり、跳ねる様に場から飛び退いた。

「不知モノ同士、殺し合ってるだけよ。それより酷い傷ね。病院まで行こうかと思ったけど、とりあえず応急処置だけでもするしかないか」

肩、腹部、垂れる血のみならず、傷の周囲に色濃い闇が浮いている。

「くそ、瘴気の切り口か……」
付けた者を殺さなければ生涯残る闇の呪い。

だが、そんな発言を黒織部は訊いていなかった。
すっ――と、伸ばされる掌。
それはまっすぐシュラの面貌へ向けられていた。
まるでそうする事が当たり前かのように仮面へ手を掛けられた。

剥がされていく弐癒芙の作った幻術の仮面。
あまりに自然な動きに払う事すらシュラは忘れ。
気づけば仮面が離される。

そして日の元に露わになる面貌へ。
一切動揺無し、さも当然ね。
とばかりに――

「おはよう、オールレッドのキング様」

黒若葉はシュラへ告げたのだった。

第弐幕：美幼姫の亡骸と共にシュラは伊賦夜坂を昇り根の堅州國――地獄を目指す！

――：完